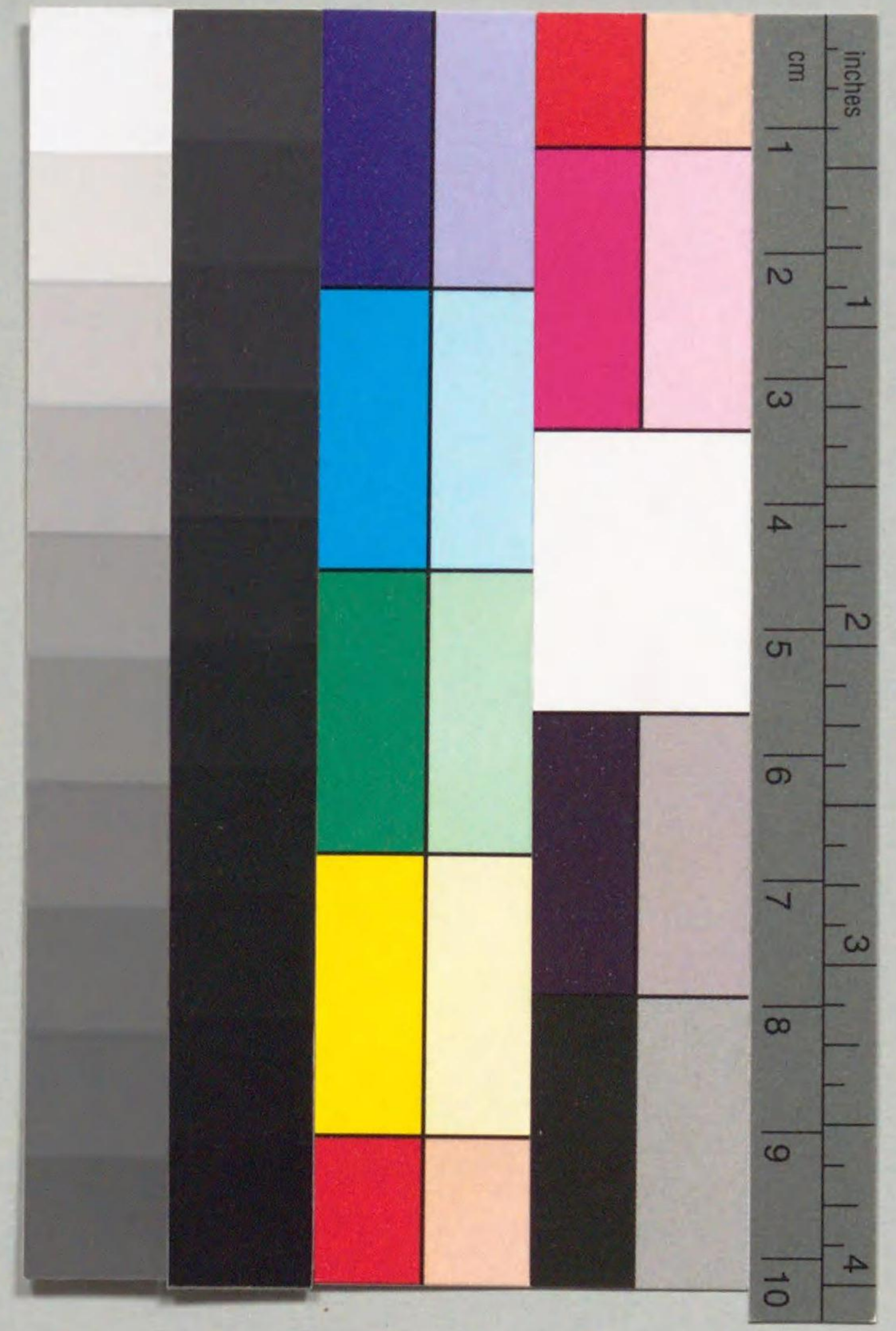
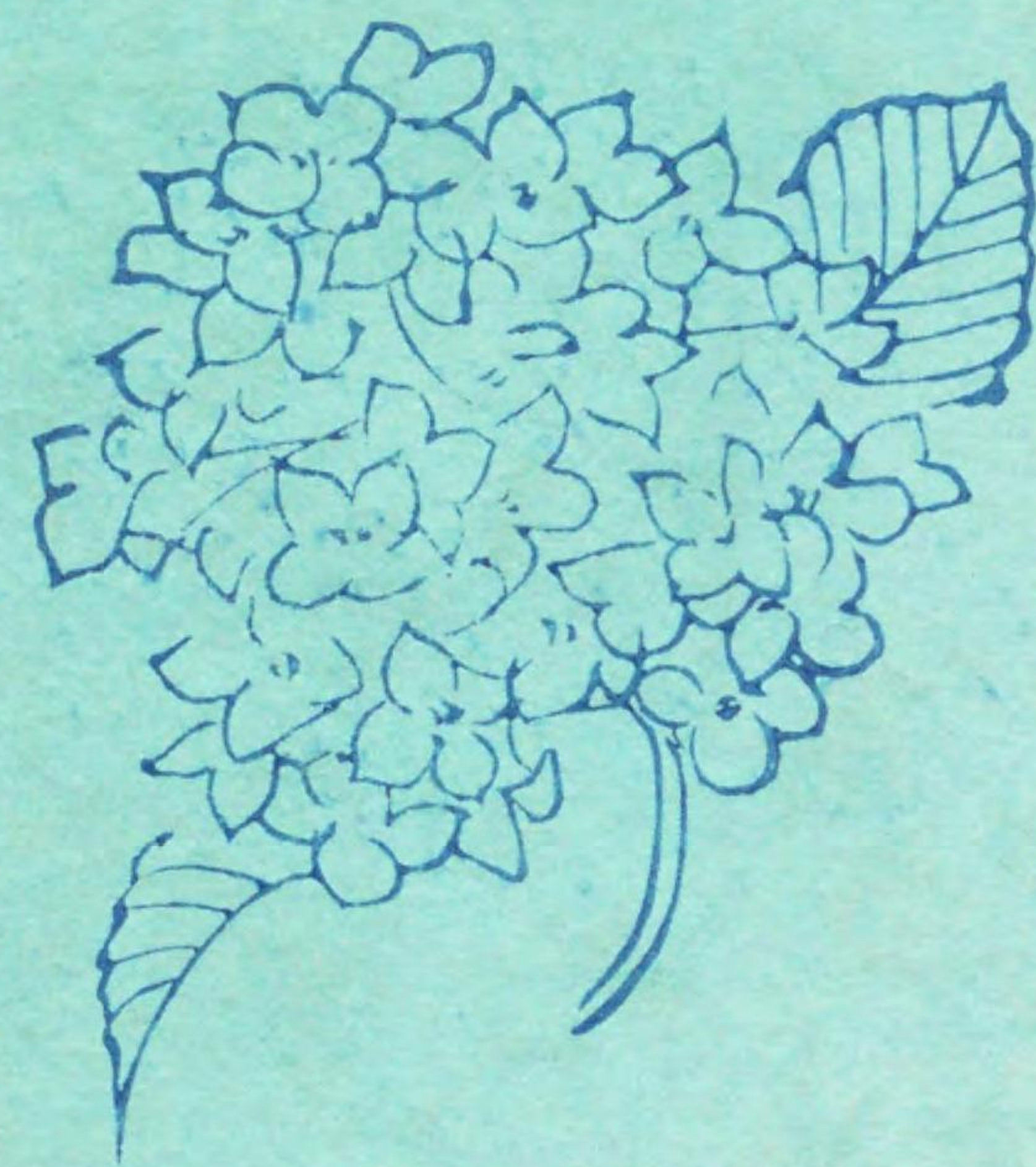
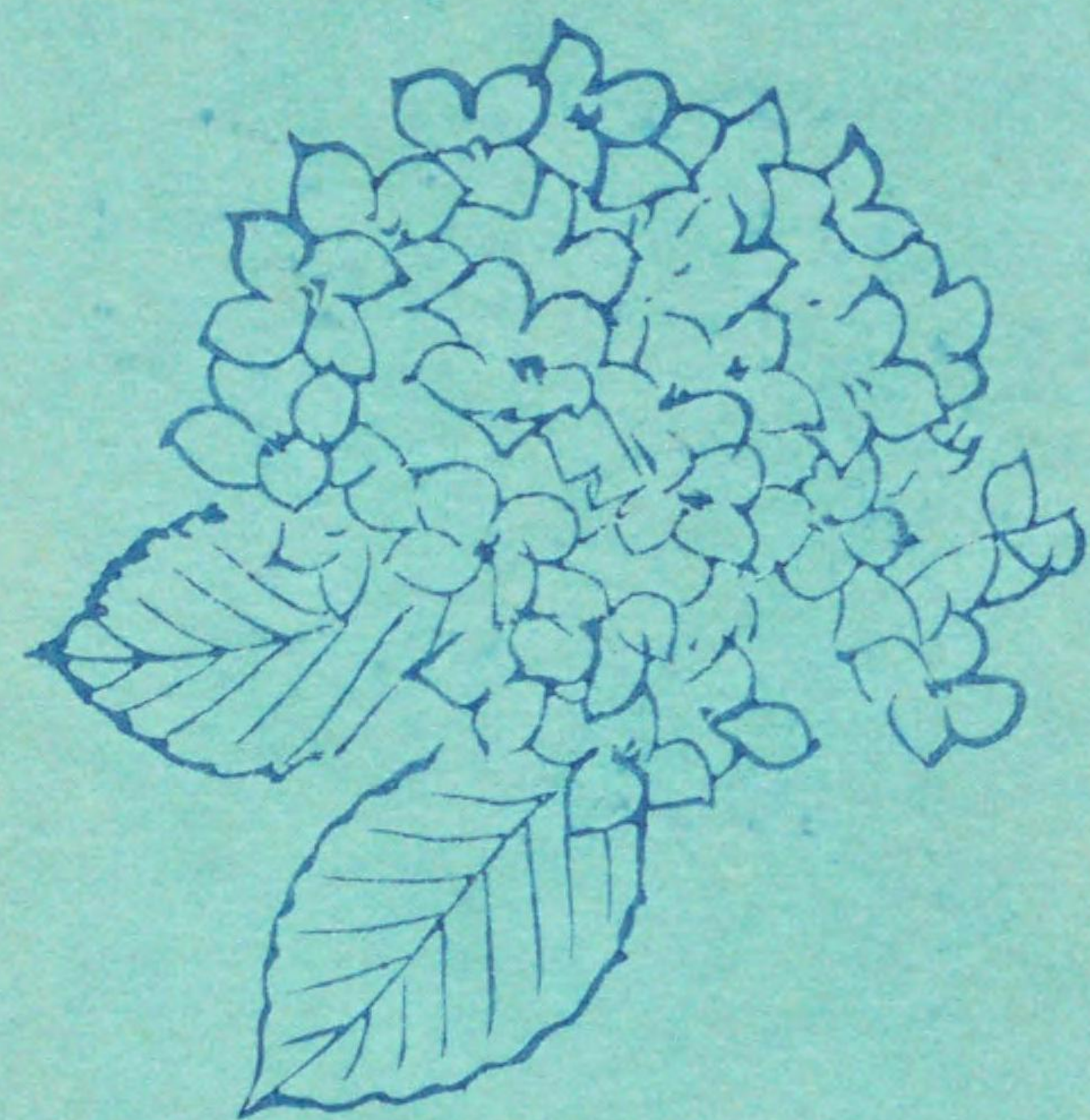


918.6
1989k



00252003







讀

心

全集

出典

2007.09

918.6
I 989 長



252003

目次

無憂樹 (明治三十九年六月) 一

お辨當三人前 (明治三十九年七月) 一九

春晝 (明治三十九年十一月) 三五

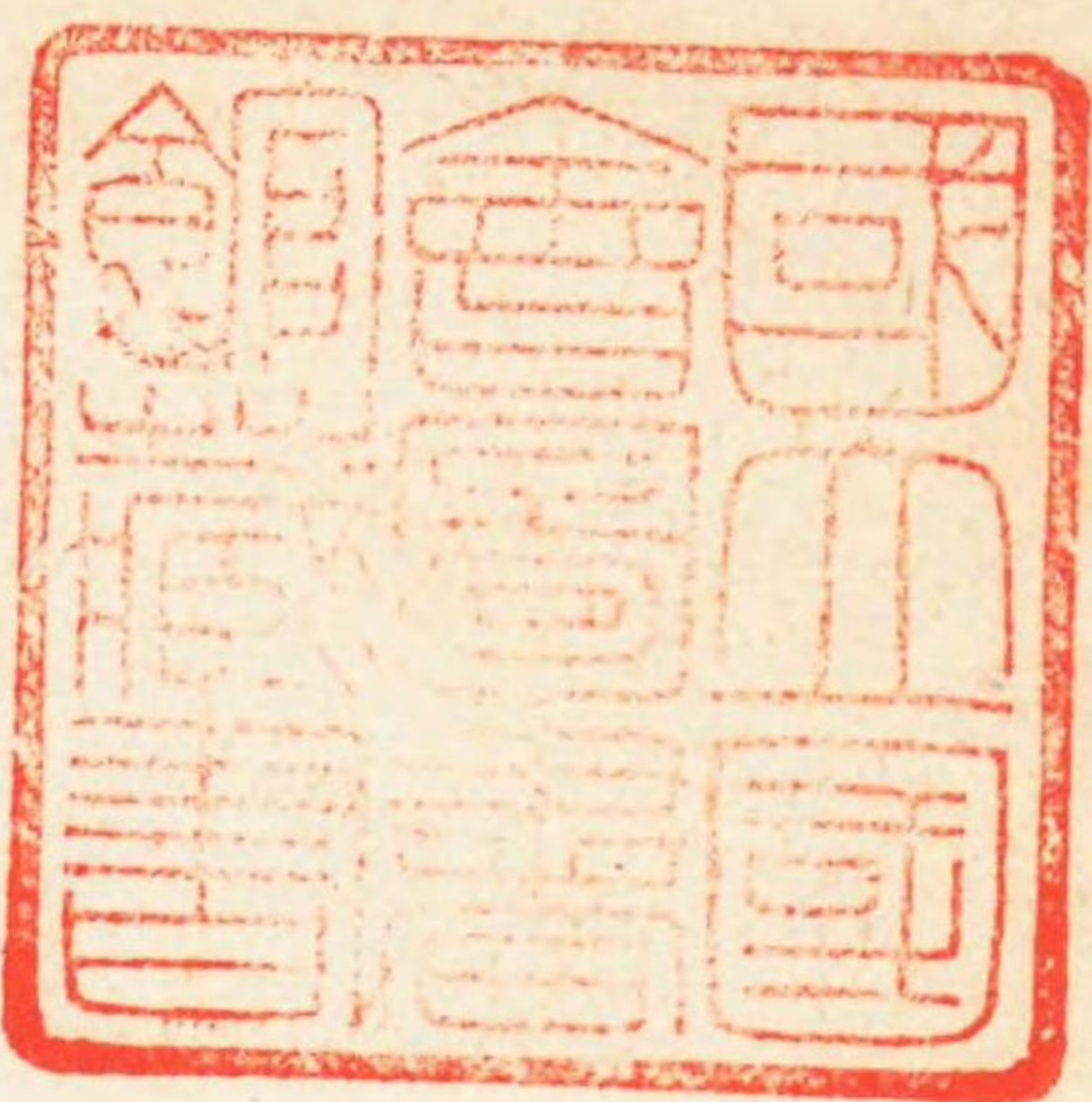
春晝後刻 (明治三十九年十二月) 六七

婦系圖前篇 (明治四十年一月) 三五

婦系圖後篇 (明治四十年三月) 五三



無
憂
樹



花鳥たがね 玉の臺 田原平兵衛 鬼門 扇屋、ひな唄 辻占

扇折 矢羽の簪、むし眼鏡 花一輪 惑星 花園、宮殿 ひとり寐

投松明 刑事部屋 まぼろし 東條判官 しるしの松 白き炎、

月裏法廷

其樹安住。上下正等。枝葉垂布。半緑半青。翠紫相暉。如孔雀頂。又甚柔輦。如迦鄰提衣。其花香妙。聞者歡喜。摩耶夫人。安庠漸次。至彼樹下。是時彼樹。以於菩薩威德力故。枝自然曲。柔輦低垂。摩耶夫人。即舉右手。猶如空中出妙色虹。

花鳥たがね

一
砧打つや、孫六屋敷、志津屋敷、美濃路にかゝりて、と前書した、それは昔の刀鍛冶、これは伊勢なる打金匠。

御縁頭目貫など、武家の註文引きも切らず。門に鳥毛をたてさせて、一頃きこえた細工の上手。白銀師兼長、と軒に草書の金看板、名は古市に榮えたが、今の時世のかはりやう、宇治橋の袂で賣る、小兒衆の土産にする、弓も劍もなくなつて、鐵砲に彫る蝶もなく、喇叭に飾る牡丹もなければ、毛彫、深彫、象嵌、魚子、花の臚の石目の數より、手練の藝は多けれど、刃先に霜の冴ゆるのみ。兎の毛の尖の露を認る、老の腫は曇らぬが、顰がちの眉白き兼長は年紀五十一。

七十路ばかりの母者人と、二十になる總領と、間置いて、十三の、法性寺のいがぐり入道、今の腕白太政大臣、次郎助と名も稻荷のやうな、初午の午の年、ひん／＼飛んだ悪戯小僧と、三人口を一たがね、細工盤の根太ゆがめば脂柱太しく立てても、眞鍮の迷子札、いたづらな小判では支へかねたる氣のおとろへ、あはれ鐵槌の腕は鳴つても、中りやんした、媚かしい楊弓程は世に聞えず、鞆の煤に燻ぶつた、店の格子の薄暗い、霜月の二十五日、日暮前の事である。表は内宮に一筋道、旅帽子の鷗が浮いて、赤毛布も、もみぢの錦、一年三百六十日、流るゝ水かと絶間のない、名所の川とあやまたれて、いつも諸國の神通。

球ころがしの門店から、折曲つた此の横町、行き抜けた田圃を見て、遠方の森の中に、中學校の屋根の夕日、藁に霜は未だ置かぬが、枯枝の中の硝子窓、鳥の翼に隠れつべう、三日月寒き風情あり。仕舞家續きの片側町、曲つたばかりで静として、遠くから散つて來た、餘波の落葉ちよろ／＼と、古市の其の街道へ、颯のやうな顔を出して、賑かさに慌てて引込み、がさ／＼と小戻りして、小溝のふちの薄暗がりへ、搔縮むだ物寂しさ。

角家なる、其球ころがしの店看板、やくしやの夕霧の似顔で出來た、活けるが如き山姥は、熊と金時を誘ひ連れ、夜中頃には山めぐり、此の横町を巡るであらう。

隠れた落葉も氣勢する、兼長が軒の下、格子前に匂むで、白銀師の看板に、洗ひ髪をしたゝる緑、梅の薫の馥郁たる、藝妓島田の鬢を寄せ、領脚白き横顔に、口の苔の未開紅。佛に立つ柳の眉を、蜘蛛の絲にかけて、優しく覗いた女がある。

髪かみの濃こく、色いろの白しろいに、くつきり黒くろ緇じゆす子の襟せりかけた、銀ぎん鼠ねずみと赤あかを縦たて縞じまの、紺こん地ぢ絲いと織おりの半はん纏てん着まきたが、瘡やせぎすな丈たけ立ちよく、淺あさ黄き甲か斐ひ絹きぬの裏うら慎つましう、袖そでを衣せ紋もんに引ひ合あはせた、衣きもの服ふくは一寸ちゆん々々くく着まのお召めし縮ちぢ緬めん、古こ代だい紫むらさきに白しろと青あをの太たい白はくで菊きくの縫ぬいある半はん襟せりして、雪ゆきの膚はだに艶なまめかしい、緋ひ縮ちぢ緬めんの蹴け出だ褌つま。わきあけに引ひ締しめつつ、お納なん戸ど地ぢに、白しろの手た綱づな染ぞめの縮ちぢ緬めんと、黒くろ緇じゆす子を打うち合あはせの帯おび、きちんとして、藤ふじ紫むらさきの無む地ぢの前まへ垂たれ、黄たそ昏かかゝる由ゆかり縁のいろの色こゑ、聲こゑもかけずに音おと信ししが。店みせ格がう子しへ横よこづけの、椀けわの角かくの細こ工く盤ばんと、長なが火ひ鉢ぼちで、縦たてに長ながく、八や疊たふの片かた隅すみを座ざに仕し切きつたは仕し事こと場ばで、薄うす汚よごれた蒲ふ團たんの上うへに、繼つぎはぎの膝ひざかけの、こはばつたのを疊たんだまゝ、細こ工く人じんの姿すがたは見みえぬ。

背後うしろに積つんだ道具だうぐ篋だんす、鐵てつの壁かべの如ごとく、城しろの石いし垣がきにも較くらぶべく、袴ひそく々と小こ口くちの揃そろつた上うへに、御お神かみ酒さけ徳とく利りの口くち白しろう、燈とう明みやうの火ひの新あたらしく、點ついたばかりの神かみ棚だなは、學がく問もんする倅せがれの爲ためにも、父おや爺ぢが信しん心じんの天てん神じん様さま。なるほど今日けふは二十五にじ日にち。然さういへば祭まつりか知しらん、火ひ鉢ぼちの板いたに銚てうし子しが一本ほん、八や疊たふの中なかほどに皿さら小こ鉢ぼちの體ていが見みえ、丸まる盆ぼんが据すゑてあり。鐵てつ瓶びんはチン／＼いつて、臺たい所どころにカタクと立た働はたらく人ひと氣け勢せ、店みせには誰たれの姿すがたもなし。

未まだ暮くれ果はてねば燈とう明みやうも四よ邊あたりを照てらさず、四す隅すみ暗くらき折をりからなり、明あかるい所ところを急いそいで來きて、急きふに戸かど外とから見みる所せう爲か、と猶なほ身みを寄よせて透すかして見みた、美たを人やめの此この姿すがた。街かい道だう通とほる旅たび人びとには、宿やどの名なの藤ふじとや見みえむ、小せう笠がさ片かた手てに、荷にを振ふ分けに、笠がさの廂ひさしを仰あをむ向けなどして、出で女んなならばと思おもふやう、此この横よこ町ちやうを見み込こんで、立た淀よどみつつとつかはと脚き絆ばんの黒くろい夕ゆふ鳥からす、相あひの山やまへや急いそぐらし。格がう子しに輕かろく手てを當あてて、

「をぢさん、」

と呼よびかけたが、白しろやかな指ゆびで又また其そのの格がう子しを彈はじきながら、

「お留守るすですか。」

すらりと立た直なほつて、やゝ調てう子し高たかに、

「今日こんにちは、今日こんにちは、」

どしん、天てん井じやうを打ぶ抜ぬくばかり、あわたましい物もの音おとして、戸と棚だなの上うへから眞ま黒くろに疊たふへ飛とんだものがある。

「あれ、……と吃びっくり驚おどろ。

知しらずや、次じ郎らう助すけ。

取と附つき正しやう面めんの襖ふすま一いっ間げん、一いっ杯ぱいに、古ふるい書か割わりのやうになつて、柱はしらとともに動うごかしたことの無い、置おき

戸棚の上にはちよこなんと、達磨を極めてござつたわ。

父爺は留守なり、祖母さんは臺所で肴ごしらへ、暗まぎれに、豫ねて在所を狙つて置く。其戸棚の物蔭から、きよろ／＼眼で捜し出した、黄金造を註文の、主は維新で退轉して、届けさきも分らぬのを、主人が律義に藏つてある、蠟鞘鮫づかの無銘の一刀。兵兒帯にぐいと極めて、人なき店を一人天下。足をぶらりと引跨いだ、件の棚に乗り上り、床几にかゝつた気がまへで、八方を睨めながら、肩胛を張つて構へた折から。

従姉と知つても年紀が違つて、遊び相手にはならない女。這奴？ 化粧のものござんなれ、本多平八郎忠勝これにあり、退治てくれう、眼の配り。棚から唐突の大達磨に、舞ひやまぬ埃の中を、構はず目を圓くして熟と見ながら、まくり手の居合腰、件の無銘に反を打つて、ふき出しさうな笑を耐へ、苦り切つた、澁い面、じり／＼と詰めて来て、細工盤に肩擦るばかり、體を伸ばして踏張つた、仰山な身の構へ。

丸顔の顛をしやくつて、

「も、んがあ？」と一つ怒鳴る。

格子の外で身を躲した。此方は半面の笑美しく、

「否ねえ、次郎さん、まあ、」

「や、驚いてら、妖物。」

「あら、誰だつて吃驚するわ。だしぬけに天井から飛下りるんだもの、次郎さんの方が、餘程おばけよ。」

「う、ん、天井ぢやない。山の中に行暮れて、辻堂に居た所だ、僕は武者修行の劍術つかひだ！」

といつて、小さく突立ち、
「夜が深々と更けて来て、風が颯と鳴り出して、谷川の流がざあ／＼。物凄くなつた所へ、カラコロカラコロ、遠くから琵琶だ。そら、來やがつたと待つてると、眞紅な襦袢をちら／＼と見せやがつて、格子から雪のやうな眞白な顔を出して、可愛らしい造り聲で、伯父さんもないもんだ。やい、兄さんを見に來た癖に、」
と眞向から斬つてかゝる。

三

爾時はらりと紅一葉、臉を竊と格子の蔭に、伏目ながら瞳を流して、美人は莞爾と、
「知りませんよ、一寸、何處でそんなことを聞いて來たの。」
「誰に、」

とつと身を寄せて、

「誰に聞いたつて？ 丁と、学校のボオールドに書いてあるんだ。」

「中學校の？」

「う、む、僕のさ。兄さんは最う此の秋から、學校へは行きやしない。」
聞くと物思ふ間が一寸途切れた。

「何うして、行かないの。」

「だつて卒業しちまつたぢやないか。」

「まあ、」

嬉しさうな面色しつつ、

「然う。私は些とも知らなかつた。」

と、もの足りなさうな風情である。

次郎助は高慢に、

「知れた事でございます。誰が、卒業證書を持つて、藝妓屋へなんか届けに行くもんか。え、」
と斜めに臂を張る。

女は縦るやうに手を格子の、玉を刻んだ拳の下に前髪を俯向けた。

おくれ毛に風が添ひ、薄ら寒さうに肩を細うして黙つたが、顔を上げて田圃の空、星や迎ふる、目を外らして、

「澤山、そんな、邪険なことを然うお言ひなさいよ。どうせ藝者屋の妖物だから、私は最う歸るわ。」

と袖をあはせて對方を向く。帯の結び目斜つかけに、風に殺がれた柳腰。半纏の胸狭く、寂しさうな後姿。

尾花の中にあらねども、あねめく、歸るなぞと人を威して、今に尻尾を出さうまでよ、と片頬笑して足許を狙つて居たが、眞個に行きさうな棲はづれ、吾妻下駄が、からりと返る。

次郎助敗北、格子戸で額を叩いて、

「あ、不可いよ。歸つちや不可いよ、姉さん。」とあはれな聲なり。

聞かないふりで曲つて立つ、末黒野の女郎花。
「遊んでおいでな、可い所へ來たんぢやないか。よう、おい、姉さんてば、」と勇士が柄にかくる手を、格子の外へ二の腕まで、木登りしさうな引留め方。

引戻されて振向いた、女は、次郎助の其の體を、思はず熟と瞻つたが、鼻筋の通つた眉の長い、清しい目にほろりとして、

「あれ、およしなさいよ、縁起でもない、男だつて、そんな形を、爲るものではありません。藝者屋だと言はれたつて、ばけものだと言はれたつて、あの、慥うやつてね、隙を見て抜け出して来たんですもの。歸らなければならぬ時の來るまでは、突出されたつて歸りやしませんわ。」

「占たな。へ、」

とすり下つて、しかつめらしく頭を搔き、

「だつて、歸らうとするんだもの、腹立ち姉えツちやありやしない。」

「否、向うの森に、お月様が見えたから、吃驚して、私、見たんだよ。どうして急に夜になつたらうと思つてね、まだ、あれ、田圃が薄赤い、夕映ね。」

と向直り、

「厭だ、御覽なさいな、通りの方にはちら／＼燈が點いてよ。まあ、まだ森の學校も、はつきりと見えるのに、今日は夜も晝も一緒かねえ。」

「あんなことを言つて居ら。内にばかり引込んで居るから分らないんだ。此頃はね、いつでも晝間ツから月が出て居ます。當然な事を言つて居ら。」

「然う、だつて、さら／＼していらつしやるのよ、見えて、次郎さん。」

「此處からぢや見えやしないや。」

「御覽、見えないでせう。内にばかり引込んでおいでだからだわ。」

謂ひ得て嬉しさうに莞爾した。中脊なのが、あどけない。

玉の臺

四

次郎助は負けん氣の、躍起となつて、

「當然だ、當然だ、だつて當然ぢやないか。」

と獨りで疊みかけて忙しくいふのを、聞流して、わざと落着いたもの言ひやう、

「でも、兄さんの許からは見えませうねえ。」

うしろ様に一足すさつて、再び目を遣る棟の夕月。

表は廂に掛けた茶の、青かつしさまも見えず、太くからびて黄みながら、暗く片時雨する風情。二階家わびしく古びたる、君が住居は裏の窓。月影も嚙ぞ文机に、と玉の臺を屋根越に、雲を隔つる心かな。次郎助笑つて、

「は、い、お月様を見るなんて、兄さんが見たいんだい、やあい……其處からぢや見えないや。」

「内にばつかり居るからでせう、」

と胸を据ゑ、笑を含んで打領く。

此の洒落、腕白には少しも分らず。

「内に居るから見えないのは、そりやお月様よ。兄さんが見たくば内へ入んな——よう、姉さん。」

「然うもしぢや居られないの。伯父さんは、次郎さん、」

とあらためて用ありさう。

「父上？ 父上はね、何處か呼びに来て一寸出かけたよ。直ぐに歸つて来る。歸つて来ると、御馳走があるんだぜ。ちつとして居ちや待遠くつてならないから、僕は飛んだり跳ねたりして、ごまかして居るんです。」

今日はね、二十五日で、天神様のお祭でね、赤の飯が出来てるんだ。

こんな時に姉やが来れば可いつて、祖母さんと、父上が然ういつて居たんだからね、丁ど可いんだ、お入りよ。」

「だつて恐いんですもの。」

「薄暗いたつて大丈夫だ、妖物なんぞ居るものか、僕が刀をさして居ら、」

と又意氣組む。

「次郎さん、お前さんが恐いんぢやありませんか。切られるもの。」

と言ひかけて、鬢のおくれ毛搔いたるが、却つて覺悟の風情であつた。

次郎助は横へた刀の柄を、下から持つて見て、頭をがツくり。

「嘘だ。ありや演劇ごとだ。切りやしないから遊んでおいでよ、よう。」

而してね、姉さん、」

と甘えるやうに傾いて、手首を上げた、袖口を覗いて見て、

「此奴を一ツ縫つておくれな。そら、こんなにし了つた。」

と其の見せ方の手柄らしさ。犬ころ威しの鎧の袖、草摺ながら綻びたり。

「よう、遣つとくん、内證でさ。今朝ね、夜着を被つてる内に、祖母さんが縫つて呉れたばかりなんだから、叱られる。なあに、叱りやしないけれど、年取つてる人に世話をやかすなッて、餘處の人が皆然ういふからね、不可いぢやないか。」

うむ、だから僕は困つちやふんだ、だから困るんだから、姉さん。」

女は瞬きして打領き、

「あ、ちや、一寸其處へ行つて、」

と島田へ觸る指の先、鬚の根の烏羽玉なるに、環は纏れながら、其の媚しい風俗にも心は染まらぬ太白の絲一條、針に透して居たのである。

なほ片袖を胸にしつつ、

「綻びぐらゐならごまかせませう。」

どたんばたんと駈け出して、上框に莞爾々々顔、然も黙然で待迎へる次郎助に、手を引張られぬばかりにして、女の姿は宵月と、内に外に入れかはつた。

横町薄き月となる。

「姉さん、暗くツても見えるかい。」

火鉢の前に膝を支いて、針をすかす目の尖へ、蜉蝣淡き影幽に、絲の幻たより無ささう。うつとりと縁を結んで、ものを思へば答へなかつたが、しばらくして、フトした返事。

「見えますとも、恚うして傍に居るんだもの。」

五

「でもこんな處で仕事をして、近視眼になると不可いな。」

と次郎助おとなびた世辭をいふ。

「何ね、恚うやつて居るんなら、姉さんは、盲目に成つたつてかまひはしないよ。」

「盲目に、」

と驚いた目つきをして、

「盲目になつてどうするんだな。」

「然うすりや、可いわ。次郎さんに手を引かれて歩行くから、」

「僕は厭だぜ、をかしいや。」

「あれさ、そんなに搦つちや不可いわね、そして突立つてちや工合が悪い、おすわんなさいかね。」

「はい。」

「手を其方へ遣つて、」

「はい。」

「そんな刀なんか、いぢらないでさ。」

「はい。」

「ほ、大層柔順しいのね。」
と入身に褌を袖の下、次郎助の膝に乗りかゝるやうに、ひつたり寄つて、つゝと引くと、手織布子は、美人の手に素袍の片袖。

「さあ、ちつとして、」

次郎助は横を向いて、額で天井を睨めながら、唐突に、大きな聲で、

「右向けい？右。」

「あら、厭よ、驚かしちゃ、」

「だつて、あゝだあ恠うだつて、一々號令を掛けるんだもの。」

「こんな時でなくつては、また、お前さんが、人の言ふ事を、はい、はいつてお背きぢやないからさ。憎らしいからさ。」

だから、姉さん、いろんな事をいつて遣るの。あれ、動いちや悪いといふのに、針がはずむわねえ、お前さん。」

「それだつて、それだつて、姉さんが膝を入れるから、僕は、僕あ何だか、白粉の上へ乗つてゐるやうで、他愛がなくて、ふら／＼するんだ。」

「あら、可哀相なことばつかし、其んなに塗つちや居ませんよ。」

「でも芬々匂ふよ。」

「お妖くさいでせう。えゝ？」

「最う可いよ、あれは演劇ごとだと言ふのに、演劇ごとの時は、兄さんをつかまへて、親の響つて、斬り附けら、」

「一寸、糸が引張るわ。」

此處へ、十能に燗を装つて、臺所から祖母さん。

結ぶは煩き老の髪も、男の兒では埒あかぬ、世帯むきの使ひはさま、御隠居じみて外聞など、切らずに霜を翁草の、腰は伸びても脊が縮むで、次郎助よりは高からず。

低い處をちら／＼と板の間の暗きに影あり。パチ／＼と火花が飛んだが、鐵を溶かした鞆の炎の餘波に似ず、八杯どうふの鍋の下、火氣は自然に違ふのである。

次郎助見るより、

「祖母さん、扇屋の、」

と呼びかける。持つてた奴の袖を曳いて、

「黙つて、」

と遊ぶ氣で、女は忍ばうと思つたらしいが、甲斐々々しい禪がけ、前垂に手拭を挟んだ膝を、

長火鉢の前に支くと、逸疾く見た目の明さ。こんな時の針仕事は、此の娘より確であらう。

「お、襟坊か、ござつたの。」

「はい、祖母さん、しばらくでございました。」

あとを低聲で、

「最う些とよ。」

次郎助もおく。

「又、お前、綻ぢやの。」

と五徳へ十能を斜つかひ、一團の紅崩る、其のあかりは借らないでも、天神様の燈明で、祖母さんは丁と見通。

「でもね、祖母さん、こりや何ですよ、其のあれなんですよ。」

と目を圓くして、言譯らしい。

六

「何ですはも、あれですよもあるものか。お前、どつちにしろ、いたづらから起るのぢやよ。喃、襟坊。」

「ですがね、祖母さん、今度のは内證の綻ですよ。」

執成すやうに聞えたけれども、だけれども笑つて居るから、頼母しくはなかつたので、次郎助はくすぐつたい顔。

「おいの、また綻に表むき大びらと言ふがあるものか。偶に遊びに来た姉さんに直ぐ然うやつて世話を焼かすわ。襟坊難有うよ。よくござつたの、眞個によく出られたよ。何かい、今日は遊びかい。」

「否、一寸間を見て抜け出したんです。伯父さんに、いつかの、あの簪のね、催促をしようと思つて。あれ、お待ちなさいよ、まだ糸どめをしないんだわねえ。」

次郎助は些とも疾く祖母さんを遁げようと、氣疾に振り切らうとした袂を、糸で曳かれて、又ぐんにやり、頭をふつて投首也。

「見さつしやい、まるで操りの木偶人ぢや。而して何ぢや、大胡坐をかいて、内懐から手を突出した風わいの、憎體な、折助が酔つたやうぢや。世話はないぞ、それで何か、小遣を〜といふ處は、頓と猿芝居の強請ぢやがの。」

「祖母さん、」
と次郎助は冴えた高聲、

「祖母さん、失敬ですが、はい、折助は刀をさしませんでございませう、でございませう。」
「呀、主、刀を持出したか。」

「了つた、どツこい。」

と大敗亡、柄を片袖で大いに間諜つく。

「ほ、次郎さん、藪蛇ねえ。」

「まあ、」

と祖母さんは坐り直つて、

「あんなに藏つて置いたのを、お前、何處から捜し出したぞ。眞個に油斷も隙もなりはせん。聞いておくれ、襟坊や。」

兄さんどのも兄さんどのよ。あれ見やれ、あんなに指を結へて居るわ。このあひだ二階での劍術とやら、先日とやら言うて、お前二人で、鞘と、拔身での、チャン／＼遣り合つたと思はつしやい。兄さんどのが白刃の方でよ、此奴が鞘を持ったとかで、危いではないか、はずみで指を切つたぞの、餘程深いよ。」

「危いはねえ、まあ、そして兄さんが白刃を持ったの。」

「うむ、弱蟲だからね、刃の方なんだ。僕は鞘のあしらひよ、だから、だから、怪我をしたつて

名譽の負傷だ、軍人だぜ。」

「然うよ、またお前が刃の方を持った日にや、兄さんは何處を斬られたか知れはしない。無面目にふりまはずちやもの。軍人や侍なら、いざといふ時のほか、滅多に抜く筈のものではないに、齒抜醫師のやうに素破抜くぢやよ。」

斜めに絲を含んだ時、口紅の色、夕間暮、白齒幽な音がした。

「お待遠さま。堪忍なさいよ、姉さんがへたで手がのろいものだから、すつかり首の座になほらせたね。アイ、もう可くつてよ。」

「占めた、」

「これ？ 蜻蛉のやうに、すつ飛んで行くではない、大目玉め。……丁と姉さんにお禮をいふのぢや、」

と袂を取つて引く端に、針の運びに目を辿らせ、

「感心に出来る喃。羽子と手毬ばかり上手ぢや、と主がおふくろも心配してござつたに、あゝいふ中に居て、よく仕事を覺えたよ。お、これならば、堅氣になつても不自由な事はないぞ。」

「飛んだことをおつしやいよ？ 祖母さん、極が悪いんですわ。」

「なんの、確なものよ。立派にお嫁に行かれるわ。」

次郎助は、けろりとして、

「へい？ 姉さんは餘處へ行くの、」

「何故さ、お前、」

「だつて、内へお嫁に来るんぢやないの。」

「知りませんよ。」

と身じろぎに、羽織の裏のねすみ鳴。

田原平兵衛

七

「父上、お歸り。」

と井の子がすりの色の褪せた、黒の久留米の書生羽織、茶の毛絲の紐を爪さぐりながら、手を支くでもなく、腕組をするでもなく、どつちつかずに呼びかけて、御馳走の膳の前に、手織の布子勝色裏。すぼん下の割膝で、あやふやに畏つた。母親背で眉目俊秀、細面なる青年は總領の兼次である。

田原(作品の銘は依に造る。)平兵衛兼長。無言で力無げに入つて、長火鉢と鞆の隔ての障子の、狭い間を入つて、細工場に背後向き、出がけに老母に刺つて貰つた、そり立ての髻のあと寒げに、瘦せたる頬と、頭の霜を、神棚の宵の燈に照されながら、伸上つて燈心を揺立てると、其ま、跪いて、紋羽の襟巻をかなぐり取つた。

老母は、火鉢の前に待ちうけて、直ぐに備前焼の一鉢子、鐵瓶の底へ軽くコトンと當る。

兼長は拜み果てると、向直つて、座に、これだけは新しい、紙の笠眞白に、洋燈の凄しく化粧した、ふさはしからず初々しい光の下に、人待顔な皿小鉢を、火鉢越に一目見ると、仔細は知らず深い溜息。

久しぶりの外出なり、四五日以来かせ氣とて、葛籠の底から襟巻を捜し出して、かけて遣つた程であるから、

「お前、寒かつたらうの、」

と老母は、主人の顔の色の悪いのを、陽氣のせると怪まなかつた。

兼次も膝頭で擦り寄つて、

「大分手間が取れたんですね、」

「何か仕事の事ぢやつたか。」

と右左、火鉢を中の三ツ鼎、おのづと燈火に背いたのも、何となく陰氣であつた。
「おう、何の、」

と俯向いて、伏目になつたが、やがて睜き、濃厚柔和の面相に、唯此の冴の尋常ならぬ、清き瞳を遠くに放つて家中胸しつ、

「奴は？ 阿母。」

と父上、五十を越しても悴である。

「おい、次郎どのは、今しがた、何よ、それ、あの、扇屋の襟坊が來ての、久振で、」

「襟坊が、」

また向うを見遣つて、

「よう見えたが、最う歸りましたかい。」

「急いで今しがた歸つたよ。」

兼次が傍から、

「父上に逢ひたいつて、然ういつて、もうお歸りだらうと待つて居ましたがね。」

「お前、引留めて遣れば可い。」

と残惜しさうに顔を見られて、兼次はフト差俯向く。

「あの娘もしばらくの事ではあり、遊んで行きたい事は山々ぢやあつたらうけれど、主人持ぢや。隨意になる身體でない、と其處を能う合點してなう、思ひ切つたやうぢやつた。

いぢらしいにはいぢらしいけれど、あれでまた舊のやうに、主人の内へ歸るのは厭ぢやなぞと、駄々を捏ねられて見さつしやい。だましたり、すかしたり、おんぶをして連れて行かうといふ、

これの、」

と袖口の老の指、ものの影で兼次を指して、

「母様もなくなつたし、どうで泣かねばならぬ處。」

年紀は藥ぢや。最う二十にもなつたせるか、おとなしい佳い娘になつての。感心な事には、お

前、針仕事を覺えたぞ。

聞かつしやれ、次郎どのがの、又いたづらの綻を、私に遠慮をして、い、處でつかまへて襟坊に縫つて貰うたわ、何處で、どう苦勞をしたか、針の運びも確なものよ。」

「いや、舊から氣立てのい、優しい娘ぢや、何はなうても、今日の祭、」

と言ひかけて兼長は、又しても澄まぬ顔。

「否、父上、」

と兼次は力ある聲で、

「祖母さんが、赤飯を御馳走してお遣りでした。」

「何の、お前が歸つてから、と遠慮をしてござつたけれど、些と歸るには間がありさうなり、あの娘も然うして居られぬで、其處らのものを取り分けての。」

一人では厭ぢや、と言ふし、兄やは又、父上と一緒に、といふのぢやで、次郎公は丁ど願つたり叶つたりのお相伴ぢや。二人がお取膳で赤飯をの。あんな場所に居るぢやもの、はんぺんのお汁に鮎の煮つけ、何の口には合ふまいに、快う甘がつて食べてくれたは、優しいではないか。

お前は、それでも歸らしやらぬ。

食べ立ちぢやけれど、というての。それでも、さあとなるとまた煙草を呑んで、やうく今先歸らしやつたよ。次郎公はの、一緒に肴を突つきながら、何かひそくいうてござつた。手帳とやら何とやら學校のおもちやをねだつたと見えて、襟坊が歸るのに連立つて出て行つた。此の頃出来た勸工場へ引張つたものと見えるよ。」

「氣の毒な、小遣も無からうに、」

「父上、些と何でも景氣がい、と見えましてね、僕に、本でもお買ひなさいなんて謂ひますから

ね。馬鹿をいひたまへ、襟ぢやんに買つて貰つて讀むやうな本が何になるものか。五行本の淨瑠璃なんぞ、勉強はしないんだ、とからかつて遣りました。口惜がつて居りましたつけ。工面がいと見えるんです、生意氣ですな。」

と火鉢に手をかけ、や、兩の肩を張つて壯也。

「何、工面がよくつて、生意氣といふ事があるか。しらふで居て、お前、己が酔つぱらつたやうなことをいふ、」

と父上は澁面して、

「いや、しかし次郎助を對手ぐらなるな巾着ぢやろ。兼の小遣ぢや、おれだつて時々悩むぞ。」

「それでもお前、餘程お小遣が出来たと見えての、いつかの簪も黄金をもつと發奮むとの。」

今日も、實は其の用で、内を駈出して來たとの事ぢやが、先に胡蝶を透ぼりに、と言つて誂へた銀の平打ちや、彼をの。」

「阿母、」

と思ひがけず、平兵衛、調子が迫り、

「當分もう仕事はしません、と投げるやうに言つた。が、先刻から煙草をつめたま、吸ひつける事もしないで、五徳の上に烘つて居た、煙管持つ手が震へたのである。」

老母は差當り、然まで深い事とも認めず、

「何か、今日のこと、いそぎの仕事でも頼まれさしたかの。」

「仕事を頼む、頼まれる段ぢやらうか、阿母、早や何とも話になるのではござりませぬが。」

と口へ出すと一齊に、平兵衛は其のふさふとある眉を擧めて、一際激しく戦いたと思ふと、顔の色が颯と變る。

「父上、」

「お主は、」

「阿母、貴母にも面目ない、何とも申譯がござりませぬ。」

と口惜しさうな拳に、緊乎握りつめた煙管を其まゝ、兩の手を膝にかためて、眼を閉ぢ、吐息とともに額に深き皺をぞ刻める。

さては慰むるに言もあるまい？一方ならず、と様子を見たが、そこは老功、むざと騒がず。銚子をあげて、勿體ない、老の手で爛を見たが、つきすぎるばかり間があつたに、果敢なくぬるいは氣の所爲か。

言も迫らず、聲も靜に、

「お爛がよいぞ。主、まあ一つ參れ、よ、寒からう。」

兼次は尋常ならぬ父の狀に、齊しく手さきをふるはしながら、そと打守る祖母の顔。杖になるべき若竹が、却つて絶つた老の膝。

九

「兼、お前にも、さあ杯、」

「まあ一つお飲り、杯だけの。父上が、あ、言ふのぢやから、」

と祖母さんは此の場合、目くばせに心得させたは、兼次が親子の間に輕薄なく、正直に利かぬ左を引込めて居たからだつた。

「はい、頂戴をいたします。」

「さあ、兄や、酌をしよう、」

と脊屈みに銚子を向うへ、左に平兵衛を見返つて、

「お爛は何うぢやの。」

「結構にござります。貴母もまづ、一つあがつて頂きたい。兼や、お酌をして上げい。」

いや、阿母には元より早や、何とも申譯はござりませぬ。兼、お前も然うやつて、せつかく快う己と一緒に晩飯を食べるといって楽しみにしてござつたに、歸り匆匆な顔をして氣の毒ぢや。

阿母どうぞ堪忍してお呉なせえ。兼、お前も辛抱せいよ。」

と生命から二番の酒さへ、猪口を、わな、きの未だ留まぬ、唇につけたばかり。平兵衛腕を扼れば、思はず目と目を見合はせて、祖母は堪へずしばた、き、兼次は最う涙ぐむで、

「……………」

兎角ういふべき言もなし。時に神棚の燈明に、ぢり／＼と油が煮えた。

しばらくして、平兵衛は力なげに猪口を取つたが、

「年に一度の、他ならぬ今日の祭ぢや。堪へよう／＼、と思つたなれども、如何にも我慢が仕きれんで、」

といふ聲もかする、まで也。然ればこそ、湯歸りにも町の角の例の咳、底力なく聞き取られたのを、寒さに呼吸がはずむと思つた。

「兼長や、」

老母はあらためて、

「何か知らぬがの、膝とも談合と言ふは、他人でない、こゝに居る孫と親に、わけを話して聞かさつしやいよ。朋友は楽しみを倍にして、悲しい事は半分にするものぢや、と兄やもいはつしや

る。親子同志ぢや、楽しみは等分にして悲しい事も少しづつ分けようよ。」

としんみりと言ひければ、兼次も引込まれて、

「父上、」

とばかりであつた。が、たとひ一緒に死ぬことも、身體で聞かうと身を据ゑる。

雲を搔分けようとする如く、鬱し沈んで顔を上げて、

「いやはや、何とも沙汰の限。」

阿母、先刻、あゝやつて、妙見町の——津田屋——から仕事の事で用がある。

親仁、内なら、すぐに一寸来るやうに、と使の男が見えたでござります。」

「然ればよ。」

「近頃は、簪の脚が折れたの、雁首がひしやげたの、と羅宇屋煙管、焼糺屋の名代見るやうな仕事ばかり。形のあるものと言つても、虎に似た猫もなしぢや。然うかというて、地金を此方から持出して、手間隙をかけて見た處で、大道店へ莫産を擴げて、一錢がお土産、と通りがかりの女房に賣りつけられる品ではなし、じめ／＼雨なり、……………」

陰氣なり、口についた謠も出ず、氣を腐らして居た處。今朝から、からりと霽れ上つて、北向きの格子にも、未刻頃から日が當つて、神棚に鳥の影。正直の頭に宿る、天神様の二十五日、

佳い辻占でもあらうかと、白銀師が燻つた鍛冶屋のやうな顔を出して、久しぶりで仕事場から、きよとんと戸外を覗く處へ、尻からげの若いもの、紺の股引雪駄穿で、手拭を搦んだのが、ぞめきの體に格子の外。

其の、親仁内か、津田屋から來たでやす、一寸來て貰はうの、切口上を聞いた時。

鬼門

十

言葉づかひの横柄で、癪なにも氣にも留まらず。

(はい、はい、はい) と續けざま、つひぞ追従した覺えのないのが、嬉しさうな笑顔をした。

津田屋といへば、伊勢切つて、ぶらりと下つた昔の藤屋、鼓の音もボンと鳴つて、今に聞えた油屋と、一二を争ふ老舗の旅籠屋。先の主人金藏は、町内にも組合にも、頭の壓へ手がなかつたので、無理は言はぬが我ま、もの。がみくくと仕事をセツつき、氣短ではあつたけれども、懐中のづつしり廣い、小男ながら大腹中。

兼長が大の最員で、先祖の佛事、當座の祝儀、五節句のよりくことに、桃の象嵌、鍾馗の高

彫、黄菊白菊金銀細工、注文しては拵へさせた。杯の數ばかりも、雑と積つて六十一、本卦がへの祝として、禿天窓を軍配でびたりとあての、いや恐れ入つたといふ體の、布袋の根つけを拵へよう、と串戲のやうに誂へたが、黒棧留の兩つ提に金金具の時鳥、ちらりと裏座の宵月に、生肌鮪のぶつ切りで浮世を酒にした擧句、銀鎖の玉の緒ふつり、手枕の大往生。

長年の大旦那、扶持に離れて落膽したが、せめてもの恩がへし。三日寐ないで通夜をして、陽氣が好きな佛様、お口には合ひますまいが、と(福神)と銘のある角樽一提。布袋の根つけの名に因んだ貧しい中の一燈も、一金百圓也、五十圓、三十圓と、佛が地藏堂の勸化するやう、親類縁者おつきあひが、鼻つき合はせた香奠の包の中には光らぬばかりか。

近頃はやる神葬に、白丁烏帽子に取巻かせて、擔ぎ上げる御輿に、樽の縁はうれしいが、己をば乃多満政命にする、と佛が苦い顔をせう。絹帽子を新調して、燕尾服で喪主に立つた、若主人の氣象では、此の香奠は氣に入らない。

節屋さん、こりやお門が違つたらう、内は婚禮ではないのである、と選舉權を持つたがやまひの、演説口調で刎ねつけて、直ぐに臺所へおろされたので、心盡しも水の泡。平兵衛冷汗を流して居た、まらず、満座の中をきよとくと、嘉平治平のまちなし袴、見すばらしげに戻つたが、若旦那は若旦那、大旦那は大旦那。

樹憂無

飼犬のあとへなりと、見送りを爲いでならうか。催促にござるたびに、兼坊々々とおつしや
つた、汝も御恩を忘れるな、と高等科に居た時分の兼次を従へて、空車の行くあとから、肩身狭
げに野邊のとも。

依の昨日の羽織を見たか。青奉書の皺だらけ、頬へたほどの三つ紋つき、舊弊親仁の古であら
う、恰も凍どけの天水桶よ。親類でなし、懇意でなし、名札をつけた名代ぐるま、道ふさげの見
得のあとへ、親兒で繋つて何の状だ。それまでにしても配りものの饅頭が欲しいのなら、そら唾を
かけた食麵麩を喰ひをれ。今日の辨當をあけて見せろ、蒸返した赤飯だらうと學校で囃されて、
泣いて戻つた仔細を聞いて、木綿ものの石餅でも、當世のを縫はうもの、老の手の行届かず、母
のない兒は不便ぞ、と祖母が、脊を搔い撫づれば、父の兒なれば耐へよとて、平兵衛は手を取つ
た。

由來、津田屋は鬼門に當つて、平兵衛が言には、何一つ背かない、柔順な兼次が、年に一度の
新年の御慶の代理、彼處だけはと拒むのを、いふことを肯かぬか、と遣ツつ返しつ此の家内に、
必ず年々波のたつのも、あはれ浮世のさがならずや。

其の津田屋から一寸來い？……良い相談でないことは、はじめから知れて居たに、不念なりし
平兵衛。

兼長は口惜しさうに、

「貧すれば鈍になるわい。」

十一

親子喧嘩をしてまでも寒暑の禮は缺かさず續けた、眞心が顯はれたか。先代没して約五年、今
日の使は六年ぶり、長しといへども鶴の脚、蠟燭立ての繕ひせい、とばかりではよもあるまい。
些とは纏つた註文ならむ。赤飯を炊いたも前祝で、是おのづからの吉兆と、祭の費を懷中で勘定
した段勿體なし。さもしい心も不工面から。

出ぎらひで不性なのが、氣軽く兎の手の刷毛で、膝かけの鑿屑を拂つて立つたが、久しぶりの
事といひ、先は客寄せの縁起商賣。むさくろしく髻が伸びて病人らしい、と遠慮して銅盥にぬる
ま湯、毛うけに箒の扇形、老母が器用から、間に合せの下剃したのを、不思議さうな次郎助に、
父上は嫁取ぢやと、祖母さんが戯るれば、お土産、といふのを連れて歸つて母親にして遣らう、
といそ／＼家を出たのであつたに――

「阿母、ひつくりかへつた大違ひ。あたまからあの店さきが、女郎屋と區役所ほどに變つて居り
ます。」

大旦那が亡くならつしやる、三年前に、半纏着ちやが品の可い、質實でも何時も若かつた、御新姐さんが死なれたあとは、いつも帳場に坐つてござつた、あの、無口で、深切な、己なんぞは知己のやうな、知己でないやうで居ながら、時々何處からともなしにフイと出ては、何か心づけをしてお呉んなさつた、番頭の小平さん、第一あの人の姿が見えんで。土間から見つけの、廣い板の間の取つきに、チャン塗で硝子窓のものが出来て、あれが、帳場なのでございませう。とんと郵便局の受つけと言ふもので。陽氣によつちや此の町から野末に見える、學校の片端のやうでござります。はて、入相の頃なり、こりや、魅まれて、廣見の田圃へ出はしまいか、とうろつく次第、

人通りの中を兩三度、咳さへ遠慮して口許へ手をあてながら、津田屋の前を行つたり來たり。枝ぶりは違つたけれども、店前に覺えのある、松の樹が見えたので、氣兼ねしう土間へ入ると、廊下を傳はつて、どたんく、鬢をあべこべに、前髪を五寸ばかり、顔を突出した、眞白に塗つた肥つたのが、(何ですか。)と鬢を搔きながら煩ささうな怠の調子。突込むやうに謂はれたので、

(へい、)と 平兵衛行詰つて、口へ手をあててお辭儀をした。

二三人氣勢のする帳場の硝子戸の中から、
(飾屋だ、飾屋だ。)

(然う、)

と高慢、廂髪の女中は、二つばかり、上草履を引張つて、帳場の窓板へ肱をついて、斜めに凭れたまゝで居る。

(奥へ連れて行つて遣れ、旦那が用があるんだ、) と言つたのは、使に來た若いもの。

最う一人、手巾を首へ巻いたのが、きちんと分けた頭を出して、

(飾屋、あがれ、) といった。

「然うよ、飾屋に違ひはない、」

と平兵衛はぐいと呑んで、

「それからな、兼、其の女中に連れられて、何となく足場の違つた、廊下をとぼくと行く奴ぢや。途中で、二三人も女衆に行逢つたが、いや、變れば變る……見覚えのあるのは一人もない、

阿母、あの、娘さんの乳母どのも、何うしたでござりませう。」

「あの人も見えなんだか。」

「見懸けませんとも。其處で奥へ行つて、——高作さんに、」
「若旦那ぢやの。そして其の用といふのは、」

と案じ切つた祖母さんは待兼ねて聞くのであつた。

「父上、どんななんです。」

「話すも口惜しい？ 若旦那の傍に、庄九郎の奴が居たのよ。阿母、庄九郎が居りましたわ。兼、も一つ呑め。肴せう、」

と目を眠つて、

「……兎にも角にも宗近が、兎にも角にも宗近が、進退こゝに極りて、御劍の刃の亂るゝ心……」
と自慢の小鍛冶を誂ひさして、はらくと落涙した。

扇屋、ひな唄

十二

國は宵月、廓は灯。紅にも紛ふ蠟の灯の、白粉籠る霧の軒。廻縁なる障子に透きて、ぞめきの袖にこぼるゝ状、花の堤の花あかりに人のみ暮るゝ眺かな。

二見が浦に沈む日を、ちよいと招いて扇屋は、此の古市の花の宿。小袖幕の七重八重、櫻明き銀屏風に、あだ光する四十面の、庄九郎は上機嫌。

「若旦那、庄九郎はこれ、こんなに頂いたからというて、頂いたからというて、酔つていふのぢやごわへんぜ。若旦那、酔つていふのぢやごわへんが、若旦那可うごすか、酔つていふのぢやごわせんえ、若旦那、」

「庄、何をいふのか知らないが、おい、其の若旦那々は措いて貰はう、厭に小僧じみる。荷も國家のため、」

と胸を反らして脊高い男の、大きな手巾で口のあたりを蔽うたが、横顔の痣は隠れず、掌でおしたやうなのが左の頬に著しい、高作は、一座に侍る年増の藝妓に、

「なあ、おゝ然うぢやないか、小僧のやうに聞えるぢやないか。」
婦は松吉といふのである。

「然うですね、何も若旦那といつたつて、小僧の様に聞えるつてこともありませんが、貴下にはそぐはない様ですのね。」

「姉さん、閣下がいゝぢやありませんか。一寸、いろゝ、縣のため、市のため、人のため、」
と丸顔で目のぼつちりした若代といふのが口を入れると、松吉が引取つて、

「藝妓のためにもかい、」

「あら、多謝だわねえ。」

「呉服屋は居やしないよ、」

と姉さん、はぐらかして笑ひながら、

「閣下ぢや、また行過ぎたやうでをかしい。第一お前、かくか、お一つといつて御覽な、お茶漬を食べるやうだ、かくやのお香のものです。」

「馬鹿にするな、」

高作は高い鼻に、瞳を寄せて睨む真似。

「あら、御免なさいよ、ほ、ほ、だつて、をかしいんですもの。」

と自若として居る。

泰悠に座を構へて、膝に丁と手をついて、唯莞爾として居た、女中のお時といふのが、此に於て、口を入れる。

「姉さん、先生が然るべきではありませんか。御様子といひ、御人品といひ、何うも何時お見上げ申しても津田さんの若旦那のやうぢやなくつて、津田先生といひたいんですものね、それが可うございますよ。」

庄九郎、横手を拍ち、

「豪い、さすがは扇屋のお時でけつかる、お見立て寸分隙なしぢや、

「はい、先生。」

と姉さんが透さず切込で杯を獻す、と高作鷹揚に引受けて、若い酌で、ぐいと呷つてお時にさす。

「先生、頂戴。」

とお時が、威勢よく掌をかへしてひよいと出せば、

「先生もをかしいが、」

などと高作は例の手巾。

「先生、先生の方はそれで可うござるか、若旦那……ぢやない先生、貴下其の私の事を、庄々ツてお呼びなさるのは、些と嚴しいぢやごわへんか、ねえ、もし先生。」

「なげさ。」

「だつて、先生、と妙な顔する。」

「成程ねえ。」

と姐さんは語呂を知つて片頬笑む。横顔を覗きながら若代が、

「どうして、姐さん。」
「一寸。」

と雛妓まであなぐりかける。

松吉は氣の毒さうに、

「分らなきや煤拂までお待ちなね、ねえ、お時どん、
と顧みて、おほ、ほ、お時どんは孌然たる而已。」

十三

「何だ、何がをかしいか。」
と高作も解しかねる。

「何だ、とネー……でせう、さあ、お遣んなさいよ。」と松吉は三味を取つて、轉軫に襦袢の袖口、すつと扱いてチンと當てる。

「厭に庇ふな、怪しいぜ。」

と高作は右左、じろくくと見較べて、

「それから先へ白状しろい。」

「あら、先生、庄さんと松吉姐さんは、今はじまつたんぢやありませんわ。」

松吉は落着き濟まして、

「ねえ、貴下、京都以來だわねえ、」

と心得たやうに悪く莞爾つく。

庄九郎苦い顔して、

「厭にいふわ、畜生めらが、何も更つて聞きたがることもなし、異う又庇ひだてをして隠して呉れるに當らんぢやに、なほ悪いわい。」

これ、若旦那、何、先生。

貴下が庄、庄ッておつしやるのが、京都市で肥料買はう……に聞えろと言ふのでござすよ。それ、

シヨ一な。」

「何だ、其の事か、如何にもシヨ一ぢや。」

と情ないことをいつて、言ひ得て、呵々と笑ひ出せば、哄と一度に笑ふ中に、雛妓の聲の訝えたのが、戸外の霜に響いて聞えた。

庄九郎四邊を睨めく、紺の細出な前垂の下へ突きこらした手を、股へ取つて、

「此奴等！ いや、先生、酔つていふのぢやごわへんぜ。」

「可いよ、分つたよ、以來色男といはうよなあ、お前も然ういつて遣れ。」
此時高作、其の傍に引つけ置く、顔を背向けた別に一人の美人を顧みだが、黙つて何にもい
なかつた。

其の素振に、高作は、頤が暗くなつて、

「どうした。」

若代が心得、紅の裳を揺つて、ふくらかな膝づつと出で、

「貴下や、其の姐さんに、庄さんを色男といへとおつしやるのは御無理ぢやありませんか。姐
んの色男は、他にあるんですものね、一寸。」

と目を運ぶ。時に松吉が三味を斜めに、澄まし切つた容體は、野暮など投げたやうに見えたの
で、高作は氣がさしたか、

「何、他にある、誰かい、は、は、」

とつけたらしい高笑ひをキツカケに、ぐつと碎けて上げ胡坐、其の足袋の新しさ、表も裏も眞
白であつた。

「一つ承りたいもんだね。」

「承りました。」

チントンシャン——

唄上り下りのおつゞら馬よ、さても見ごとな手綱染かいな、チリンチ、テーンテ、トツツンテ
ンレン、トツ、ンテン、馬士衆の癖か高聲で、鈴を便りに小室節……、

と藪から棒、色男を詮議といふに、座敷へ馬を曳き出した、唄までもはぐらかされ、畠山庄司、
岩永左衛門、相並んで、愕然たり。若代もお時も顔を見ると、松吉は愈々澄まして、

吉田通れば二階から招く、然も鹿の子の振袖で。

と音々ころ／＼軒を渡つて、五十鈴川の流れ遠く、驛路の鈴の響く時、うろ／＼して居た足を
留めて、此の扇屋の格子にならんだ、藏の前の、天水桶を小楯にして、緋の羽織の腕組しつ、
氣を置く状に、四邊を見ながら、打仰いで、二階を望むものがある。

格子のぞめきは灯に赤く、こゝに一人の月の影、花やかなると、寂しきと、おなじ墨繪も松、
櫻。暗夜ならばと思ふであらう。

十四

「心意氣だわね。」
シヤン、——松吉が弾き濟ますと、若代が、然も感心な風をして、

とあてぞつばう。

あつけに取られて聞いて居た高作は、氣の無さうに、

「何が心意氣なんだ。」

「庄さんと二人で道行の處ぢやありませんかね。」と、お時がそらさず楔を打つ。

「道行なら道行のやうな合方がある筈ぢやに、相手が馬士で、此方が庄と来た日にや、蜷川とは行きやせん、天王寺の出はづれを、茶種に頬被ぢや、嬉しくない。ねえ、先生、酔つていふのぢやごわへんぜ、庄九郎、酔つていふのぢやごわへんが、」

「また、(はとに)とをほへとさつさ)だらう、」

と高作は怪しい節なり。

「何よ、貴下、いつでも其の(はとに)とをほへとさつさ)つてお難しなさいますのは、」

若代が傾いて眞面目に聞く。

「これか、こりやお國の節よ。此の色男は恚う見えて越中の産だからな、雀百まで踊を忘れずさ、幾つになつても(ほへとさつさ)だ。」

庄九は姓を小出といつて、越中富山は反魂丹、眞鍮の煙管の産地、高岡のものであつた。

二十歳の時、莊河の洪水とともに飛驒越で流れて出て、岐阜、名古屋、四日市から、阿漕をか

けた渡りもの。當人の望といひ、世話をするものがあつて、依の家に弟子となつたが、足かけ五年。仕事は固より、食ふこと、着ること、内證で一合の恩も忘れて、去ぬる年世を去つた兼長が戀女房、兼次、次郎助兄弟には、世に代へて懐しく慕しい亡き母の、千鳥といつた美人に、煩惱の犬となつて、這ひまつはつたが肯かれぬうへ、くらやみ坂へ棄てられたが、此奴辯舌、爽に、うまれつきの追従輕薄、小才の利く處から、宇治橋の際で小錢を賣つて、内懐へ溜め込んだ、母娘二人の寡婦が許へ、勝手口からひよこりと入婿。さても庄九郎の天下になつて、間口四間を總硝子の飾屋の主人となり、鍍金の指環、からはぎの煙管、簪、金銀眩く道者の目を射て、神都の美術家、此の鼻に極つたりと、四五人抱へた野郎どもを、弟子職人と言はせはせず、書生がく、と大見識。持つたが疾の色好みと、生れつきの性は失せず、額を叩いて取入つて高作のお取巻、末社にもない、かみなのである。

「先生、胞を洗ふのは酷うござ。高岡には、眞個の洒落に生れたばかり。何、越中ぢやからというて、反魂丹ばかり賣つて歩行きやしませんぜ。恚う見えても江戸長崎や國々で、づつと磨きあげた男さね、」

と松吉をじろりと流眊。氣障だといふ顔色で、取合はず横を向く。一座しらけたりと見てお時

「其の何でしたね、(はとにとをほへとさつさ)あの、それを一寸何かに附着けて唄つて御覽なさいな、え、姉さん、」

取なしぶりに恚う言へば。

「厭さ、そんな、(はとにと)なんざ、私が遣れば恚う囃すよ。」

「へい、何と、」

と故と身を入れて、お時が向き直ると、松吉は悠々として、

「可いかい、(かとねとを欲しい)さつさ、」

「へい、かとねとを、」

と言ひかけて、向うから叩く眞似して、

「馬鹿にしないねえ。」

高作は耳を横へ、

「何だ、かとねとを、かとね、うゝむ、」

と發明をしたらしく、

「金を欲しいか、こりや可い、」

松吉が、

「ねえ、先生、」

「どうだ、庄的、圖星だらう、は、は、。」

「へ、へ、へ、へ、」

と一つ首を前へ揺つて笑ひ、

「圖星とは怪しからんでえ、何のこつちやい、先生、庄九郎酔つて言ふのぢやごわへんぜ、……」

酔つていふのぢやごわへんが、

「金子が欲しいか。」

と高作はかさにかゝる。

「どもならん、え、」

と手をついて胸を反らした、庄九郎右の手をぬつと出して空を撫で、

「何のこつちや、いや、串戯ではごわせんぜ。先生、貴下もし何か今度の事を、庄九郎が儲けつ

くでも行ると勘ぐつてぢやごわへんかい。豪いこつちや、途方もない。敵等また口惜しまぎれ

に、どんなこと謂はうも知れん、何ぞわきからお聞きなさはしませんかい。」

え、先生、いや、洒落とばかりぢや氣が澄まんでえ、こりや恚ないしては居られん處ぢや。」

と、ひよいと又きちんと坐つて、

「もし、酔つて言ふぢやごわへんぜ。」

十五

「庄九郎、酔つて言ふのぢやごわせんが、純金三百匁、大枚ぢや。敵めが方では業が沸へるものぢやに因つて、もしやまた然うでもない。庄九郎が鞆に懸ける時に、あいやもし、懷中より眞鍮、銅の鑪粉を通はせて、正金をごまかしの、黄金を着服などと、いやさもし、お立會の衆がおつしやるまいものでもない、いやさ吐かすまいもんでもない。別嬪。」

とずらりと見渡して庄九郎、空笑ひをしたは洒落のつもり。一向に落が來ぬのを、爲有り顔に又から笑ひ。

「あい、然よでも何でもない。其處は庄九郎ぢや、先生、酔つて言ふではごわせんが、そりや、無い。其處はない。はて、遠國に生れても、性は御當地の五十鈴川、澄んだもんぢや。分けて津田屋様のお仕事ぢや、恠やうに御懇意を蒙るぢやに、けちりんも、」

と据ゑ眼に、指二本で、

「爪の垢ほどもごわせんぜ。何ぢや(か)とねとを欲しいさつさ。」はて、お前方も措いて貰はう。外の事とは違ふ、大事のこつちや、面白うない、庄九郎、おもしろからぬわい。」

「だから面白くしようぢやありませんか、」

とお時が松吉に目くばせして、

「御覽なさいな、お話をして居るのは此のお座敷ばかりでございませう。」

「此方も騒げ、」

何事も負けず嫌ひの、高作が思ふ壺へ嵌つたので。

「誰がそんなことを思ふもんか、さあ、おい、(ほへとさつさ)でも何でも遣れ。」

「へ、でもさ、庄々と、越中と、其かとねとは御免ですぢや。」

「矢張(は)とに)にしませうよ。」

「鳩より青鴉の鳥がい、」

と松吉は足許から、

「さあ、喜いちやん、立つた、」

「あい、」

と雛妓が、重ねた襦をするりと捌く。

「若ちやんも、お立ち、」

唐突に瞽婦を弾く。チリ、テットン、チリト、ンツテン、ツンツンツン、トツテン、チリ

ツチ、チャン、チャン、こらしよい、チャン〜。

わしが憎い奴あ青鴉の鳥よエ、私が大事にした大根の種拾つて食つて、憎い鳥めと棹

さし追へばエ、ちやうど向ひの櫻の枝にとまつて、

お時が火鉢をおして、ぶつとあとへ開いた時、座敷は野になれ足拍子、二人は色氣なしの大踊。
「おい、どうした。」

と傍なる其の無言の美人の、清らかな襟のあたりを、丁と、叩いて、直ぐに懐へ込らしたさうな撫肩を、邪険にかはすと、はすみよろけて支かうとする手を、藤色の衣の袂、慎ましく膝をすらして、銚子に白魚の指を掛けた。

廊下の障子を細目にかけて、一人、禿か顔を出し、お時の背中に二言三言、口早に囁くと、でつぷりとした胸で答へて、

「お扇さん、ちよいと、」

といつた。

清しい瞳で、賢しく答へて、高作の膝のわきから、結び雁金の紋しをらしく、袖を分つと竊と立つた、衣紋つき、袂はづれ、みどりの黒髪透く櫛も、此の紅の灯の中に、獨り月影さす風情。

……踊を避けて座を廣く、隔ての襖に薄彩色、素絢の描いた梅の額に、島田の女仙映ると見れば、

踊子二人がさす手の蔭へ、藤紫の裾消えて、はら〜とあとを散る梅ヶ香。

辻占

十六

酒にのぼせた色さめて、障子の外に素顔の雪、廊下寒さうにイみつつ、

「千代ちゃん、何、」

と其の禿に低聲で聞く。……優しい聲音は別人ならず、裾も引いたり脊も高く、容子も二つ三つ大人なびたるに、質素なつくりの紅なし友禪、包むだ膚も違ふやう、彼の平兵衛が横町の暗まぎれの姿に較べて、其姉としも見えるけれども、お扇といふは勤めの名、まことは襟坊のお襟であつた。

禿は突立つて、お襟の俯向いた鼻筋と、苔のやうな唇を瞻めながら、

「お客様でございます。」

いよ〜しのび音に、

「お客様ね？」

「いゝえ、あの、然うでないお客様なの。」

「然うでないつて、」

「店のお客様ぢやないんです。あの、あの、姉さんのお客様なの、お部屋へお通し申したんです。」

「私のかい。」

と小袂を引上げ、

「どんな方、」

「いゝ、人でございますよ。」

と、莞爾したのは手があつたか、ばたくと蹙音高く、駆けて遁げたは小兒である。

お扇のお襟は、内の客に氣を兼ねたか、竊と障子に身を寄せた。中は明るき紙一重、此方は白き雲の外。

松吉が青鷗の高聲。

(しいちしやつきりく、いけづく、瓢箪がらりのしなび爺、根性骨の太さよ。

「こらくい、」

なぞと庄九郎、高作の笑聲。

袖を合せて鬢軽く、聞き濟ましてお扇は莞爾、踊子の足拍子トンの間を拾つて、するくと廊下を渡つた。

突當り曲り角、仄暗い中に俯白く、立停つて見返つた、長襦袢の淺黄櫻、谷を隔てて咲こぼるるを、此方の二階の段階子、上り口の欄干の横木から、切禿の、くるくとした目を斜に、千代が、からかひ顔を傾けて、莞爾ついて視めて居る。

月は射通す硝子窓に、霜を包むで冴えた色、時々里心のつくといふ廓の時に魔がさして、座敷座敷は、寂然とする……高作の一座ばかり、

丁ど向うの櫻の樹にとまつて、何を囀るかと立寄つて聞けば、

と追註文か、二度目の撥音、チリ／＼トントンチリト、ンツテン、ツン／＼／＼と響くのを、山の彼方に聞くよしして、お扇は自分の部屋の前。かたへは櫃子で、片側の壁の此方に、門形の一枚襖。秋草の露の中に、扇の地紙をあしらつたは、萩桔梗の唄に似て、夜ごとにすだく蟲ながら、玉章を忍ばせて待つべき君もないものを。夜半の涙の友とした、蝨斯も今は鳴かぬが、蟲が知らずか、何となく、いそ／＼したのも戀の路、立淀んで廊下の辻占。

お扇は名に因んだ扇子の引手、壘んだ形を熟と視て、我身をじらすも心ゆかし。小袖の紋と同一な、結び雁金をすかし彫の銀の平打の簪を、鬚の根からすなほに取つて、さきをかへして、こ

とくと、引手に竊と音づれながら、

「御免なさいまし。」

と我が部屋へ、含る笑を包むだ袖の、優しく靡いて見えたのは、轟く胸の餘波であらう。内には何の返事も無かつた。

扇折

十七

「御免なさいましよ。」

お扇はなほ、嫋娜に小腰を屈めるやうにして、壁の方から覗く姿で、

「誰方、」

と言ふと一緒であつた。向うから障子がすらり。先方も此方も對丈に、入口に、はつと出合ふと、ものも言はず左右に分れた。お扇の裳がはらくと廊下を捌いて退る時、憂然として冴えて響いたは、手にした簪を落したのである。

部屋の中で仕切つて見える、簞笥の前の火鉢のふちに、あたるでもなく兩手をかけ、横向の中

腰で、急いで此方を見迎へて、

「僕です、僕です、」

と言譯らしく口早にいつたのは、依の長子兼次である。

一目見て、お扇は情が切つたので、聲も出ないで、颯と目のふちに色を染めたが、やがて得も言はれず、莞爾して、

「まあ、」

夢を見るやうに今度は恍惚。

「僕なんだよ、少しね、」

と兼次は未だ何かいひわけらしい。様子を見れば、唐突に襖をすらりも、驚かして遣らう洒落ではなく、御免なさいましから誰方まで、聲を三度も聞き定めて、城の門を開けた次第、固くなつた籠城である。

「どうしてね。こんな處へ、」

と三足ばかりを蹴け込むばかり。あとをうしろ手にぴたりと閉めたが、背向きに、なほ襖に靠れて、無造作には傍へも行かず、

「まあ、よく入らしつてねえ、私、餘まり思ひがけないので、嘘のやうよ。」

其ま、其處へ、何となく、危つかしさうな坐りやう。
「僕もね、はじめでだから、何だか眞個ぢやないやうだけれど、實はね、少し相談したい事があつて、あま、此方へおいでよ。」

と火鉢をまはして身をすらしした、羽織の袖にひかる、やうに、小袖の袂を進めたが、さしむかひにはなりもせず、肩を並べた若い同士、打解けながら窮屈さう。

島田の鬢を傾けながら、肩をすなほに胸を引いて、兼次の顔を熟と見た、近優りする美しさ、目許の愛嬌滴るばかり。

「辻占が宜かつたわ、兄さん、」

懐しげに怨う言つたが、あらためて語るに及ばず、二人はもとより兄弟ではないのである。

兼次の母の千鳥といふのは、京都のうまれで、三條あたりの扇折りの娘であつた。両親は早く失せて、鴨江といふ姉の手に稚い折から育てられた。同じ川邊の水鳥ながら、姉は羽がひも浮いた性、律義に稼ぐ婿のあつたを、阿漕が浦にあらねども、不義の名所にあこがれて、女扇のせめを切り、店のものといつたづらして、得意さきのあつたを便りに、伊勢路をさして落る時、母のないう娘は恩愛に、家も義理も分別なく、野分の風にさそはれて、千鳥もともに渡り鳥。時を定めぬ以前から、濱荻の色に出たのであつた。――

されば古市の唯ある横町、丁ど依の隣家に、不義の夫婦は假住居。こゝで扇子を拵へて、表通りの町並に、小店一つ借設け、千鳥にそれを商はせると、小机の折帳に、金銀の箔をうつしなから、風をいとへる花の姿、活人形の看板より人目を引くこと大方ならず。鹿の子のきれの結綿には、どんつくの懐中をはだけて、美人の手に扇を開かせ、北風のゾツと身に染むのも、ひやあ、神風、と難有がり、木賃どまりの道者まで、風邪をひくのも厭はぬ繁昌。

四五年、市が榮える間に、姉の鴨江は道ならぬ子寶一人設けたのが、今、扇屋のお扇である。お襟が危る境遇でも、其の成行きは略知れよう。伊勢に隠れて住むことは、演劇の棧敷で見るやうに、上り下りの噂で聞いても、京の本家は、おとなしく目を眠つて堪忍したが、……流は清矣、五十鈴川。

十八

無憂樹

水が性にあはなんだか、五月雨の半ばかり、井戸の濁つたのはじまりで、其の夏のはやり病に鴨江の不義の夫は失せる。續いて、土用あけまで早といふに、仇花植ゑた土がゆるんで、井戸側が崩れたので、袖の涙の露ばかりも汲むべき水がなくなつたのに、隣家は幸ひ根を据ゑた岩清水の井戸溢る、ばかり、滾々として玉を碎けば、臺所から手桶を提げて、朝晩出入りをしたのが

縁で、昔氣質の平兵衛が、其の年までもやもめで居た、三十歳の暮の事。千鳥は二十で祝言したが、兼次が出来てまでも、裁縫の際ある時は、鐵漿つけた口に地紙を含み、小兒に鶴を折りながら、扇子を疊んで手助けする。平兵衛親子もしんせつに、三度のものを分るくらゐ。質素にくらせば母娘三人何不自由も無いものを、店の招きを奪られたとて、妹の身體で無心する、然る悪黨ではないだけに、利かない性の山氣があつて、白粉つけた婦ども、一人が二人三人まで、千鳥のあとの町店へ旅鳥の囀をかけて、投扇興の催も、吹矢にはやる人心、玉ころがしの急しい當世の人氣にあはず。はな散る里の點なしで、借金はする、損はする、とゞのつまりは妹夫婦の意見に耳を傾けないで、お襟が九つになつた年、古市の扇屋に口があつて仲居に入り、一緒にお襟を連だむだのを、無理な工面のかたに棄てて、又しても！旅商人と遁たのは、千鳥が歿する前の年、お襟は時に十二であつた。が、平兵衛も、女房が世を辭した時分から、仕事も隙に、手許が薄く、見す／＼泥水に沈むと知つて、姪を助ける力がなく、それなりけりにお扇となつた。扇屋の娘分。兼次とは従兄妹なのである。

お扇は親しげに、

「過日は上りまして、御馳走さまでした、祖母さんに、種々お手敷をかけたわねえ。」

「何、御馳走どころぢやない。何にも無いのに引留めて、襟さんが却つて迷惑したらうつて言つ

てだつたよ。」

「あんなことばつかり、」

と怨めしさうな目の色して、

「祖母さんはじめ、私を他人だと思つていらつしやるんだもの。恚うやつて、親も兄弟も何にもないのぢやありませんか。それなのに、兄さん、あなたまでが然うなんだよ。過日の時も一緒に御飯が食べたかつたわ、貴下はお厭だつたのね、」

と此の場處だけにおのづから甘えて言ふのが口説になる。

兼次は不意を打たれたおもむきで、

「否、そんな、そんな、厭だなんて、そんな譯ぢやないんだけれど、だつて、弟は小兒だから可いけれど、だつて、お取膳で二人してをかしいぢやないか。」

「人が見て居やしないんですもの、誰にあなた、をかしいのよ。」

「祖母さんの、弟だの、」

「あら、祖母さんの、次郎ちゃん他人ぢやあるまいしさ。先の内遊びに行けば、いきなり二階へ上つたのに、此頃ぢや然うやつて、貴下が嫌ふから、何だか、私、氣が咎めるんですもの。私の聲が聞えたつて急におりて來ちや下さらないし、あ、顔が見られたと思へば、(近頃は儲る

か)なんて、

とさすがに微笑み、

「あれは何と言ふ口ですよ。そんな氣におなんなすつたもんだから、それだから厭なんですよ、先には御飯も一緒にたべりや、一緒の火燵で、」

といふ時、うら階子を上る音。不圖火鉢のふちで、男の手に、手をかさねて居たのを見て、はつと擦り退くと、襖の外から、小女の聲で、

「姉さん、」

「あゝ、千代ちゃん。」

十九

「お火を持つて参りました、あの、あの、それから、」

と廊下で大分手間が取れる。

「早くお入んなさいよ。何だね、此の子は、」

お扇はやうく、傍へ来た切禿に、優にらみといふのをして、上品に莞爾する。

「あら、お火がなくなつてよ、あの、それからあの、お部屋の前に、これが、」

と、差出したのは銀簪也。

お扇は颯とまた臉に紅、兼次にかくして、すらりと立つて、簞笥に据ゑた鏡臺へ、カチンと置

く。

小女は火を繼いで、

「それから、あの、おかみさんが、これを、お客様に、」

と菓子皿を直して言つた。

お扇は對方へ居處をかへて、片膝つき、清らかに頸の雪、炭を挟んでうつむきながら、まつげ

濃く伏目になりつつ、

「眞個に火が無かつたのね。」

みづからたしなめるやうにいつて、瞳をかへして、竊と見ると、あゝ、兼次の寒さうな。

「まあ、寒いんだよ、お千代さん何か出して。いゝえ搔卷ぢや何だから、其處に私の、あゝ、そ

れさ、そりや不斷着の半纏だけれど、大好なんだから、」

「はい、」

と立つて、千代が手に、襟艶かに烏羽玉の半纏の地も夜ながら、心の絲のちらくくと赤には染まぬ銀鼠、裏は甲斐絹の濃い浅黄、戀の淵の色にや出づる。

「さあ、引かけていらつしやい。」
兼次は茫然たり。

「よく似合ふはね、千代ちゃん。」

火を吹いて居た小女は、其のまゝくるくると目をやつて、

「お誂へなすつたやうよ。」

兼次は肩を揺つて、

「こんな俳優のやうなもの、不可いや。」と言つたけれど、むざと振落す勇氣もあらず、法衣を絡つた心持、五分刈あたまでは、あはれである。

「でも似て居る癖に、」

と嬉しさうに、お扇は背後に見惚れて立つた。

フト其時振向いて、

「襟ちゃんも着かへたら可いぢやないか。」

何心なくいつたのが、轟とお扇の身に沁みて、

「え、」

と驚いたやうだつて、派手な姿で打惚れた。今も聞ゆる三味線は、伐木丁々として身にこたへ

る。

「兄さん、お恥かしいんですけどね、まだ客が歸りませんから、」

「然うかい、そりや大變だ。何ね、僕も直に何するけれど、一寸何なんだよ。」

「否、構ひはしませんよ、ゆつくりしていらつしやいよ。向うはね、其内に歸して來ますが、貴

下は歸しやしないから、今夜はお泊りなさいましな。」

お扇は眞面目に言ふのであつた。

「申戯をいつちや不可い。」

「だつて、五年にも七年にも、私の處へ來て下すつたのは、はじめてぢやありませんか。」

「姉さん、そして、あの、おかみさんが、御酒をめしあがりますかつて、」

「御酒を、おかみさんが、」

と怪しむが如く問ひ返して、其の菓子皿にも氣がついた。

「一寸、おかみさんは此の方を誰だか御存じ、」

「あのく、姉さんの御親類の依様の若旦那ですつて。」

「まあ、どうして知れて、」

「よく、あの、姉さんが遁げてお歸んなすつたのを、あの、此の方の母さんが、おんぶをしちや、

内證へ連れて来て下さいました。……あの、何うもく美しいお方でしたつてね。いつも目につ
いて居るんだから、先刻店へ入らした、此の方を一目見ると、よく肖ておいでなさいますので、
直ぐに、あの、分つたつて、然う言つておいででした。」
二人は顔を見合せたが、おもひく胸迫つて、一緒に兩方へ打背ける。

矢羽の簪、むし目金

二十

「それで、あの、おかみさんが、一寸御挨拶に参りますんでございますけれど、お見受け申しま
した處、それぢや却つてお氣がつまつて何だから、いづれ、後程。」
それから、あの、姉さんに、お座敷の方は、松吉姉さんに然う言つて置きますから、心配しな
いで、ゆつくりお話しなさいまし……」

一ツしやくつて、息をついて、

「それから、あの、何ぞお好きなものを、姉さんにお見繕ひなさいまして、」

「然うなの、まあ、嬉しいわねえ、叔母さんには、沁々厄介を掛けたんだから、」

しめやかに、

「丁ど千代ちゃん、いまお前さんが、私に世話をやかせるやうにさ。」

と打微笑み、

「眞個に兼さん、貴下おつかさんに肖ていらしつてよ。私も叔母さんに肖るとよかつただけ
ど、内のおつかさんに肖たもんだから、まつたくよ、痘痕のないだけが見つけものだわ。」

「否、姉さんだつて肖ていらつしつてよ。だから、あの、あの、いまに御夫婦にお成ぢやをかし
いねつて、階下に居た光枝姉さんが、」

「あれ、何だねえ、兼さんあんなことを言ひますよ。」

と娘のやうに袂を捻つて、直ぐに氣をかへ、

「御馳走様ね。」

と棄てたる如く、凜々しく丁と向き直つた。

「御馳走と言へば何にしませうねえ。」

兼次は唯いとほしの人の、まぶしく燦然としてきらめく情に、射穿められた體で居た。……

「御馳走處ぢやない。何うぞ、おかみさんに、よく禮をいつて下さい、どの方か分つたら御挨拶
をするのでした。」

と小女に慇懃に、

「襟さん、最う僕はね、思ひ切つて店前へ入つたにや入つたけれど、隧道からパノラマへ入つたやうで、茫乎として途方に暮れたよ。」

「入らつしやい、なんて、店のお客様だと思つてよ、お民さんも、あとで極りが悪かつたつて、あの、」

「僕の方が餘程極が悪かつた。」

「此方にさ、お襟さんて方はおいでですかつて、あの、然うおつしやつたんですもの。あの、一寸は分りませんもの、誰方ですかつて、あの、お民さんが眞面目に然う言つてね。」

「何うしようかと思つたんだ。然うすると、さあ、何うぞつて、言つて呉れた人があつてね、」

「おかみさんよ、姉さん。」

「然うかい。」と笑つて居る。

「それから此の子に連れられて、其處の裏階子から上つたんだ、此處は襟さんの座敷かい、丁と一世帯ある、立派だね。」

姉の身には晴がましく、四邊を見廻し、

「大きな招猫が載つかつてら。」

「澤山よう、兄さん、」

と振向きざまに手が届く、箆笥の端の招猫、ちよこなんと招いたのを、平手で拂つて突飛ばすと、隅へころりと、横になつて、見當なしに矢張、招く。

「起上りだとおもしろいのに、」

と兼次は、はじめて莞爾。

「眞個にお前さん難有うございました。按摩の手引のやうだつたね。」

あらためて小女に。——憎からず初心である。禮いはれたのが嬉しいか、小女も他愛なく、

「姉さん、持つて來ませうか。」

「然うね、定金が可いね、あゝ、それも、」

と目で教へて、

「それからお銚子もね。可いのよ、私が頂くんだから、千代ちゃん何うぞ、」

「否、それも、あの何ですけれど、何處からか持つて來ませうか。」

仔細ありげに傾くので、お扇も何か考へたが、思當らない顔色。

「何をさ、」

「あの……起上り小法師。」

「まあ、次郎さんぢやあるまいし、」
思はず、我を忘れて、兼次の袖を打つと其のまゝ、淺黄紅二重ごし、玉の乳房のほのめくまで、ぐつと引いた兩袖で、顔をおさへて突俯して、およそ耐らないと言つたやうに、
「おほ、おほ。」

二十一

「其節は、また弟に、いろ／＼お土産を難有う。何、遅くなつたつて、叱られる處ぢやないけれど、丁ど其の心配の最中だつた。」

相談といつてね、襟さんに心配をさして可い事だか、悪い事だか分らないが、家ぢや、其から以來、笑ひ顔一つするものも無いくらゐで、外に相談の仕手はなし。

それもね、僕の一身上の事だといふと、政治家になるの、海陸軍を志願するの、やあ、文學だの、何のつて、出来ない相談でも何でもない、互に語り合つて氣霽しをする友達もないぢやないが、僕等學生には言つたつて分らない。時代違ひの父上の事なんだから、
と言ふ聲も、灰をつゝく火箸もともに、時々深く沈むのを、
「はあ、はあ、」

と早いきぜはしく、身に代へても、と思ふ人の、一方ならず苦勞の様子。驚破といへば死にもせう、と逸る身うちを震はしながら、一心に打仰ぎ、身體を捧げて聞くのであつた。

「此の間、先に頼んだ簪がまだ出来て居ないのなら、結び雁金の紋のにしないで、少し考へがあるから、三方黄金の羽にして、矢の根を鐵に、怒つ突たら何處でも通るやうな眞個ものの矢の簪にして欲しい、……こんな中に居るから、またどんな事がないでもない。お守に挿したいからつて………晩方來たね。」

聞くや否や、對手の兼次の話工合に、一大事、と鋭くなつた神經に、一言で色をかへて、
「串戲よ、串戲よ。兄さん、こんな商賣をして居て、まゝに成らないのが口惜いつて、何も、そんな、そんな、何も、貴下の父上に矢の簪を挿へて、頂いて、それで咽喉について死なうなんて、そんなんぢや………」

と太く急き込み、
「唯ね、何ですつて。私のおとつさんは妙な穿鑿をしたり、人に聞いたりして、扇子の骨をね、こつ／＼遣つちや考へたんですつて。内の紋が雁金だもんだから、あの、あとの雁がさきになつたら筈取らしよ、といふ古い唄があるが、何の事たか分らない。あれは、筈取らしよ、と言ふのぢやない。何でしたつてね、矢張筈のやうな名よ、其の侍が弓が上手で、其の甲賀よ、貴下。」

甲賀に射らりよ、といふのを間違へたんだつて、何うでもいい、のにね。京都の人だわね。まはりくどいぢやありませんか。

それだからつてね、嬰兒の時、私の名をね、弓を射る、射とつたけんですとき。阿母さんがすつとあとで、弓を射るは、女には強すぎるつて、襟となほしたといふんですよ。でもね、私ねえ、何だか小兒の時がなつかしいから、其の名にあやからうと、可いか、悪いか、存じませんが、おもひついたもんですから。

それに、此處らへ出入りをする、丈賀つて按摩さんがね。

此の間も祖母さんにお話をしましたけれど、誰のでもね、簪を抜かして、觸つて見て、（こりや不可ない。むらがある。仕事が強くて金がいふことを聞かないで、無理に、毛筋を通るから、目あきにあや分らないが、手に障ると敵り曲つて、ぶるくして妙でない。平兵衛さんの打たしつたのぢやござるまい）つてね、せ、ら笑ふの。私のは、

（いや、こりや兼長が打つた。）つて、莞爾ものなんですよ。

私、嬉しかったわ。

皆はね、比べて見ても何んにも分らないで、中にや希代だつて、蟲目金なんか當がつた人があるけれど、些とも何處がどうだか知れないもんですから、按摩が可い加減な、と眞個にはしませ

んけれど。

私はねえ。

ですから眞個の處は、魔よけにもと思つて、矢の簪を拵へて頂かうとしたんですの。何、貴下、それが、お氣に障つたの、どうしませうねえ、何ぞ縁起が悪かつたんですか。」

とおろくした。

二十二

餘りの事に兼次が、

「飛んだ……襟さん、」

叱るやうにいひ消して、

「魔よけだ、と言つて矢の簪をこしらへさしてくるのか。扇屋の襟坊は、私が細工の氏神だ、と其の心配の中へ、襟さん……」

ほつと一呼吸ついたくらゐ、其のね、按摩さんのやうなのが、他に一人でもあつてくれりやこんな事は起らないんだよ。

話の續きだから言つただけけれど、些とも襟さんに、かゝりあつた事ぢやない。

唯ね、簪を誂へに來た、あの時、父上は留守だつたらう。……三時ごろ妙見町の津田屋から呼びに來てね、

お扇は再び安からぬ色をした。が、最早座敷の三味の音など、耳へは入らなかつたのである。「知つてるだらう、旅籠屋さ。」

お扇は黙つて打領く。

「實は仕事が隙なんで、父上が困つて居る處だもんだから、いやしい料簡だかと、自分でも言ふんだよ。」

わざ／＼呼びに來るくらゐだから、些とは實のある註文でもあらうかと、喜んで行つて見るとね、——大違ひさ。

勿論、何んだ、高作ね、今の主人の。其の部屋に入つて見ると、……飾屋の庄九郎、

「え、」

女煙管を手にしたまゝで。

「大の仲悪の、あの男が、高作と斜つかひに控へて居たから、直ぐに、あゝ、こりや吉い話ではなからうと、氣の小さい人だから、胸がドキリとしたんだとさ。案の定！」

（さあ、此方へおいで。）つて庄九郎が差出てね。

（飾屋來たか。外ぢやないが）と高作も頭から馬鹿にして懸るんだ。銀で立濤の、蒔繪ものの臺の上へ、鬱金の袱紗をかけて、其の上へ香合をのせて、高作と庄九郎の中に置いてあつたのを、すつと押出して、

（そりや飾屋が拵へたんだな。）高作が、依とも平兵衛とも言はない、といつて父上さんは口惜しがるんだよ。そんな事は、まあ、可い。然うすると、襟さん、其の香合といふのはね。……僕等の母さんが、未だ内へ來ないで、扇子を商つて居た時分……

父上が、何んだつたつて、然う言ふんだがね。

あの……何んだつていふんだよ、……戀つてね、

と片袖、懷手で、すつと火箸を向うの隅へ、思ひもかけず手と手が觸つた。

「だもんだからね、不思議に、丁ど津田屋の先の主人から、千鳥の香合を一箇、家の寶にするからつて、黄金無垢で、些とは象嵌に他の金も入つて居るさうだけれど、正味三百五十匁もかゝつたつて。父上が一生懸命になつて、それこそ精進までして拵へたんださうだがね。心ぢや、そんな女々しい、母さんの名を思ひ詰めて、爲た細工だけれど、出來上つたものは、立派に男性に成つたんだとね。」

父上は何時でも言ふよ。下手でも仕事には念を入れる。随分舊の刀剣類の、目貫だの、縁頭に、自分でもこれならばと思ふものも、一つや二つ拵へたこともないぢやないが、皆むかうへ、志津なり、關の孫六なり、無銘なり、立派な男を置いて、それになかよくそふものだ。不殘女性で、出来のいゝのは別嬪と同一だ。

おれはぢゞむさくつても美人だわ、先づ、伊勢でいへば扇屋に居る襟的だと、否、嘘なら聞いて御覽。酒を飲みさへすりや、然ういつて、

(いや、どうも惚れ手が多くつて煩いやうだ。兼なんざ、二十も越して意氣地はない。小情婦一つ出来なからう)と、祖母さんが、苦笑をして、止せと云ふのも肯かないんだがね。

其晩は、酒を飲んでも酔はないで、眞蒼で居たんだのに、矢張其の別嬪を持出してね……其の話の次手にさ。

扇屋に居る襟坊が……否、眞個、それが證據にや、其時は最一人其の綺麗な女の、ひき合ひに出たのがある。襟さん、津田屋に娘があるつて？

高作の妹の。

花 一 輪

二十三

「ありますとも。兄さんは御存じぢやないんですか。」
と不思議さうに聞き返した。

「些とも知らない。」

「まあ、貴下、評判な方ですよ。御容色は言ふまでもなし、眞個にお優しいんですつて、高作さんの方は、」

と言ひかけて、少し低聲で、

「其の通り。失禮な、亂暴な、増長慢の酷いんですけれど、誰でもね、其の方の兄さんに、あの妹さんがあると思つて、腹の立つのも我慢するくらゐですつて。」

彼處でも、おかみさんがお亡くなすつてから、奉公人も居つかないで、まるで様子がかはりましたけれど、お嬢さんが臺所から、帳場から、すつかり世帯を引うけていらつしやるさうですよ。尤も何んとかで、總代だの、有志だの、演説會だのつて、高作は洋服を着て飛びあるいて、費

はされてばかり居るもんですから、津田屋さんも此頃では、餘程左前なんですとき。

それでね、お米さん——え、お嬢さんです。大層苦勞をなさるんですつてね。

めしものや何かも、親御はなし、一向お構ひなさらないで、お十九だといふのに、貴下、質素なつたら。大方母様のお少い時のを其ま、なんでせう。

つい、此の秋の中頃でしたつけ。一度ね、何處のか名のある代議士が、津田屋の西洋館へお泊んなすつて、お米さんでなくつては合點しないと、何とかね、酒の上でいひ出して、承知をしなかつたんださうでしてね。——其のお客をお送んなすつて、扇屋へ入らしたことがありましたつけ。大廣間へ御案内すると、……

(結構なお座敷でございますこと)つて、床の間なんぞ御覽なすつてさ。學校も大層お出来なすつたといふのに感心ぢやありませんか。襟のか、つたお召を召して、古代紫に白絲で、梅の縫のある半襟でさ、其の癖お品の可いこと、洋服で胡坐かいたお客はね、まるでお供のやうぢやありませんか。

豫てお美しいと、こゝいらでも噂には聞いて居ましたけれど、沁々お顔を見るのははじめてだもんですから、餘りお綺麗なのに皆が見惚れて、碌々お客様のお對手もしなかつたの。

髻はがぶり〜叩つちや、お嬢さんからんでさ。紅いめりんすの紐でしめておいでなすつた、格子のお召縮緬の前垂の上へ手を乗せたもんだから、松吉つて姉さんが、勿體ないつて、それから腕によりをかけて、何うやら恚うやら盛潰してあげますとね。お米さんが眞個にお喜びなすつて、お歸りがけに、ちやんと手を支いて、

(皆様、お世話でございました)と唯それだけ仰有つたんですが、御容子の好い處へ、心から然ういつて下すつたもんですから、皆が五兩づゝ頂いたより嬉しがつて、一座には十四五人も居たでせう。ぞろ〜残らず送つて出ましたがね、帳場で提灯をお點けなすつて、

(恐がり坊で困ります)つて、蠟燭の灯で、莞爾お笑ひ遊ばしたのが、今でも見えるやうで忘れません。

其の間、お客は大廣間に唯た一人、大の字形で横倒。髻むしやが飲した麥酒の中に蟋蟀が、死んで居てよ。よく蟻が出て髻を銜へて神路山まで曳かなくつてね、兼さん、もう〜代議士になんぞ成つて遊びつこなしよ。

さあ、樓中がお嬢さんに總岡惚れ、年があげたら津田屋へ行つて、一生奉公をすと言ふのがあるし、唯た一晚で可い、乳母になつても寝て見たいと言ふ人もあるんですよ。

御覽なさい。

其の今……あなたが召した半纏はね、爾晚、お嬢さんが着ていらした羽織とおんなじ柄です

よ。紺地にね、銀鼠と紅の縦縞、好いでせう。お色の白いのに、どんなにうつりがよく、眞個にほれくするほど、島田に肖合つて、お人がらで、しつとりして、それで粹でおいでなすつたでせう。餘りすいたらしかつたから、私もあやかつて拵へましたけれど、
とうつむいて、頤を、衣紋正しい二枚襲、古代紫の襟に埋めて、悄然として慎ましげに、
「私は、こんなですから、遠慮をして、半纏に拵へたんですよ。」

二十四

兼次は仔細なく聞いて居たが、

「道理で、そんな口惜い中にも、父上の目に附いたんだ。」

何だとさ。奥の客だと思つたんだらう。其の娘さんが、茶をついで持つて来て、丁寧に挨拶をしたのをね。

もう六七年行かないんだから、然うだらうね、十九なら、十一二の時しか父上は知つて居ないんで、御新姐かと思つたんだつて。それにしちや、娘さんが馴染らしく、

「暫くでございましたね、おとしよりはお障りもございませんか。」と、しんせつに、祖母さんの事を尋ねてくれたんで、父上は吃驚するほど喜んださうだがね。もてなしぶりに傍へ坐らうとす

ると、

「米、あつちへおいで。」と高作が追ひ立てたさうだ。

氣がつくと、十一二の堅い荅が忽ち盛りになつたやうに、風の中の花一輪だつたつてね。あとは枯野で、二人とも。父上には牛頭馬頭だらうではないか。

成程、其の娘のことなんだ。あの晩は、例の別嬪の引合ひに、最う一人殖えたんだもの。先づ伊勢でいへば、扇屋の襟坊か、津田屋の娘だつて、父上が、

お扇が、

「勿體ないではありませんか。」

「然ういふもの。迷惑でも、まあ、父上のいふ別嬪になつてお置き。」

と罪もなく言つて退けつつ、

「それでね、其二人のやうな容色でも、皆、他の仕事は女性だつた。が、あの——香合ばかりは男性に出来た。かけがへのない一代の細工だものを……」

それをね、襟さん、高作が鑄潰して、時計の黄金鎖にしようと言ふんだよ。」

「まあ……」と、お扇は聞いて呆れた顔。

「ざく／＼胸から帯へかけて、ぞろりと輝かさうといふんだらう。」

勿論、承りは庄九郎！大方、長崎で和蘭陀人から授かった、鎖の製法とか何とかいつて、勸め込んだのに違ひはないんだよ。

それはね、純金で三百匁上もかゝつて居ようと言ふ、千鳥一箇。指環にも嵌められず、煙草入の緒にはならず、帽子の徽章につけて歩行かれるわけではなし、見得にもならず、藏ひ込むで置くのは惜い。新に黄金の三百匁も、鎖だけに買つては大變、一層潰して地金にして、と思はれりや其れまでなんだ。

實際の用に立てばつたつて、掛物を描いた畫工が、其繪で障子を繕はれて嬉しいかい。

寒さを防ぐには其の方が重寶かも知れないけれど、と兼次は深く歎息して、一寸言を途切らした。

慰めかねて打沈み、力なく垂れた手に、煙管を遺瀨なく俯向けて、膝のあたりを叩いて居たが、憂慮しげに拱いた、男の顔を竊と視て、

「まあ、何うしたと言ふんでせうね、酒を飲んぢや、自分の身體さへ、打棄るくらゐな料簡で、家さへかまはないやうな人ですもの。其のくらゐなことは、あの人には當然なんですよ。

だつて、何ですか、其の用だけに叔父さん呼びつけたんですか。面當らしい、恥を掻かしたやうなものですわねえ、あの人は叔父さんに、何の怨があるんでせうね。」

兼次も沈んだ聲して、

「別に、怨も何もあるわけは無いんだからね、面當といふわけでもなからうよ、呼びつけたのは我儘なんだ。

而して用と言ふのがね、襟さん、恚うだとさ。

(飾屋、父爺に聞いたが、こりや交ぜものなしの極性で誂へたさうだ。ごまかしはあるまいな、念のために尋ねて置く。)

何處まで口惜いんだか知れやしない。」

目に暗涙を湛へたのである。

二十五

「父上は胸が切つて、急には口も利けなかつたさうだ。

(飛んだことをおつしやります。たとひ一厘たりとも間違はござりませぬ。)と庄九郎に見られま

いと、涙を呑んで、然ういふとね。

(だが、飾屋、純金にしちや、見た處色が白いが何うだ。)

(千鳥だからでござります。と、目を見据ゑて言つたんだつて。

内へ歸つて、僕たちに話すのにはね、黄色い千鳥は飛んぢや居ない。羽を浮かして、毛彫を入れた藪の工夫で、地金の黄金が、白く透いて見えるんだ。素人目にも見えたらしい。結綿に結つたお前たちの母様がなくつちや、あれだけのものは又出来まい。それだから惜いんだつて、父上は泣いたんだよ。

其の(千鳥だから。)といふ返事を津田屋でした時は、庄九郎が先に、高作が聲を合せて、一度にくつくと噴き出したとさ。

(節屋、隅へは置かれぬ、おとしばなしは旨いものだ、豪い隠藝があるぢやないか。)

(本職より増のやうぢや)と、庄九郎が口を合せていつたんだとさ。

(可、もう歸れ、一度口證據を取つたから、溶かした上で、げつそり減勘がたつた時、彼是は言はせんぞ。——其つ切。)

押賣をするやうな、恥を忍んで、縫らうにも、取つく島が無いのだから、蒼くなつて悄乎と歸りがけに、此方は夢中で氣が付かなかつた。帳場に居た其の娘が送つて出て、

(あれ、お履物を。)といふと、女中が聞かない顔をしたので、自分で式臺へ下りさうにしたもんだから、慌てて飛んで来て直したのを、手を上げて頂いた。其手を懐中へ入れたなり、まるで、

冥土の道でも迂路つくやうに内へ歸つたつて、父上は大病人なんだよ。——襟さん、そんな話の最中だつたから、弟が歸つて来て、

(唯今。)と言つたが、拍子ぬけさ。

(次郎助、坐れ。)と父上は、まるで、遺言でもするやうに、はじめから譯をいつて聞かすとね、奴は唯目を圓くして、

(殺したへ、切つたへ、兄さん仇討に行かうぢやないか。)つて、無暗と襟さんに買つて貰つた空氣銃を振廻すんだ。

(かたき討では後の祭、さし當つて千鳥の命が助けたい。そりや母様の死にめに合つたおれだから、二度其の思ひをするつもり、あの細工を打壊されるのを命日だといふ氣になつて、死んだと斷念める法もあるが、それにしても庄九郎の手に掛けるのは残念だ。)つて、胸を搔撈つて言ふのぢやないか。

襟さんも、彼奴の事は内々で聞いて居よう、ねえ、母様に何だつた……とさ。

そんな事で、眞個に父上の心が察しられるんだからね、

(兎も角、信心をさつしやい。)と、祖母さんがなだめてさ。

あとは神頼みにして、あの晩は寝たんだけれど、何時埧で沸られるか分らないもの。

まあ、父上は生きてるやうな人ぢやない。

何ね、量目さへ其の千鳥だけの、三百何十匁といふ純金を持って行つて、引換へてくれる、と言へば、何うせはじめから細工を無にした仕事なんだから、まさか先代が拂つた作料まで償うて返せともいふまいが、それだけの直段といつては、金にしろ、品にしろ、僕たちが今の境涯ぢや、殆ど何だ、人間業ぢやないんだから、のつけから考へられずに……

打棄つて置いた日にや、父上は氣が違ひもしかねないし、自分で自分の細工が惜しいといふわけであつて見れば、他人には話されず、勿論また話すやうなものもなし、恚ういふわけだと、僕の朋友に話したつて眞面目に聞いてくれようわけはない。後に政治家にならうの、外交官にならうの、大將にならうの、師團長にならうの、……といふ景氣の可い話ぢやない。たつた一羽の水鳥だ。千鳥をと言へば可いぢやないか、つけ焼にして搔食へと、對手にも何にもなりやしない。」

二十六

兼次は一呼吸ついで言を繼ぎ、

「襟さん、何も、こんな話をしたからつて、相談をしに來たつて、何うして欲しいの、恚うもし

て貰ひたいと言ふんぢやない。

また頼んだつて、出來ようわけが無いくらゐは知つてるけれど、」

と聲もしめつて、

「然うかつて、そんなわけで、誰に話をすることも出來ないから……襟さん、決して心配をしておくれぢやないよ。ないけれど、僕は、他、他人とは思はない。他人ぢやないのだから、一緒に心配しておくれ。」

父上と、祖母さんと、あの元氣のい、弟が、それからは學校へも悄れて行く……其の中に立つて……僕一人……」

と、握り詰めた拳をひたと、肱をまげて額にあてたが、火鉢についた腕の筋の、抜けたる如くがつくりする。

お扇もほろりと一雫、まつげに露をとめかねたが、しかしこれは、兼次のそれには似ないで、濡色の美しく、幽ながら、最優しい望の星が宿つたのであつた。

「兄さん、」

と覗くやうにして呼びかけて、竊と其の面を蔽うて、すゝりなく兼次の、固くなつた布子の膝を揺りながら、

「兄さん、」

「え、」

「よく、あなた、私のやうなものでも便りにして、相談をして下さつてね。よく、あの、他人とは思はないつておつしやつて下さつたわねえ。最うそれを聞いてはね、私の身體で間に合ふなら、直ぐにでも死にませうと、こんなに汗びつしよりになつたんですが、今のやうなお話では、然うした處で何の效もござんせん。」

私の心を見て下さいつて死んで了へば、兄さんたちに心配をさして置いて、身脱けをして、逃げて行くやうなものですから、自分では、どうにも出来ませんけれど、兄さん。貴下が然うやつて、父上のおために心配をなさいますのは、眞個に、無益ではありませんよ。私は神様のお引合せだらうと思ふの。」

高作はね、庄九郎が取巻いて、今夜、此處の樓へ来て居ます。」

「高作が、此處へ、」

兼次は、夢を驚かされた狀していつた。

お扇は落着いて、

「来て居ます。ですからね、兎や角いつて居ようより、之から私が、一緒について行きますから

ね、貴下、高作に逢つて、よくわけを言つて、お頼みなすつて御覽なさい。」

としよつた方は、然うやつて、あたまから呑んでかゝつても、貴下ぢや、父上とは、高作の方で面と向つた時に、心持が違ひます。」

否、私が取次ぎましたんでは、はじめつから、婦人が何をと、軽く考へますから不可ません。

それにまた、せり詰めて面倒になれば、可いよく、とばかし、はぐらかされればそれまでですもの。」

私の口から然ういつては、極りが悪いんですけれどね、兄さん、婦人が傍に居る時の、男の氣は、また不斷とは違ひますから、其處はあの、ついて居て、私が楯を取りませう。」

どうもね、何となく様子が何んですよ。今、他から其の香合だけの黄金の量を持つて行つて、

まあ、出来ない相談にしましてよ。

そして、取かへて下さいつたつて、庄九郎が中に入つて居ては、屹とそれも届きませんよ。

其の事ですわ、座敷でね。」

頻にあの庄九郎が、酔つていふのやごわへんがつて、しつツこく、何んですか、自分が承つて黄金を溶かして、まぜものをして、ごまかして、正味を盗むなんて、傍からいふまいものでもないが、其處は庄九郎だなんて言つて居ましたから、屹と然うなのよ。自分でいかさまをして儲

ける積りに違ひない、問ふに落ちず語るに落ちるつて言ふんでせう。

ですから、直接にぶつかつて——高作に、然うなさいよ。ね、然うなさい。男はあつて何と
かですもの。」

と勇みたつて、早や片膝立てつつ、立處に納得さしたが、——あ、二人は料簡が若かつた。
男はあつて碎けるは、其れは東の事である。

二十七

神路山、神の森、千歳の杉の緑濃く、五十鈴川の水上に、森嚴の氣の、紫立ちつつ、清く流れ
て灌ぐ空の、伊勢の海なる浅緑、一目小春の日本晴。残の蝶のひらりと、扇をつかふ暖かな、
うら枯野の尾花道。半町ばかり奥深く、茅葺の寺の名の、無憂寺と言ふ名高きが、——園中の一
樹あり。

神泉の汀、其の樹蔭に、世尊降誕したまひたる、波羅叉——即ち無憂樹は、其樹安住、上下正
等、枝と葉と布き垂れて、翠紫相暉き、孔雀の頂の粧あり。花咲くや、花妙に、薰香四方に
聞ゆ、といへば、姿も色も似たらすや、寺に久しき花桐一本。

いづれのお、ん時なりけむ、いみじく美しき、姫上の、生れさせ給ひしあとにして、ふるさと

なれば記念にとて、やがて此の寺建立あり。母君の供養のために、摩耶夫人を祭らせたまふが、
今につたへておはします。

奥庭なる菖蒲の池、龍頭の清水滴りて、深山の篋の音を通はせ、近き人里の塵を拂へば、境内
晝も寂として、階の前なる常夜燈、長に明星の光を放ち、浮世の闇を照すが如き、暗き本堂の
夜を隣りに、金欄の翠の雲、合天井に颯と輝き、月、物蔭に氣勢する、御姿の美しさ、水百合の
花に似て、御心の清らかなる、白蓮に異らす、と外國人も讚へけむ。雪より白き御膚に、瓔珞五
綵の星を飾りて、彼樹下におはする御風情。左手を胸に合掌して、衝と右の手を上げさせ給へる、
花の霞の天衣ひらけて、戸帳を射通す虹の色の、月の前に鬘鬘く状に、御袖の端幽にこぼれて見
え給ふ。

摩耶夫人の御像から、斜めにさがつて、御堂の入口。此方の本堂の階段に、草鞋のま、腰をか
けて、うしろむきに、裾引上げた膝の上へ、竹の子の皮づつみ、木賃泊りの晝辨當。胡麻の斑の
ある名も知れぬ大鳥の卵のやうな、握飯をつかひながら、ほく／＼と日のあたる、尾花の中の寺
の徑、四邊の人なき折からを、悠々として視め居る、長旅に薄汚れた行衣を纏うた一人の六部が
ある。

やがて済ますと、手甲かけた大きな手の、掌を當てて口を拭ひ、息を長く内へ引いて、一つ緩

かな咳したが、竹の皮を小さく疊んで、端を裂いて一結び。

おなじ階段、腰の傍に下し据ゑた、古びた笈摺にならべてあつた、圓盆に、土瓶と煎茶々碗、小皿に茶漬をてんこ装で、塗箸の附いたのは、思ふに辨當を使ひまするで、白湯一つ、と無心したのに、方丈が心添へをしたのであらう。

盆の端へ、鼓竹皮をさし置くと、其の手で茶碗を取つて、つぎ冷しになつた奴を、猶何處までも枯野の上に見渡される快よき蒼空を仰ぎつつ、落着いてぐつと一口、心ゆきさうに飲んだのを、其ま、舊へ、底をかへしてカチリと伏せた。

さて笈摺の荷ひ綱にわがねて掛けた、煮染めたやうな豆絞りを、解いて取つて行衣の懐中。横から掬ふ如く肩を入れて、御佛を負ひ奉る、と居直つて、しやんと立つた。白の脚絆もしつくりと、六十餘州遍歴の足拵へ、穿きふるしたがきり、とした、切草鞋を踏揃へると、報捨の澁茶の盆を据ゑて、向うさまに、本堂なる板敷の上へづいと直した。

「お造作になりました、御方丈、御方丈、」

と鏽びた聲を此と高めたが、寺は無人で唯一人の方丈殿、はて、裏の畠へござつたさうな。

二十八

然せる事には馴れた體で、六部は繰返して呼もせず。向うの壁に押つけた、蜘蛛の巢だらけの梯子の際に、奉納したやうに、又忘れたらしく脱いであつた、菅の小笠を軽く取り、根附の見得で引附けると、斜つかひに小腰を屈めて、彼處に翠の帳の内に、其の影宿る御氣勢の、人丈ばかりにおはします、世にも妙に美しき、迦毘羅城の後の宮、摩耶夫人の立像を、竊と仰ぎ、默拜して、本堂を通して、方丈の襖の方へ目を遣つたが、さて、

「皆様、お世話様になりました。」

こ、をかしき六部よ。眞顔に、御佛たちに會釋をしたが、其ま、敷居を軽く出る。つくりつけた笈も揺れず、やがて枯野の後姿。

尾花を分けて、四五間が程こそありけれ。古物怪を爲すやらむ、大切な忘れものが、持主を追つかけて、慌しく飛んで來たかと、夫人の御前を鼠の躑音。

階段の上の板敷暗きに、常燈明の光をうけて、きらりと輝く猿眼、毬栗天窓を推据ゑて、末黒の枯穂に散り交る、伊勢の濱荻、蘆の綿、霜の飛び敷く眺さへ、暖かさうに目をうけて、物憂げもなき行衣の袂、樺色に染めて行く六部を、上から熟と見透したが、有草生庭、階三段ばかりを一飛びに、紺足袋の足を空。

敷居際に丁と踞むだ、機勢に腰を引立てると、造作なしに尾花を飛んで、瞬く間に、六部の背

後、

「小父さん、小父さん、」

と呼びかけて、脊丈もちやうど、六部の腰へすり寄つた。其大眼球の毬栗で、緋の筒袖に縞の襦袢、小倉の袴の處々、襷があるやら、裂けたやら、合叟から膝小僧、くろぼしまで襠が下つて、和光の玉の塵まみれ、浅草海苔かと輝くを、引上げた股立ち高く、浅黄の風呂敷を西行背負ひ、結び目を胸に大きく、腰に手拭を引挟んで、小鳥打の空氣銃、鐵の色新らしきを、臺尻細く引摺んだ、歩兵、工兵、仇討、狩人も、狐も、庄屋も、小さな身體に引纏めて、五節句でこねたやうな、此の腕白を誰とかする、依の次男次郎助である。

「呀、おれか、」

と六部は振返つて、じろりと見て、吹出しさうな柔和な顔。

「うむ、小父さん、」

此のくらゐな運動では、呼吸もはずます樂なもので、ト六部の額に目をつけて、下からぐつと見据ゑながら、

「小父さん、何處へ行くえ。」

「何處といつて當なしよ。」

六部は、顔もいふことも、故とか知らず茫乎答へる。

「然う、當なしか、」

言ひながら猶瞻り、

「嘘だらう、小父さん、當なしだなんて、そんなことを言つて、丁と行く處が極つてやしないかい。」

「一通りは極つて居るわさ。まづ、山から出て、町を流れて、野を越えて海へ行くよ。水の流れると人の身ぢや。けれどもな、海からさきは分らない、己にも何うするか知れはせんよ。」

と此の時は微笑んだ。

次郎助の目は和らいで、

「ぢや、ぢや、あの警察へ行くんぢやないんだね。」

言の下に、

「は、妙なことをいふ兒だぜ。恚う、己は六部ぢや。寺々と木賃宿、御報捨下さる檀那衆のお門にこそ用はあるが、とんと警察に行くわけはないな。」

「眞個かい、小父さん、」

「六部ぢや、と言ふのによ。」

と判然とした調子であつた。

惑星

二十九

「小父さん、」

と次郎助は又呼びかけつつ、

「六部つて、六部つて何だね。」

「はあ？ 六部が何ぢや……といふのかな。」

其時まで、生え抜きもののやうに見えたのが、菅笠を取つて、俯向けにして、胸へあてて其の下で手を拱きながら、次郎助の状をつくつくくと、

「待てよ、」

といつて空を仰ぐと、恰もこゝに花桐の見上ぐばかり幹高きが、葉こそ花こそ今はなけれ、古の宮の宮柱、すつくとばかり空をさして、梢に晝の月をかけ、枝にまばゆき日の光。御堂の中には摩耶夫人。六部は額に手を加へ、頭を下げ、頂いて、其花桐の蔭を行くと、傍に、石塔の臺石

ばかり残つたのに、芒を敷いて腰を掛けたが、菅笠を取直して、ポンと次郎助の足許へ。

「まあ、坐れ。然うだ〜。赤土ぢやから直接に遣つては臺なしよ。それ足袋を見な、泥だらけ

ぢや、履物は、」

「草鞋が彼處に脱いであるよ。」

とばかり、見返りもせず、塵も拂はず、ちよこなんと笠にとまつて、偏に答を待つのである。

「待てよ、六部つて何だ、と聞くか。」

然うよなあ——

まづ、何さ、別なことは無しよ。坊主の形の變つたのぢや。矢張それ、世捨人さな。恚う其の見た處は、目鼻も揃つて、手も足も満足でありながら、人間で居て人間でない。然うかといつて、狐狸でもない奴ぢや。おなじあかりでも、日や月は言ふまでもない、電燈よ、瓦斯よ、洋燈よ、そんな結構な光ぢやない。ぶらり〜と歩行く處は小田原に似て居るが、提灯の役にも立たぬ、人魂のやうなものよ。

雑と人間のひとだま親仁が、見なさい、此の、笈摺を背負つて歩行いて居ると思つたら、大概可からう。」

わかつたか、と六部は自分で頷いた。

次郎助の目は尙ほ圓く、笠に坐つて、笈を狙ひ、

「そりや、何なの、笈摺つて？」

「是か、」

と膝に兩手をしやんと、胸を前へ乗り出すと、笈摺が揺れたのである。

「こりや、何よ、戀の重荷よ。」

六部は胸がすいたやうに、恚う言つて莞爾とした。が、次郎助には合點ゆかず。

「なぜ、何うしてそんな六部になつたの、」

と別の方から裏問ひかける。

「む、何か、己が其のひとだまに成つたわけか。いや、些とをかしいが、色戀から起つたよ。」

次郎助の目は益圓で、

「色——色——戀つて、何だ、そりや。」

此時軽く膝を叩き、

「ほい、先方は小兒ぢやわ、」

と大口を開いて、呵々と獨りで笑ひ、

「成程、分るまい。色戀といつて、然ればさな。」

莞爾々々しながら、樂しげに打案じた、六部は次郎助が引きつけた件の得物に目をつけて、

「お、素ばらしいものを持つて居るな。」

「扇屋の姉さんに強請つたんだ。」

と、さすが少年のあどけなく、然も得意らしく捻くり廻す。空氣銃でも飛道具、知らず、是あ

るがためか。四邊に雀の聲もせず、遠くの方で烏が見て居る。

六部は深く打領き、

「何、別に大した仔細はない、恚うなつたらよく分らう、」

尙ほ空氣銃に腫を注ぎ、

「己が、其のために、こんな六部になつた……色戀は、」

「うむ、色戀つて？」

「知るまい、學校では教へません。色戀といふのは、ぢや、其の鐵砲のやうなものよ。」

と六部は又哄然として高笑。

三十

「は、は、何の事はない鐵砲彈よ。言ふまでもない事ぢやが、それ雀な、四十雀な、其鐵砲な

ら山鳩も打てるぢやらう。

まづ、それ狙を極めるわ、喃、打つてこましよ、と恚う、

六部は腕を狙の構へで、片目瞑つて眉を寄せ、

「一つ、的へ向つた時は、一心不亂ぢや。鹿を追ふ獵師山を見ずとやらで、身も世も忘れて狙うてな。」

どんと遣るわ、よしか、當れば占めたり。

外れたが最後、的も彈丸も行方知れずよ。中には其處らの樹の枝へぶつかつて、啄木鳥の玩弄物に成るのもあれば、小笹原へまぎれ込んで、兎の糞と間違へられる奴もある。

ポンと度外れにすつ飛んで、方圖なしに外れた彈丸は蒼空の中を、

と仰いだ、花桐の梢が高矣。

「天上へすつこ抜けて、星になるて。」

たゞし星の中でも、氣の利かない、夜這星といふ奴よ。な、夏向すい／＼と怪し飛ぶ連中、それ、宙ぶらりに其處等をまごついて歩行くのよ、分つたか。」

と顔を見ると、次郎助の目は睜られて、話の星も映りさうな。

「其癖消えてもなくならず、太陽に、月がついてあるくやうに、今日は伊勢、翌日は伊賀と、六

十餘州ぐる／＼とまはつて、上りなしに、賽ころは又もとの振出しへおもどりよ。

こんな理窟は己よりは、お前の方が、學校で知つて居よう。色戀にそれた彈丸は、軌道をはづれた、惑星ぢや。

六部もまた其の通り。此の世の中には居りながら、往來はづれをうろつき歩行くわ。まづ／＼人間で居て人間でなし、それ獸にも身體は肖すよ、妖物と言ふわけでもなからう。提灯ほどの用もせぬが、恚うやつて晝日中、お前さんの目につくからには、ひとだまと言ふでもなしか。疾い處が、其の行方の知れないそれ彈丸が、ひよいと流星になつて見えたのぢや、と思へば可からう。おなじ月日の下に居ても、まるで曆が違ふのぢや。不思議な夜這星があらはれた、と天文臺では口を利いても、警察や巡査には用のある己ぢやない。

何うぢや、分つたかな。」

と膝を臺に、頤杖ついて、閑々としたもの也。

略其の意を得たらしい、次郎助身構を崩すとともに、懐しさうな顔色で、

「ぢや可いや。小父さん、お前、あすこで、あの、僕がした事を見て居たらう。」

と肩をなだらかにして擦寄つた。

六部は平然として、

「何をな、」

「うゝむ、あれよ、彼處の、あの、摩耶夫人様の、恠うやつて、右の手を舉げておいでの、手の中へ隠したもさ。」

「どんな奴が搜したつて氣はつくまいと思つたけれど、チョツ、高慢に舌打して、」

「仕様がないやないか。すぐに見附かつたんだもの。僕はあの、横手の薄原から窓に飛込んで、一生懸命で隠したんだ。目が眩んで外のもは些とも分らない。唯、摩耶夫人様の顔ばかり見て居たもんだから、氣が付かなかつた。」

「誰も居ないと思つたら、小父さんが飯を食つてたんだぜ、僕は何うしようかと思つた、」
「はじめて空氣銃を放した手の、握りつめて汗になつたが、袴でこすつて、」

「可いや、」

「嬉しさうに莞爾笑ひ、」

「構はないや、そんなお星様なら見られたつて構やしない。僕は盗んで來たんだぜ、盗坊なんだ、小父さん。」

「然うか。いや、お釋迦様の母様に大びらで預けるくらゐぢや、夜這星に見られたつて、仔細は

ない。心配は些とも要らんが、幾歳だ、ふう、十三か。」

「名は、次郎助、依といふ白銀師の次男だと、依……」

「と口の裏に言つた時、夢のやうな顔を支へて、六部の右手はぶる／＼とした。」

「しかと左の拳を握つて、」

「盗んだものは、一體何かい。」

「父上のね、」

「次郎助は顔を寄せて、低聲になり、」

「父上のこしらへた、黄金の千鳥の香合なんだよ。」

花園、宮殿

三十一

「——それからね、それからね、小父さん。——」

「……扇屋の姉さんが、丁ど其の晩遊びに來て居た、其の津田屋の高作といふ、持主の奴に頼んで、是非、あの千鳥の香合を、壊さないやうにして貰はう、と思つて、一緒に其の座敷へ行つた

んだつて。……

高作の奴はね、太く酔つて居たさうだけれど、姉さんが、私の従兄だつて然う言つたら、厭に
きちんと行儀をよくして、眞四角に坐つて、あの、

(依君か、はじめまして。)其の庄九郎といふ奴が、

(いや、依の少いのおいで、まあ、お杯を、)と矢張極つてね。杯洗にす、いだりなんかして、杯
を獻すんだつて。兄さんはね、小父さん、些とも飲めない。」

「はあ、いかんか、兄さんは幾歳だね。」と六部は懇な問ひぶりである。

「二十一なんだ。」

「二十一、いや、少ないな、これからぢや。酒なぞあがらん方が結構。何かね、同じく父上のお職
をしてか。」

「否、大工を遣るんだつて。父上は細い仕事をして、然うやつて馬鹿にされるから、口惜いから
そんな掌で掴まれたり、袂へ入つたりするやうなものでなしに、戦争でなけりや壊れない、戦争
だつて、日本だから大丈夫な仕事をとひふの。」

精出して勉強して大工になつてね。今に其の願が叶ふと、此のあの伊勢の宇治山田を、まじり
のない神様の土地にするんだつて。女郎屋や旅館なんか、皆停車場の外へ抛り出して、お宮様

ばかりにして、あとをね、綺麗に、可厭な奴の塵埃一つないやうな花園にして、五十鈴川の両方
へ一面に、美しい花を栽ゑるの。

そして園へ、雪の山のやうな大理石の、素ばらしい大きな御殿を建てる、

神路山、宇治橋邊の常盤樹は、お月様の中を透過つて、月桂樹が見える様な工合にして、其の
大建築物の上へ、百萬燭ぐらゐるな電燈をつけて、山田中蟲の這ふのも分るほどな月夜にする。

あんな、網をふつてお錢を投げて貰ふ、見世ものの木戸錢を取るやうなものだの、それからね、
古市邊の兩側はね、女郎屋の硝子でも、赤福餅、諸白の徳利、残らず、色氣工合が安繪具を塗こ
くつた、手品の看板見るやうで厭だから、津の方へ掃き出してしまひたいつて。

夢を見たやうな目的なんだ。

それもね、其の晩、高作に散々おびやかされて、熱病にかゝつたやうになつて、酒の酔も苦し
いし、うつら／＼しながら、窓から月影の射すのを見て、そんな事を考へてね、このあひだ、一
緒に此のお寺へ摩耶夫人様拜みに來た時、あのお堂で、僕に沁々いつた。

あゝ、矢張父上の事について願がけに來たんだよ。」

と早口ながら刻むが如く、次郎助は確乎語つた。

「む、癖に障つたまぎれに、希代なことをもくろんだわ、はゝはゝ。」

いや、例のそれ、鐵砲彈丸がボンと飛びの、夜這星になる一件ぢやと、鼠木綿の半反も引絡めて、笈摺を背負つて出りや立處に間に合ふが、山田を其のまゝ、月宮殿にしようといふのは、些と凄い。

しかし、可い……月だけに始末が可いわ。おなじ事でも夜這星を心懸けると、六部になつて了ふ處ぢや、少い人がそれでは大變。

また、そんなに口惜いおもひをしたのか。

「兄さんは話す時、ほろ／＼泣いたぜ。」

袂に縫つて、頼まうと思ふ、此方に弱身があるもんだから、あの、言ふことに逆つちや悪いだらうと、飲めない酒を毒藥のやうに、身ぶるひして嘗めるのを、姉さんは高作の傍に坐つて、はらく／＼して見て居たつて。」

三十二

「然うやつて、どうか、怨うか、杯を下に置くと、今度は、一つ頂きませう、色男あやかりたいなんて、庄九郎までがちよつかいを出したつて言ふぢやないか。

可加減に呼吸が苦しくなつたのに、はあ／＼いつて、それから、あらためて手を支いて、其の

父上の香合のことをいひ出すとね。」

「然うすると……」

「野暮な、そんな事は、まあ、あとだ、一つうかゞひませう。」

（是非ひとつ、いや隠されるだけ、なほ聞きたい。）と、二人でね。

小父さん、兄さんに唄へといふんだ。

兄の奴あ、からつきし出来ないや。シノ、メノストライキどころか、何なの、學校でも唱歌には弱つたつて、零點なんだ。

「は弱つたつて、零點なんだ。」

斷つて出来ないと言ふと、突放して出て行きさうにするから、姉さんがね、一杯涙をためた目で教へて、三味線を取つて、横を向いて、而して竊と泣くんだつて。

うたつたさうだ。遣つたつて僕に話したがね、何を怒鳴つたか、僕それを聞いたけれど、思ひ出しても冷汗が出て、極が悪いつて話さないよ。

あゝ、大方、松山かゞみ照らさばやといふ、女の子の遣る、情ない聲の唱歌でも饒舌つたらう。時々口の内で言つて居るんだから、意氣地はないぜ、小父さん。

でもね、可哀相だ。

蚯蚓のやうに一聲引張ると、可い工合に姉さんの、三味線がフツ、リ切れた。」

— あはれ玉の緒も絶ゆる思ひの、絲は其の時切れたのであつた —
「お庇で唱歌は止すことが出来たけれど、其のやはり、姉さんがみじめぢやないか。
(せつかく俵先生が、)あの、最う杯の遣り通りの時分から、先生、先生と言つておひやかしかしは
じめたつてさ……」

(せつかく、あの俵先生が、隠藝をお遣んなさるのに、如何に拙だからつて、愛想を盡かして、
故と絲を切る法があるか、失敬な！)

(あれ)と立たうとするのを、裾をつかまへて引張り寄せて、斜つかひに、あの反る處を、

(あやまれ)といつて腰を突き飛ばしたんだつて、姉さんは、兄貴の傍へ倒れてそれなり、

— お扇は、ものうき身だしなみ、又其の座敷へさして出て、此時落した簪を、前に平兵衛に
頼んで置いた、矢のそれならば、と思ひしならむ。戀しき男の羽織の袖を、雪の頸に打ちかけて、
婀娜な姿を投伏しつ、

(堪忍して下さい)と其まゝ、兼次の足のおや指に、しつかり食ひついて泣いたのを、どんなに
果敢なく喜んだらう —

「それなり、あの、姉さんは泣いたつて、兄きに空氣銃を貸せば可かつた。
そんな時は目をねらつて、ズドンだ。

何んでもね、高作の奴はやきもちを焼いたんださうだからね、尙不可い。

それでも他に爲やうがないから、兄きはまたあらためて、千鳥の事を頼み出す、と今度はあた
まから刎ねつけるんだ。

おもしろづくに刎ねつけるんだ。

(せめて、二三日貸して欲しい、もう一目父上に見せたいから、)とまで言つたけれど、それさへ
肯きさうな顔もしないで、庄九郎の奴がまた、然も其の黄金を、何うかごまかしてもするやうに
盗坊あつかひにしたもんだから、弱兄も眞赤になると、姉さんがね、目で留めちや、竊と袂を引
張つたつて。

其時にはね、姉さんが、今突飛されたのを幸にして、此方の火鉢に坐つて居たつてよ。高作が、
(おもしろくない)、餘處の樓へ行つて飲み直さう、さあ、貴様來い)つて、うろくする、
姉さんの腕を、もげさうに、

(あいつ、)といふのを引張つて、よろけながら、廊下へ出て、階子段の上の處で、

(こん、畜類め)とうしろ抱きに、咽喉へ腕をまはして、あの、搦みついて緊めた處を、庄九郎
の奴が、横合から、

(い、加減に轉びやがれ)つて、姉さんの裾をね、足を舉げて梓に掛けたから耐らないや、仰向

に倒れると、高作も酔つて居るから、ともだふれに横倒し

——亂る、裳に、かつ散る白脛、柳に雪のちらめくばかり、階子にこぼれた友禪の、淺黄忌はし水小袖、棺の上にはほの見えて、駕籠を洩るゝに似たりしが——

ひとり寐

三十三

白き頸を捻るばかり、お扇は切なさうに差伸して、高作に緊られた肩を揺つて、身を顛はし、障子の際に凍りついた、兼次を一目熟と見たが、其ま、地獄へ落つるやう、階子を下へ沈むだのである。——

「座敷にはね、姉さんが、兄さんに會つて居る内、一生懸命にごまかして居た、他の藝妓も持餘して、其の亂暴を遣つた時は、誰も傍にや居なかつたつて。

其のまんま身體が消えて、なくなつてくれれば可い。兄きは廊下の障子にしがみついて立つて居たんだ。氣がついて、跣足で飛出して、家へ歸らうと思つた處へ、松吉といふ年紀上の藝妓が来たの。

そして、あの、抱留めるやうにして、（お扇さん）——あ、姉さんの、ことづけがあつた。どんなにもして、あの事、其の香合の事を高作に背いて貰つて、い、返事をする。直きに歸るから待つて居ておくんない。此方へ来て、此方へ来て、と先のまた姉さんの部屋へ連れて行つたさうだけれど、方々の障子から、銀杏がへしだの、島田だの、中には此頃はやる束髪のだの、いろいろな顔を出して覗いて見たんで、どんなにか極りが悪かつたつて。」

次郎助は物語りに氣が入るか、袴腰に搔敷いた六部の小笠をすり出して、腕白な胡坐になり、枯野に（桔梗）のゆかりはなきも、破れ袴にまつはる草を、其の口にした鬚の數ほど、撈つては棄てて、

「高作の座敷へ頼みに行く、出がけに禿が持込んだ御馳走は、酒も何も冷え切つて、凍りついて居たもんだから、其の松吉といふのがね、小父さん。

手を叩いて、禿を呼んだのを、下戸兄は薬ほどでもないけな、と蒼い顔をしたなり、吃驚するやうに留めたもんだから、それでは無理には勧めませんと、来た禿にいひつけて、長煙管を取り寄せて、一服やつて、

（寂しくとも我慢なさい。お扇さんだつて、あの、一度そこいら、わがまゝをして、座敷を斷つても可いわけだけれど、主婦が思ひやりのある、分つた人だけに、自分たちも、つとめは投げ遣

りに出来ないから、どんなに辛かつたか知れないのに、可哀相にお扇さんは他樓へ連れられて行つたんです。ほんとにこれが、あの、苦界とかいふんだ。つて、話をしいく箸を持つて含めな

いばかりに、御馳走を勧めてくれたつて。

僕なら遣ツつけるけれど、弱兄だからね、小父さん、然うはいかないや。

「應、然うはゆくまい。」

六部は半眼に目を据ゑて、打傾きつつ聞くのであつた。

「其處どころなもんですか。うま煮の中の慈姑だつて嚙込さうにもないんだから、松吉が、

(それでは床をのべませう。横になつてお待ちなさい。お扇さんは本を讀むのが好きだから、何處か抽斗を捜したら、敵討の講談ぐらゐりませう。

用があつたら、遠慮なしに、何時でも手を鳴らしてお呼びなさいよ。私は又これからわきの座敷で唸ります。月は凄し、霜枯なり、狼の遠吠だと思つて、奥山の辻堂に泊つたやうに、心細がつては不可ません、夜のはお扇さんの移香がしますよ。)

小父さん、其の松吉が串戯をいつて去つたとき。

それから死んだやうに倒れたが、後で、恙う、あの、幾つも上り下りのあるやうな、廣い二階の遠くの方で、松吉だらう、夜が更けてから唯一人、佳い聲で唄つたつて、發の音が枕を引切るやうに響いて、何ともいへない氣がしたつてよ、小父さん、兄きがいふんだ。二時打つて、しばらくするまで知つて居たさうだけれど、掛けてる夜具が重くなつて、あの、胸を壓すやうで、呼吸が苦しい。肩が寒いのに汗が出る。あたまはぶん／＼痛んで来るし、おとつさんの蒼ざめた顔が見えるし、祖母さんの白髪が見えるし、犬の長吠が聞えるし、家はどうなつたかも知れないと、むつくり起上ると、廊下に登音も聞えないから、何處をどうして歸る方角も分らなければ、もう門も閉つた頃だし、門が閉るくらゐでは、姉さんも歸りはしまいし。」

三十四

「然うかといつて、夜のあけるまで、待つて居られるか、それも尋常の家ではない。祖母さんだけは、内々含んで居るものの、こんな處へ來た事は、父上にも祕密なら、自分たちの友達にも氣取られては大變なわけなのに、お扇もお扇だと、何だか怨めしくもあり、腹も立つ。口惜い、といへば座敷で唄を唄つたと、うつむけになつて、自分で耳をおさへたり、横になつて、姉さんの事を考へたり、あをむけになつて、内の事を案じたり。

手も足も引斷つて、方々へ投げ飛ばしたいやうな氣がする處へ、……千鳥の聲が聞えたつて、……小父さん、遠くの川の音がしてね。

や、千鳥が鳴くと、思ふと、其の聲が父上になつて、兼や、兼やと、そこいら駈け歩行いて居るやうに思はれて、又飛起きたり。

獨りで、アツといつて見たり、目をばつちり開いたり、長い溜息したり。頭を引つかんで寝ようとするやら、枕を裏がへしにして押つけるやら、あせり切つて、悶え抜いて、了ひにや最う是つ切で、父上にも祖母さんにも逢へなくなりはしなからうか、と頬邊つたはつて涙が出たつて――

家ぢやあね、小父さん。

兄きが、其の留守の晩、昔から内にある、眞鍮ぶちの柱時計を盗まれた。

安ものだけれど、些とも狂はないのを父上が自慢にして居たのを、すほんと奪られたんだよ。

まだ宵の口だけれど、父上は、兼は何處へ行つたらう、未だかくと心配する。……祖母さんは、藝妓屋へとは言はないで、案じさつしやるなと言ふばかり。父上が氣を揉むほど、歸りが遅いもんだから、長火鉢にむかひあつて、黙つて二人とも俯向いて居たんだ。此の節は毎晩然うなんだ。

僕はね、納戸の床に入つて、此の、あの、空氣銃を持つて、ズドーンなんて口眞似をするけれど、叱りもしなければ、笑ひもしないから、張合がなくて、茫乎して居た内に、祖母さんが、何

時だらうと、時計を見ると、小父さん、すぐ傍の柱にかつたのが無いだらうぢやないか。

また其晩に限つて、洋燈をつけたあとで、祖母さんが、ぜんまいを巻いたんです。

今の間に、ちよろまかされた。頬被をした奴かなんか、土足でのそくと入つたもんだ。あ、恚うまで變になつては、壽命もたんとあるまい、と父上は情ないことを言ふし、祖母さんまで、何だか急に時計がないので、家内ほかんとして、何處も世界に取つき端がないやうぢやと言ふし、兄きは歸らず、どんなに弱つたか知れやしない。考へて貰ひたいやツて、兄きにも言つたけれど、小父さんにも考へて貰ひたいや。」

次郎助は、突掛るやうなものいひ。

「察しるともな、いや、散々哉。」

「兄きは一晚の内に瘡つこけて、大病人のやうな顔をして、あくる朝歸つたけれど、其つ切、家ぢや、時間が分らない。僕も學校を休んじまつた、まるで方なしだ、あ、と、うつむいて、けろりとして、

「おみくじやら、何やら、内で騒いで居るうちに、兄きは、然うやつて、姉さんの夜具の中で、のツつ、そツつ。其のうちに疲れ切つて、うつとりとなつた處、戸外が、冴えた月夜のやうな氣がして、何だか、ちら／＼千鳥の影が見えたから、それで、あの、山田中公園にして大理石の建

築をして、自分が大工になつて、と考へて居る枕許へ、すつと襖を開けて、婦人が入つて、膝を支いた。

黙つて居ると、煙草入を手に取つて、三服ばかり吸つて、トン／＼と靜かに拂いて、あゝ、寢よう／＼と言つて、長煙管を提げて、裾をす／＼と引いて、出て行つたつて……松吉だつたつて。

あとで、了つた。此の人に、然う言つて、歸して貰ふんだつて、と氣が付いたが、最う遅い。――寢よう／＼で寐たんだらう。

寂として、何處にも物音一つきこえなくなると、又目が冴えて来て、さあ、今度はまた、胸を、針の尖でキリ／＼突つかれるやうで、じり／＼して、ぶる／＼ふるへて、あぶら汗を掻いて、耳がくわ／＼と鳴つて、動悸が酷くなつて、ドン／＼突上げられる様で、嚇とのぼせて、恍惚氣が遠くなつて、はつと氣がついた拍子に、悄乎と箆筒に凭れて、髪ばかり黒く、顔ばかり白く、薄ら蒼く立つて居る姉さんの姿を見た時は、ちやんと、慙ういふ約束で、此の時、歸つて來たのが前の世から、極つて居た事のやうに思はれたつてよ。」

「姉さんの歸りの遅かつたのを、別に、怒つて居たといふ譯でもないんだけど、氣が苛々して、耐らなかつた處だもんだから、突然。

(僕は歸る)つて、兄きは寢床から匆起きたさうだ。

姉さんが、涙聲で、

(あゝ、お内でどんなにか御心配なすつて被在やるでせう。まだ夜が明け切りませんから、戸外のお寒さつたらありませんけれど)と言つて、あの、背後から羽織を着せて、片袖通すと、通さない左の袖を、緊乎掴へて顛へたんだつて。爾時手が觸つたら、姉さんの身體は、着物に霜が下りて居て、氷のやうに辻つたとね。

それこそ、どんな目に逢つて、どんな寒い思ひをして歸つて來たか分らない。可哀相だつたつて。そして大地震か、戦争で、離れ／＼になつたのが、死んだあとで、六道の辻か何かで、めぐりあつたやうな氣がした、と兄きが言ふんだ。

(高作が承知をしてくれたのなら、それを手柄に最う些と引留めたいんだけど、どうしても肯いてくれません。

せつかく相談して下すつたのに、此のま、歸して了つては、叔父さんが、何うなさいませう。第一貴方は何うなるの。私は死にたい。)と姉さんが、然う言つて泣いて居たさうだがね。

(他に詮方がありませんから、あの、高作の妹さんの、お米さんに頼んで御覽なさいまし。貴方が直接に逢つて、よくお話をなさいますと、屹と、しんみになりませう。

そして、其の千鳥の香合は、貴方の父上が、母上の事をおもつて、一生懸命にお拵へなすつたと謂ふことと、私の叔母さんのお名が、其の千鳥だつて事と、鞆にかけて今其の香合をこはさうとする庄九郎は、母上に、不都合をしようとした畜生だと言ふことを、よく言つてお話しなさい。作のよしあしやなんか、分らないでも、女は氣の弱い、胸の狭いもの、死ぬも活きるも情ばかり。

貴方の口から、お米さんが、それを聞いては、屹と命がけになりませうから、其事を、其の事を、ッて、)

——お扇は繰返して、其時、遺言する如く言つたのであつた——

「小父さん、女つて、そんなものかい。」

聞き惚れて乗り出して居た、石碑の臺石の上なる六部は、急に問ひ返されて、「む、」

と言つて、胸を引いた。刮と目を開き、

「先づ、そんなものだらう。む、處で、」

「それから、あの長い廊下を一里ばかりも、黙つて手を曳いて、送つて出て、門口で、(御機嫌よう)と、島田鬮を、ひつくり返して、伸上つて、明星の落ちさうな處へ、顔を出して見送つたんだつて。兄きは方角も分らない處へ、何處からか急に産れて出たやうに、茫乎して、しばらく立つて居たさうだがね。黙りで、こんがらかつて、よろけた奴が二人來たから、高作徒輩ぢやあ、大變だと思つて、すたく急いで歸つて來たつさ。

内は時計なしの、がらんとして、それから此方、夜だか晝だか分りやしない。揃つてお飯を食べたことも無いんだもの。

祖母さんがね、小父さん。

迎も一人ぢや遣り切れない。亡なつた母さんに相談をして來るんだと言つて、前掛だけ、新しいのをしめかへて、僕たち兄弟を連れて、お墓へ、參詣をしたんだよ。

墓はね、土堤が低くなつて、川とすれ／＼な野中にあるの。其處で祖母さんが僕たちに言つたんだ。

(此の川について、小一里ばかり、津の方へ行く裏街道で、少し路から入つた處に、無憂寺つて、摩耶夫人様のお寺がある。此のお寺だぜ、小父さん。

母上が信心で、お産に怪我のないやうに、お前たち二人の時にも、月々缺かさず。お禮まるり

には、父上、私たち一緒に瓢箪を提げて行つたこともある。津田屋の先の女房も、矢張摩耶夫人様が信心で、今のお嬢さんがお腹の時、一緒の日傘で、田圃道で、道伴になつた縁もある。忘れさらう、次郎助は飛んで歩いて、お寺の庭の、菖蒲の池へ倒に落つちて、危く死なうとした。淺黄のつけ紐が岸の躑躅にからまつて助かつた。……他ならぬ几帳様、二人して行つて、よく父上のことをお願い申してくれ。

一緒に行きたいが、此頃の父上、長く一人で置くのは憂慮だから。ソツて、それから、梅干の苜を入れた、祖母さんが手拵への海苔巻をね、お墓へ一つそなへたあとを、僕が懐中へ捻込んで。——と言ふ……

恚りしほどに兄弟は……

投松明

三十六

「祖母さんが、お墓の松に小さくなつて、それに別れて僕たちは、合歡の樹の澤山ある、暗い川邊を通つたんだ。」と次郎助が語り次いだ。

「それから、山吹の葉の落ち切らない、田舎屋の背戸を通つたり、菖蒲の返り花が一つ咲いた、土橋を渡つたり、つい此間の事なんだがね。お寺へ來ると、まだ蝶々が此處等を飛んで居たつけ、矢張良いお天氣の日だね。」

御殿の階へあがるやうな心持だつて、兄貴は言つたよ。三段ばかりだけれど、遠く土を離れた工合に高かつた。」

次郎助が本堂を左に見返るにつれて、六部も胸を伸ばしながら、靜に其方を見遣つたのである。

「彼處を入つて、それから、眞蒼な夏木立の几帳の中に、明いやうな摩耶様の姿を拜むで、二人で竊と顔を見たの、何だか活きて居て母様を見るやうだつけ。」

兄貴は何か思ひ出して、悄乎として居たけれども、僕は大好きな海苔巻があるからね。

何んだつて愚圖々々言や、鐵砲でズドンなんだ。構はず大胡坐搔き込んで、むしろ〜〜〜食べて居たんだ。

其内に姉さんの事なんか、兄貴が、一生懸命に話してね、そして鬱ぐから、僕も鬱いで、極りが悪くつて、鯨をよして、指を嚙んだの。爾時ね、兄貴が言ふにや、(もう一つ姉さんが言つてくれた通り、津田屋の妹に頼みたいけれど、さきがお嬢さんだから、何うして、何處で逢つて可い

か。二三度、津田屋の前あたりまで、出かけて行つて見たけれど、何だか、城があつて、櫓があつて、外濠があるやうで、何うする事も出来はしない。其癖、一度なんぞ、帳場に坐つて居て、莞爾して、奥へ駈込むのを見なければ、なんたつてね。

目を塞いで溜息をするから、僕も黙つて目を塞いで、其處等眞暗になつたんだ。

明く、鳥影がさしたやうだから、ふつと、恚う顔を上げる時、兄きがね、見まい聞まいの、猿は居ないけれど、いろ／＼ある額の中から見つけ出して、

(おい、次郎。)と言ふから、見るとね小父さん。縮緬の押繪で、桐の葉の大きなのと、珠數なりに紫の花を綺麗に造つた繪馬があつた、生れた年月、六日と日を入れて誕生日を書いてね、願主、津田よね。」としてあるの。傍へ行つて見るとね、あゝいふ處にあるんだから、どれにもこれにも人の氣が籠るのか、皆活きて居るやうな繪馬の中にも、それは、眞物の桐の薫がしたよ。

兄きは近頃ない嬉しさうな顔をして、それから方丈へ行つて、障子の外へ手をついて、住職に、(あの、津田屋から、誰ぞ摩耶夫人様にお詣をする方がございますか。)つて聞くと、お爺さんの坊様が、

(あゝ、見られます。お米様といふ嬢さんが、時々。また誕生日には、毎歲缺かさず拜みにござる。然れば今日は其の日ぢや。)

と、指を折つて、急に待ちかまへた顔をしたつけ。

や、兄きが勇むまいことか。(次郎来い！途中まで出迎へて逢はう。)と言つて、手を引いて駈出したんだ。

一筋路を山田の方へ、無憂寺十五町、と書いて芒の中に立つて居る、石碑の蔭へ二人で入つて、日脚を見て待つて居ると、日當りが、はづれた頃、向うの橋を渡つて、二人連で、少し急いで、來たのが其れなの。大分遅かつたものね。

僕は錦繪が歩行いて來るかと思つた。裾だの、袂だの、枯草へ、ちら／＼花が咲いて、すつと僕たちの前を通つたけれど、兄きは、聲も掛けなければ、出もしない、僕の口を壓へるぢやないか。

行過ぎて了つたらうぢやないか。段々遠くなるぢやないか。えゝ、小父さん。其の時分に、漸々路へ出たつて爲やうがないぢやないか。そして、脊伸びをして、椿の花を取つちや川へ流したつて何になるものか。

僕にも手つたへ、大きな花束にして、而して、流さう。此の何んにも無い枯野の水へ、火の燃えるやうな花が、路傍を流れたら、屹と目をつけて足を留めよう。其處へ行つて頼むつて言ふから、まだるつこいと思つたけれど、兄きの言ふことだから、手傳

つて、燃え上るやうにして水ん中へ放したんだ。
松明のやうに枯草へ映るほど、ちら／＼と流れたからね、むかうぢや遠くから立停つて、眺めて待つて居たよ。」

三十七

「おまけに、圓鬚に結つた、其のお供の方が、涼傘の柄で、花束をうまく水から掬つて、桃太郎の昔噺だ……小父さん。」

花で飾つた赤坊を抱いたやうに、嬢さんが手に握るぢやないか。それだのに／＼、兄きはまだ遠慮をして、遠く此方で見て居るから、じれつたいつぢやないからね。」

耐へぬ次郎助！……

「僕は此の空氣銃をもつて飛出して、二人を向うへ駆け抜けると、榛の樹にちゆつちゆ、ちゆつちゆ、雀が囀つて居たからね。(おい、一羽打落して見せようか、姉さん。)と、突然だしぬけに然う言つて遣つた。)……」

彼が其の目を圓らかにして、お米の顔を斜めに見上げた事はいふまでもない——

お杉といふ年増の女中は、驚いた顔をしたが、お米は爪紅の透通る、花を捧げた美しい濡手を胸に、薄紫の涼傘の、高島田に觸る、ばかり、慎ましやかに、物優しく、

(坊ちゃんも雀を打つて召食のの。)

(否、食ふんぢやない。)

(それでは堪忍しておやんなさいまし。私は、これから摩耶夫人様へおまゐりをするんですから、ね、後生ですから、)

(何、其方で欲くなきや打たないんだ。兄さんは、姉さんに其の花束を上げたから僕は雀を打つて遣らうと思つてよ。)

(此の花を、兄さん！ 貴下の兄さんが、)

と思はず振返ると其の背後に近づいて居た兼次と顔を合せた。椿の花の紅は、二人の中に燃えたのである——

「僕は、屹と、頼むことを背いてくれる人だと思つた。」

だば鯊を釣つて居ても、殺生といへば見たがるのに、雀を打つて遣らうと言ふのを、留めたもの。そして堪忍して下さいつて、雀のかはりにあやまるんだもの。まるで雀の神様のやうだから、

僕は最う雀だけは打つまいと思ふんだ。

兄きがね、帽子を脱いで、引んまるめながら、一心に頼んだよ。

よく聞いて居てね。

花束を一寸戴いて、女中に渡して、涼傘を疊んでね。

(然ういふ内にも庄九郎が溶かして了ひますと取返しがつきません。あとのことはあとのこと、兎も角も庄九郎の手から取つて貴下の方へ差上げませう。

お前行つて、かはりにおまわりをして来ておくれ。)と女中に話して、

(依様のお兄様と、お前とは、腹のなかで、お寺へ行く野の途中、御一緒に成つたことがあると、私の母さんもおつしやつた。丁ど此の邊であらうも知れぬ。)とお嬢さんは、頻に其處等胸したつ

け。

僕たちも、何だか夢を見るやうだつた。

(其のお方の御心配、今日は此處で失禮して、すぐに香合を借りに参ります、とお前、摩耶夫人様に申上げて、しるしに、其の花束を納めて来ておくれ。)と一寸目を瞑つて其方を拜んで、

(さあ、御一緒に。)と深切に言つてくれると、兄きがねえ。

(それではお言にあまえてお願ひ申しますが、お寺へは女中さんと一緒に私が代参に参りませう。

次郎、お嬢さんのおともをして行け、お預り申したら、大切の品だ。氣をつけて。)といふから、鐵砲を肩へかけて、僕は両手で握つて歸るつもりにした。

兄きは其處で、其の女中と行つた。僕はお嬢さんと、町の方へ引返したんだ。道々ね、何が好きだの、何のつて種々兄きの事を聞いたよ。

お嬢さんが、金銀びかゝの、庄九郎の店の硝子窓を覗いた時の騒ぎつたら。

家中總立ちだ。

庄九郎なんざ、がらりと開けて中戸から飛出しましたぜ。

僕はね、ちよろりと向う横町へ隠れて居たんだ。

而してね、店の蒲團の上へ、お嬢さんが坐つた姿を、遠くから硝子越しに透かして見た時は、何だか、内の姉さんが、他家へお客に行つてるやうだつた。

小父さん、眞個に良い人だぜ。」

三十八

「ぞろ／＼送つて出やあがつたから、僕は最う些と隠れて居て、姉さんが一人になつてから、ひよいと飛出して前へ廻つて、お辭儀をしたんだ。

吃驚したやうに莞爾して、(待つたでせうねえ、思つたよりむづかしかつたの、姉さん、喧嘩するやうにして預つて来たんです。

「さあ、兎も角もお持ちなさい。」と袱紗に包むだま、渡してくれた。僕は引抱へたが、つツしりと重かつた。

(遊びに入らつしやいよ、屹とですよ。

兄さん……兄さんに……) 自分の兄さんにまたよく頼むと言ふのか、僕の兄きに宜しくといふのか、そんな事はかまはない。疾く父上に見せようと思つて、すつ飛んで歸つたんだ。

其の晩、父上はね、小父さん。

兄きと僕とを、二人並べて坐らせて、丁と膝に手を置いて、

(よくしてくれた、おれの兒だ。いや、小兒に禮を言ふではない。こんな奴を産むでくれた、阿母に禮をいふのだ。) つて、喜んでほろりとしたの。急に元氣が出て、其の晩のうちに、扇屋の姉さんの誂へた、矢の簪が出来上る騒ぎだつた。

内へ持つて来て見たばかりで、そんなに嬉しがつた、千鳥の、其の、香合がね、それぢや壊されないで済むかつたら、然うは行かないぢやないか、小父さん。

「いかにも、な。」

「翌日の午過にや、もう、庄九郎の處から、使のものが取りに来るんだ。兄きがね、(父上が型を取つて置きたいと言ひますから、もうしばらく、晩ほどは此方から持て上ります、) つて歸したがね、い、加減なことを言つて、津田屋のお嬢さんの、とりなしを心待に待つたんださうなの。

むかうでもね、打棄つちや置かないんです。

暮あひに、昨日の、丸鬚に結つた女中が来てね、門口で何か兄きに、ひそく言つて歸つたつ。高作の方が、旨くゆかないんだつて。何、大事の妹だから、そんなに叱られはしないんだと言ふだけけれども、千鳥を溶かして黄金鎖にする事は、どうしても止めようと言はないさ。

夜があける、すぐに又取りに来る、其の日はね、午頃また女中が来て、兄きに逢つて歸つたつ。晩方に最う一度来て、今度は兄きを呼び出して、路地を抜けた田圃の處へ連れて行つた。月夜でね、小父さん、——其時はお嬢さんが来て居たんだ、頭巾を破つてよ。

否、僕は逢やしないけれども、兄きが土産をこつかつて来てくれたの。

そんなものは要らないんだ。(香合の話は、) つて聞くとね、矢張、(不可い。) ……

おなじくらゐな黄金を買つて取りかへたらば、と言つてくれたさうだけれど、金子にして千圓上だと言ふので、お嬢さんも弱つたと言つて鬱いだつて。

其の夜よ。庄九郎の奴が、自分で、怒鳴り込みやあがつて、すつた、もんだ、汝、居候の弟子の癖に、父上を泣かせて祖母さんに手をつかせて、畜生、僕は幾度刀を引つこ抜いて、た、つ斬つてくれようと思つたか知れやしない。

(あすの朝まで待つて遣らう、抱くとも嘗るともしやあがれ、あとはおいらが、自由にする。)

と疊を蹴飛ばして歸りやがつた。
畜生め、面倒だ!

兄きや、婦人の手ぢや不可いや。薄鼻毛抜いて遣ろ、態あ見やがれ。其の晩は寝ないで置いて、冷飯で握飯を拵へてよ、丁と支度をして、學校へ行くふりをして、縁の下に突込んだいた過日遠足をした時の、草鞋まで持つて出た。嵩ばるから箱は置いて、黄金の千鳥の香合だけ、引摺つて懐中へ入れて出てね。

此のさきの石碑のよ、椿の花を流した處で、下駄ア脱いで突放した。なあ、小父さん、と顔を見て……

「盗坊だ。僕は盗坊を遣つたんだから、家へは最う歸られないや。何處かへ、すつ飛んで行くんだけれど、大事なものを、また無くしちゃ不可いから、しつかり摩耶夫人様に預けたんだよ、小父さん。」

三十九

「だつて口惜いもの。千鳥は母さんの名だし、父上さんが、然うやつて、一生懸命に拵へたものを打壊されるのは癪だからね。――扇屋の姉さんだつて、津田屋のお嬢さんだつて、命がけで心配してくれるんだ。僕が盗坊になるんなら、何でもありやしない。

よくね、わけを言つて、預つておくんないさITTたらね、摩耶夫人様、莞爾したの。あの、右の手がふつと動いたから、大丈夫だね、小父さん。小父さんに見つかつて大變だと思つたら、小父さんも、影法師のやうなもので、居るんだか居ないんだか知れないんだつて言ふから安心だ。黙つてておくれよ。然ういふわけなんだから、頼むぜ、小父さん。」

六部は深く物思ふ面色しつ、つ、
「……」ものをも不言、ものをも不言領くなりけり。

次郎助はついと立つて、尾花の中に包まれた、西日の色を、行方遙に打見遣つて、
「や、過日津田屋のお嬢さんと家の方へ歸つた時分だ。」

と不圖呟いたが、思はず、
「あ、祖母さんが待つて居やしないか知ら、」

と我を忘れた風情で言つた。

何とかしけむ、肩ふるはして六部は眼をしぼたき、

「いや、よく分つたが、これ、」

と草鞋を擦らし、向き直つて、

「嘘、祖母さんが待つちやらうな。」

「世話ばかり焼かすからね。僕なんざ、居ない方が可いくらるものだ。

でもね、さしこみが持病だからね。其時は兄きより僕の方がおさへるのが上手なんだ。薬も何

だ、僕がよく知つてて駈け出すんだがね、兄きは尻が重いから、

と言つて額を擦つて、

「また何だ。可いや、僕が居なけりや何うかすら。小父さん、何だぜ。これから路は遠くつても

家へ歸るんだと思ふと急ぐけれど、然うでないんだから張合がありやしないや。暗くなつても内

へ入るんなら可いけれど、餘處ぢや何だか分らなからうなあ。やあ、寒くなつて來やあがつた。」

と色氣なしに肩を揺つた、袴をまれた脚の状も見るからに覺束ない。

「餘處つて、何か、旅籠屋か。」

「小父さん、」

と氣もない顔をして、

「旅籠屋ぢや錢が要ら。」

「旅籠屋で錢が要れば、要らぬ處は何處にあるな。」

「山の中の辻堂か、お宮様よ、何處にでも、たゞで寝らあな。」

「御飯は何うするよ。」

「あの、本堂へ残して置いた、四ツ拵へて來た握飯が未だ二箇残つて居るんだ、」

「翌朝は、」

「何處かで貰はあ、」

「乞食だな。」

「構はないよ。」

「はて、」

「盜坊をしたくらぢやないか。最う人間の夥間ぢやない。なあ、小父さん。矢張、僕も、小父

さんの其のすつ飛んだ鐵砲玉になつちやつたんだ。變てこな鐵砲玉だ、口利く鐵砲玉だ、は、

と投げ出した苦笑で、

「同じ鐵砲玉だから、一緒に連れて行つて貰ひたいけれど、山田の方へ行くんぢや駄目だ。僕は最家の方へは行けないから、」

「待て、己も先づ安心した。辻堂や宮で寝て、食ふものは盗むとでも言ひはせんかと、冷汗を流したに。どうせ人間の影間ぢやない、乞食をするは嬉しいな、」

と手甲かけた掌を上げて、頂く如く賞歎し、會心の笑、莞爾やかに、

「が、待てよ。家の方へ歸らないは分つたが、家の方から追つかけて來たらば何うする。いや、それも親御や、兄妹でない、それ巡査がよ、警察からぢや。」

「遁げらい。」

「遁げる、は、は、遁がすものか。」

「然うすりや捕まつ了はあ。」

「掴つて、」

「懲役に行く分だ。何も僕は遁げかくれなんぞするんぢやない、すたく歩行くんだから勝手に掴へるが可いんだぜ。」

拳で尾花を拂つたのである。

四十

「潔矣。」

「いや、天晴覺悟ぢや、が、お前さんがつかまれば、其の肝心な純金の香合も、またそれなりに取返されよう。」

「そりや小父さん大丈夫だ。ちやんと摩耶夫人様に預けてあるもの。」

「しかし、しかしおかみでは唯措かぬぞ、厳しく詮議をしようではないか。」

「言ふものか、どんな事をしたつて僕が、それを、言ふものか。」

と決然として繰返していつた、「言ふものか！」

六部は更めて合點して、

「いふな。己がそれ、鐵砲弾で、お前さんが言はんなれば、他に知つたものは誰もない。また此の秘した處がよ。警察總がかりで捜した處で、五年や十年で知れるわけのものではない。

就いてぢや、いくらほど路銀がある。」

「路銀、お錢か、小父さん、」

「第一番の事よ。」

「お錢は扇屋の姉さんに、いつか貰つた、二十錢銀貨が一つあつたけれど、他に何にもないからね、先刻お賽錢に上げ了つた。」

「うむ、然うだ、其の扇屋の姉さんと言ふのは、それから何うしたな。」

「簪が出来たのをね、祖母さんが届けに行つて遣つたらね。病氣で寝て居たが、其の扇屋の別荘の方が静で可いから出養生に遣つたつて。幾らも次手があるから届ける、と言ふから、ことづけて歸つて来てね、其のうち見舞に行くといふんだけれど、こんな騒ぎだから、それなりなんだよ。」

「あゝ、氣の毒だな、煩つたか。」

と六部は太く動かされた色見えて、

「氣疾ぢや。鐵砲弾にならなければ可い。自分の思つてる男に頼まれた事が届かんで、おまけに今の話ぢや、お前の兄さんの居る前で、其の高作といふ奴に、抱き倒されるなどといふ、チョツ、可哀相に、」

と舌打した。

「一番、己が世話焼いて、此の葛籠の中へお前を入れてよ、まづ、譬ぢや。是なりに千鳥と一緒に神隠しもおもしろからうが、第一其の扇屋のから縛られるぞ。」

兄御も親御も免れはせん。疑がか、つては、面倒で、なか／＼霽れまい。

こりや、坊よ。

すつ飛ぶべき處でない。すぐに歸つて、名告つて出る。

これ、分つたか、親兄がたゞでは濟まん。其の高作とか言ふのばかりなら、妹さんがござるに因つて、何とか方が附かうけれど、庄九郎といふ野郎め、まうけづくぢやから見遁すまい。な、唯品物が紛失した、預りものが失くなつたでは、しかも大枚大金目ぢや、申譯が立ちはせんわ。

名告つて出る、引返して名告つて出る、また、盗坊をしたものが、遁れおほせるわけではない。其處はお前さんも覺悟がある、分つて居るのぢや。

これから直ぐによ、よしか。

途中で巡禮の六部に逢つて、教へられたなどと言ふまいぞ、何處までも一料簡よ。確りしろ、分つたか。」

親兄が縛られる、と一言聞くや、顔の色を颯と變へて、足許から突上げるやう、目も身體も大ゆりに揺つて居た次郎助は聲も上づり、

「大變だ。警察といふだけだつて大嫌ひな父上だ。巡查が來ちや死んじまはあ、小父さん、分つた、む、分つた。」

「どんなことをされたつて自分からは言はんから、聞く隙に伊勢中搜せ。あけ方に盗んだものぢや、一日に百里は飛ばれん。小兒の足で歩行かれる。ぐるりとまはつた環の中にあるぢやらう、と天狗に教はつたやうな事を吐す、小僧々々、」

と怒鳴つて、

「何しろ、汝一人の料簡で無いことだけは確かだな、屹と人智慧をした奴があらう、うむ、小僧。」

「親仁か、兄哥か、それだけでも言へ。些とは樂をさせて遣る。これなり強情を張りやがると、緊め上げて血反吐をはかすぞ、何うだ、小僧、何うだ。」

と水だらけの肩を揺ると、揺られたま、頭を掉つた。が、餘りの苦しさに聲も出さず。我家の店の格子さを、黒山に蔽ひ包むた、人立を、空氣銃で攪廻して、泥足で躍り込み、平兵衛の腕を捉へた、此の刑事を突き放して、盗つたく、盗つたく、御用を反對に繩にかゝり、引立てられた横町の曲角で、人目も厭はず足袋跳で絶つて出た、津田屋のお米が、心弱く、顔に袖を當てたのを、見返りながら、何うだ、といつて煙草屋の店看板、學校の行きかへり、遊びの出入り、母親の懐中から伸上つた、朝晩馴染の金時に、ぐつと突出して見せた腕節も、繩目に腫れて意氣地はない。

突立つたのが一段と荒らかに、

「頭を掉るな、頭を掉るな、頭を掉るな。まだ、此の業坊。き、き様、握飯、握飯を持つて出をつたといふが、誰がこさへた、うむ、祖母か、祖母かよ。」

應とでもいつて見る。直ぐにぴしりとお手當で、祖母を連累のつもりであらう。

次郎助はかすれた聲で、

「獨りで、獨りで拵へたんだい。」

と口惜しさうに呻いていふ。

「馬鹿を吐せ！ 汝、何一人で出来るものか。」

次郎助は倒れながら、痛さと寒さと、切なさに、眉も口も、一緒に糸でかぶりつけたやうな澁面を、物凄き世の終の如き、陰々とした燈に打仰向き、

「お前達ア、お前達ア母上があるのか、小父さん、母上を持つてるかい。」

「何だと、」

「何を。」

「持つてりや可いな、持つてりや可いな。母上が亡つて見い、祖母、祖母さんがさしこみの時なんか、僕がお飯だつて炊くんだい、お、握飯ぐらゐる出来なくつて、出来なくつてよ、」

と聲が消えて、がつくり板敷へ俯伏した。
上からじろりと是を視め、

「餓鬼め、餘程草臥れたらしい。」

「最う一呼吸だ、此處を突込め、」

「こら！ 何處だと思ふ、寝ちや成らん。」

と立蹴にハタと蹴ると、向うへ轉んで、あつと言つた、悲鳴も終らず、絲のやうな聲を絞つて、
是は何麼、媚しい婦人の姿。狭い中にも暗い灯、明の届かぬ片隅に、長襦袢の裾を長く、崩る、
脛を包まうと、羽目にこらへた、島田が亂れ、うむと反つた弓形の、乳のふくらかな胸を絞つて、
床に亂れた緋の扱帯。

刑事二人驚いて、

「や、別嬪が目を廻した。」

「何うしたんだ、何うしたんだ。」

まぼろし

「はい、お扇も、飛んだ災難でござんしてね。」

否、此間から、つけが悪いでございますよ。些とね、鹽梅が悪くつて二三日寝たもんですか
ら、こんな處では、まあ、貴女お上んなさいまし、」

染めた齒の美しく、愛想の可い、扇屋の女房は、胸より高き火鉢の前、粹な半纏のうしろに巻
いた、扇ちらしの暖簾を透く、中庭に花はないが、青々とした眉の痕、色の白いくつきりと水
際の立つた婦人である。

門から通庭の横帳場。京間の十疊から一段低い、磨き上げた楓の框に、斜めにお太鼓の腰をか
けて、空色縮緬の背負上げ、ふつくりした圓鬘の、品の可い中年増は、津田屋の女中頭お杉であ
つた。

「さあ、まあ、此方へ貴女、」

それと流眊をのみ込んで、小さな手で先刻から女房の肩を叩いて居たが、客が來たので傍に差
控へた、禿の千代が心得て火鉢の向うへ、すつと直して、

「何うぞ、お敷き遊ばして、」と針線を鳴らすに似た、芝居の子役の聲を放つ。

「あゝ、何うぞ最う、」

と慇懃に、膝で身を廻して上へ上ると、女房が膝を落した緋の胴拔、傍に針箱などあるのを見

て、

「お仕事でいらつしやいますか。」

「否、六十の手習でございます。」

と白やかな腕を肩へ、物指で軽く背のあたりを叩いて見せ、

「朝からこんなぢや仕方がござんせん。」

「結構でございます。」

と先づ挨拶する。

「だもんですからね、

と舊へ返つて、

「こんな處ぢや、あの妓が、おちく／＼寐る事も出来まいと思ひましてね、寮と言ふでもないんですが、些と離れた處がございますもんですから、閑静な方がよからうと、其處で、お扇を出したのでございます。」

もう、私も薄氣味が悪うござんすから、豫々番のものに斷つて置くんですけれど、否、初中終なんださうで。ついね、あなた、町家離れた處で、さしかまひが無いもんですから、御近處の方が可い寄場にして、賭博をなさいます。」

番のものも知つたお顔なり、然う阿漕にも言へないと見えまして、其の晩、宵から、十四五人、何だつたさうですよ。

つけられたと見えまして、あの通り、お手當があつたんでせう。

嵐に木の葉で、あなた、各自が、ばら／＼大騒ぎをして遁げようとなさる。お一人がね、慌て、何ですつて、逃げ場に困つて、奥の小座敷へ駈け込んで、お扇が寐て居ました夜具の中へ潜り込んで、緊乎抱付いたんでございますとさ。まあ……。」

と口許を蔽うて俯向き、

「お扇が吃驚して、あなた、厭ですよ、かなんかで、だらしない姿ですり抜けて出た處を、踏込んでおいでなすつたから耐りません。娼賣をしたと間違へられて、可哀相に、すぐに、ぞろぞろ拘かれたんでございますつて。」

何、一檢べで、わけが分りましたもんですから、何は措いて、つかひがみや何かさし入るものと思つて、駈けつけました。直ぐ其の車で、其の夜、明けない中に歸つては來ましたけれど、長襦袢一つで、多勢に見られたつて、恥かしがつて、また病いでございます。

矢張、淺黄のを着て居ましたんですがね、一體、あの色は恐ろしく、あの娘に肖合ひますけれど、性に合はないと見えまして、いつぞやも、親類の從兄の方がお見えなさいました晩も、無理

に亂暴なお客様に連れられて行つて、

と言ひかけて、思はず、口をつぐんだが、そらさず微笑み、

「誰方も御酒の上は然うですがね、當人が優しいんですから、些との事にもおびえるんですもの、酷い目に逢つて歸つて來ますし、……また今度でせう。」

三度目がないやうに、と思つて、寢衣にね、此の燃えるやうなのを、私の少い時のを、薄綿を
入れて着せて遣りませうと思つて。」

四十三

「さ、居ますとも。最う寮の方は厭だと言つて、警察から直ぐに此方へ戻りましたの。泣いて
ばかり居ましたがね、寂しい、心細いつて、甘えますから、昨夜は一晚、私が母様になつて、
抱いて寢て遣りました。」

夜中、何か話をして居て、あけ方ね、やうく笑顔を見せて、それなりすやく寐ましたがね、
朝起な妓なんですが、碌に此の中眠りませんから、まだ就寢で居ますかも知れません。

何の、貴女、すんくいらつしやつても構ひませんが、お化粧が何うの、髪が何うのと、まぢ
やうめんな人ですから、一寸然う申して遣りませう。千代や、」

「はい、」と直傍で、高調子。

「一寸、姉さんの許へ行つておいで。否、もう目が覺めて居るにや覺めて居ますよ。お客様たつ
て、……津田屋様の女中さん……」

と言の中に、横手の段階子を鍵の手に、ちよろくと千代は駈上る。

「お杉さんでいらつしやいましたね。お杉さんだよ。」

追駈けて女房艶麗に指揮する。

「はい、」と引張る。

旅館津田屋の女中頭が、

「杉ではお分りになりませんが、お嬢さんからお使とおつしやつて下さいまし。」

早や階子段には返事がなかつた。

女房が心得て、

「可うございますよ、分りますとも、毎度御最眞に難有う存じます。」

「此方こそ、お女房さん、お互様でございます。」

「また、唯今は、結構なお土産を、お扇が嘸喜びますでございませう。」

と女結びにしをらしく、水引をかけたのを、床しさうに一寸戴き、茶棚の上にし置いた上包

を、仄かに透くは眞綿なるべし、薄紅。

「お嬢様は、御機嫌でいらつしやいますか。」

「唯、否、別にお身體は、何ういふこともおあんなさいませんが、此頃なんでございませうか、眞に心配事がお出来なさいまして、矢張り、碌々お寝りませんのでございませう。それで心がお弱りなすつたんでございませう。今朝ほど、あなた、お佛壇へ、御自分で御明をお上げなさいまして、拜むでいらつしやいましたのは、私が存じて居りますんでございませう。」

しばらくして、お廊下を通りかゝりに見ますとね、傍にございました針箱に袖をかけて、窮屈さうに轉寐をなすつていらつしやるやうですから、お搔卷を、と思つて密と入りますと、

(お杉かい)とおつしやいましたね。
其處いら御覽なさりながら、

(誰方か、お客様が、今其處をお通りなさりはしなかつたかい、美しいお女中の。)
(否、誰方も)と申しますとね。

(あら、彼處へ去らつしやるぢやないか。)

と、ふらふらと立つて、廊下を駆け出して、戶外の方へおいでなさいましたんでございませうよ。其處へ何んでございませう、からゝと車をつけて、若旦那の高作様が、可い御酒機嫌でお歸

りでございましてたんでせう。

お縁側から、怒う佛間を斜つかひにお通りなすつて、廊下の外の方へね、お下召なんでせう、ちらゝ浅黄が見えましたつて。」

「へい、」といつて女房は、つぎさした急須の手を忘れて聞いた。

「確に、扇屋さんの、お扇さんだつた、と仰有るのは、豫て寫眞なども見て御存じですし、それに、何んでございませう。丁どお扇さんが其の飛んだ濡衣をお着なさいました晩、些と様子がございましてね、御心配と申しますのも詰り其の事なんです、あのお役所のまはりを、貴女、うろうろしていらつして、霜のやうな月あかりに、此方のお扇さんが、車に召して無事にお歸んなさる處を、お見受け申した、と言つて、着ていらつしたものの色合なんぞ、よくお覺えなすつていらつしたもんでせうから、大方、それがちらゝしたんでございませうが。」

お佛壇の前ですし……。

(屹と、あの今度の心配事を、お扇さんに相談するやうにと言ふおしらせかも知れないから、私直ぐに行きたいけれど、兄さんがお歸りだから、此處でもつかまへなけりや、また何時お歸りだか分からないから、兎も角も)直ぐに、私に、伺つて來いと言ふ、おつしやりつけでございませう。

「原はと申しますと、其の若旦那のお心一つで、何うにも納つたんでございますけれど、お嬢さんが、あなた、何んなにかねえ、それは、お可哀相なやうにお継りなさいましたか知れませんが、れど、どうしてもお背きなならないもんですから、はい、お扇さんは無事にお歸りなさいましたけれど、お嬢さんが然うやつて、夜通し氣をお揉みなさいました方のお兒は……」

「……ですつてねえ。」

と女房は頷いて口を入れた。

お杉は、思はず膝を動かし、

「あなたも御存じで、」

「知つて居りますとも。大した金目のものだと言つて、大層な評判でございますもの。お扇は身内の事ではあり、知らないことはないんでせうが、何んにも申しませんから、私もね、機を見て居るんですがね、何ですつてね、到頭送られたんですつてね。」

「え、まあ、どうしませう。眞個に手後れになつたんですよ。若旦那さへ納得して下されば、何うにかなつたんでござんせうのに、何しろ滅多に内へはお歸んならないほどですから、仕や

うがないのでございますよ。

おかみさん、

不圖心づいた状で、

「それでは、お扇さんに申して可いか、何うか、分りませんねえ。」

「否、」

「でも貴女さへ控へていらつしやるほどですもの、御身體に障りませう。然ういたしましたら、唯お見舞だけにしても宜しいのでございます。」

「否、親は泣寄りです。お扇も考へがありませうが、義理を立つて私へは遠慮をしますから、ちやうど可うございます。お嬢さんから御相談なすつて下さると、私も筋道がつかますから、及ばずながら、また何うにかお暇間にして頂きます、まあ、兎も角もお逢ひなすつて下さいまし。」

然ういへば、何うしたらう、千代や、

と言ひかけて、火鉢の縁に凭れかゝつて、打仰いで覗くやうにすると、着ものの端。話に氣を取られて心付かなかつた、廣い階子の眞上の段に、千代は搦みついたやうになつて、熱として居るのである。

女房は吃驚して、

「千代や、千代や、」と調子を上げた。

「はい、」

と言ふと向直つて、一段づつ傳ふが如く、片足伸ばしに落着いて、平氣な顔で下りて来る。

「どうしたんだね、」

「あの……」

「姉さんは、」

「え、あの……、」と目を瞠つて、裾へ棒をつけた形也。

「行つて来たのかい。」

「否、」

「あら、此人は、」

お杉も振向いて不審な顔。

禿の千代は唾を飲んで、

「あの、もう起きていらつしやいます。」

「何うしてさ。」

「私、然う言はうと思つて、二階へ上りますと、あの、すつと向うの奥の方の、廊下の曲角の處

に立つていらつしやるんですもの。」

「お扇がね、」

「え、松吉姉さんのお部屋の前の許に、此方に向いて、そして、あの、此方へ歩行いていらつしやりさうなんですもの。」

「ぢや、誰だか、」

と女房は氣もなくいふ。

「然うですよ、違ひませんわ。」

ちよこんと膝を支いて、呼吸をして、

「いつもの淺黄の、あの、長襦袢で、暗い處に、」

「え、」

と言ふと、お杉は思はず天井を仰いだのである。

女房も、齊く二階を高く、暗いのがうつたか、陰氣な顔して、火鉢に手を支き、がらんとした店の格子さき、違つた浮世を歩行くやうな、戸外の人通を急に熟と透かしながら、

「それで、黙つて見て居たの。こんな商賣の階子段にや立留まるものではないと言ふのに、厭な兒だよ、悪いお前の癖なんだよ。」

とばかりで、言葉が途切れて、寂とする。襖がすれても響きさうなに、二階をかけて、何處にも何んの氣勢もなかつた。

お杉が、

「廣いお住居でございますねえ。」

と要らぬことを思はずいふと、

「先刻から誰も來はしませんでしたか。」

女房が行違ひに問ふのであつた。

「魚屋さんが一人、すつと奥へ通りましたよ。」

「あゝ、然うですか、もうそんな時分、」

と言ひかけて、今見つけたやうに慌しく、

「千代、見て來ないのかねえ、お客さまが待つていらつしやるぢやないか。」

「ようございますよ。」

「さあ、何をして居るんだね。」

「あら〜、」

暖簾から中庭越しに透かした千代が、

「裏階子から降りて入らしつてよ。」

「何處へ、」

と振返ると、何んにも見えぬ。

「嘘だよ、誰も來やしないぢやないか。」

禿も妙な顔をした。

「だつて、今淺黄の袴が、ちら〜して見えたんですもの、廁でせうか知ら。」

「何をいふのだね。」

「私も些とも見かけませんよ。」

とお杉は頻に四邊を朣す。

「此の兒は、近視眼なんですよ。」

解き得たり、とはじめて笑つて、

「近視眼の癖に遠見をするんです。さあ、行つておいで、疾く、」

「だつて、」

と疊に指で〇〇をする。

「恐いんですもの、私、」

「何が恐いのさ?」

「私、私、いつかもお扇姉さんが彼處に立つていらつしやるのを見たんですもの。」

「當前さね、お前、一つ内に居るんだもの、何處にだつて立つて居るのを見ようぢやないか。疾く、さあ、」

禿は漸々納得して、むす／＼しつ／＼、立ち立ったが、此方を盗むやうに見い／＼、何を忍ぶか、拔足で、そろ／＼と段の下。行つたと思ふと、莞爾して、

「そら御覽なさいまし、姉さんが入らつしたではありませんか。」

「何處へ、」

「一寸、お佛壇の前へ、」

「え、」

「あら、暖簾の下に立つてよ、横向きに、あれ、女房さんを熟と見て、」

二人は頭から慄然とした。

「あれ、莞爾してさ、人の悪い、お扇姉さん!」

と金切聲でばた／＼と駈け戻つて、引提へる勢で、確と暖簾につかまつたが、何にもないので、トボンとして、くる／＼と二つ廻る。二人はハツと身を開いた。

途端にトンと幽な音、裏階子の下、廁の前へ、女の姿が膝を支いたが、これは紫の矢絣で、白粉の濃い若代である。

「あなた、」

こ言つてすつと立つた、女房の聲はかはつて居た。

「さあ、御一緒に、」

半纏をはらり脱ぐと、すり落ちる引つけの繻子の帯を、うしろ手に引上げながら、

「千代、松ちゃんにすぐ来ておくれと、いつとくれ。」

言ひすて、暖簾から佛間を突切る、裾はら／＼、足も空でお杉が續いた。裏階子の下で、其の若代の、色の蒼ざめて震へて膝行るのを一目見たまゝ、つか／＼と走り上つた、上り口で一寸覗いた時、下なる若代は、手水鉢に身體で絶つて、仰向けに柄杓を被つて、ぐつと飲むと悲鳴を上げた。

「大變ですよ!」

既に遅矣。前に音信れたのはそれであらう、秋草の一枚襖が、左に開いて、懐しいお扇の姿は、

島田の根をつくりと、廊下へ半身背を見せて、うしろ向きになつて居た。香の煙の立迷ふ、柱にかけた姿見に、恍惚とした笑顔が寫つて、きらりと咽喉に矢の響、唯見ると、ぱつちりと目を開いた、と思つたのは氣の迷、結へた膝を柔かに、纏て女房に抱かれたのである。

「夢ですなあ。」

と倒れ込んだ、松吉の手に一通、それは主婦へあてたので、別にお杉の手に一通、お米様としたのがあつた。

東條判官

四十六

一通のふみを今讀み果てて、……地方裁判所豫審判事、東條六郎氏は、無言で、それを、座の傍に侍した令夫人松子の手に渡したのである。

「もとの通りに、」
と言靜に。

「はい。」

と夫人は心得て、優しくする／＼と巻き戻した。

細く美しき女文字の、此の書院のやうな大廣間、書齋と居間とを兼ねた一室に、新しく炭の薫る中を、唯絲遊の如くすら／＼と浮出でて、處々あはれに墨の染んだあとは、幻の蝶の立迷ふ状に、しばらく賢夫人と明判官の、袖に、袂に、縋るのであつた。

巻きながら、夫人は竊と主人の顔を伺ふと、常の如く沈着に、常の如く森嚴に、はた常の如く、こゝに其の日の新聞を視て餘念がない。

衣服は不斷に着換へたばかり。法廷を退けて此處に端坐して、恚く新聞紙を一讀するが例なのである。

巻き果てるのを直ぐに認めて、新聞を傍へ。片手を膝に、黙つて長く差出した右手の掌へ、夫人が其の一通を捧げたのを、座右の唐机の上に置いた、薄紅色の状袋に衝と通して、再びもとの机の上。

火桶に片手をかけた時、夫人は——熟と——ものいひたげな目で主人を見た。
冷靜な音調で、

「松、」

「はい。」

「小兒が欲しいな。」

「……」
餘り唐突であつたので、夫人は何んにも言はなかつた。

「あれば、苦勞だ。」

「お前は、讀むだけか。」

「うかゞひましてごさいます。そして直接にまた委しい話も聞きました。實に、可哀相でござい

ます。旦那様、

と何か言はうとするのを、遮つて、

「誰が来た、誰が此のふみを持つて来たかね。」

「旅館の娘でございます。」

「津田屋といふのか。」

「唯、然やうでございます。」

「差置いて歸つたか。」

「否。」

此の(否)に力を入れて、

「お歸りをお待ち申して居ります。お叱りを蒙りますか存じませんが、御免なさいまし、待たせて置きました。」

「と思はず頭を下げらるゝ。」

「此方へ、」

「……」

「呼ぶが可い。」

とばかりで、再び新聞を取り上げた。

人をも呼ばず、夫人みづから、急いで立つて、やがて襖を。

敷居際で猶豫ふのを、背後に夫人が附添つて、押進めて入るゝなりに、おのづから力が入つた

ので、おろ／＼しながらお米は、薄お納戸地に、白茶でこぼれ梅の小紋縮緬、對の下がさねに、

藤紫の半襟、黒縹子の紅の、もみぢを織つた縹珍の帯お太鼓に、紅入友染の背負上きり、とし

た、細腰をなよやかに、三指をちやんと支いて、座につくとともにひれ伏した。

恐怖と、羞恥と、悲哀と、はた唯一條の願ひの絲に、取継りてぞ打震へる、島田の丈長ひらひ

らと、鬢の緑の色深き頬のかゝりの白粉も、偏に身躰のやうでははれである。

判官は無造作に、

「さあ、すつと、」

「あなた、お進みなさいまし、」と言ひながら、二人の間を結ぶやうに、座を引緊めて、よき處へ。

「何か、貴女は親類か。」

と突然つかぬことを問はるゝのである。

直ぐには聲も出でざりし、お米のうつむいたまゝなのに、繰返してまた、
「依の親類か。」

「はい、咎人の姉でございます。」

お米は内端ながら正しくいつた、揺めく銀のうしろざしは、お扇の記念の結び雁金。

四十七

最愛きかな、あるがまゝに昇据ゑて、五十鈴川の水清き、神の縁の樹の間にも移し植ゑま欲し
き美しく氣高き花の、自ら、(咎人の姉)と名告るにこそ、心の裏の推量られて、豫め其の情を知
つた令夫人は、座の後に物澄んだ、縁なる鉢植の蘭の香の、そゞろに身に染む思がして、背いて
涙さしぐまるゝ。

其の一言、太く、判官の胸にも響いたらしい氣振であつたが、しばらくして、火桶を手許に引
繞らしつつ、

「幾歳か。」

「はい？」

と物怖しながら、誰の年か、問ひ返す風情して、纔に其顔を上げたが、襟可懐しき紫の照添ふ
雙の瞳の露は、清らかに且つ涼しく、人を動かすものであつた。

夫人傍より、

「誰の……なんぞでございます。」

と取次いで尋ねられた。

「其の、」

「貴女、幾歳におんななさいます。」

と夫人はしとやかに向き直つて、いざゞ、聲の低からば、取り次いで參らせむ。

「十九になります。」と又差俯向く。

「兼次は、」

「二十でございます。」

聞くと眼射を令夫人に、

「支干は？」

「……辰に……卯……ですか、然やうでございます。」

「年紀ごろも似合ひぢや。」

と幽に笑を含みたまひ、

「其は可し。何か、貴女、此の遺言状の通り、死體は其の願のやうに、叔母……といふ人の墓へ、一緒に葬るやうに計らつたかね。」

「あの……何より先へと存じまして、夢見て居りますやうな中を、其ればかりは、直ぐに」と、切々に言ふのであつた。

判官は言正しく、

「其ばかりぢや。何處へ行つても誰が何うしても、此の遺言の中に、叔母、其の千鳥といふもの墓に、一緒に埋めて、といふほかに、出来る事は一つもない。」

……だから、よく考へて、よく考へて、

と言はるゝ下に、お米は唯其の手を内へ支へかへたるばかり、身動きさへもしないのである。「最う焦ういふことを言うて來てはならんよ。」

それから、貴女が其の咎人の姉ならぢや、兼次といふのと同時に、平兵衛は親ぢや。

昨日も其の平兵衛が、自身にかへて、被告の少年が赦して欲しいというて、私が勝手口へ來て、どう諭しても立去らん。其内姿が見えなくなつたのを、歸つたと思つて居ると、夜中にまた書生が見かけた、裏門の地に手を支いて泣いて居るのぢや。

奥が見兼ねて、内へ連れて入つて、泥などを拭いて遣つて、車夫に申しつけて送らせたが、此と取逆上て居るかのやうに見受けられる。

如何にも不便ぢや、が、法は枉げられん。いたしやうがないではないか。

其のくらの事は分るぢやろ。よう心得て、其の兼次と一緒に、氣をつけてあげるが可い。ふら／＼歩行いてまた怪我なぞをさしてはなるまい。

歸つて心得ちがひのないやうにするのぢや。

遺言状は預り置く。」

いふだけの事をいひ果てて、頼の綱を切つて棄てた光景に、お米は耐らず激したか、兩手を支へた肩のあたり烈しく震へると、颯と血の上つた面を擡げて、

「旦那様……」

といふ一聲も、舌の強るを、令夫人がいひ添へて、

「貴下。」

「不可ん。」

と嚴として、夫人にいはれたを聞くと齊しく、お米ははつと泣き伏した。

「連れて行け、連れて行け。」

口早に、

「松、お前から、よういへ。」

殆ど命令的に言ひ切られたので、止むなく立上つた夫人さへ力なげな状であつた。お米は肩を抱かる、ばかり夫人の手に絶つたのである。

しるしの松

四十八

黄金の香合、千鳥の作人、無慙也、依平兵衛。

廣き額の皺深く、房やかな眉の顰んだ、顔の色尋常ならず、紋羽の襟巻胸に解けて、羽織も着

ず、跣足なる、風采も物狂はしく、生れて以來、一處に藝を凝視めて、据れる瞳の、何事ぞ、き

よろ／＼と、淺黄の色の果敢なく消えた、お扇の亡骸横はれる、土の色こそ新らしけれ、幾千代かけて契りけむ、千歳の苔の處々、塚の俤埋もれ果てぬ、千鳥の墓を、松を潜つて、うろ／＼幾めぐりするのである。

「慈母、慈母、申譯がない、どうするぞ、どうするぞい、次郎坊は縛られた、縛られた、慈母。」

何んで死んだぞ。何んで先へ死んでくれた。

主が居たら、息災で居たらばな、こんなことにはならんのだや。

どうにもならんわ、どうかしてくれんのかなう、慈母よ、次郎坊主は縛られた。

巡査がの、腰繩をつけたわい。牢に入つて居て懲役に行くといふわ、何のこつちやい、何のこ

つちや、何のこつちや。

申譯がない、あ、申譯がない、平兵衛が心得ちがひぢや。

心得違ひぢやない、心得違ひぢや、矢張心得違ひかい、うんにや心得違ひでないわい。

侍は義のためぢや、女房兒も忘れるわ。職人は職のために、女房兒も忘れるわ、義のためぢや、職のためぢや、次男小僧惜うない、惜うない。——然うは行かん、可愛いわい。

これ、私がかやうな、私がかやうな、平兵衛のやうな意氣地なしに、あんな兒は出來んのぢや。慈

母、主が兒ぢや、慈母、主が兒ぢや。

主が兒を、主が兒を、盜坊にして、濟まんのおぢや、申譯がないのおぢや、堪忍さつしやい、堪忍さつしやいよ、堪忍してくれ。くれるか、くれる。くれるといふかい。くれてもなんにもならんわい、次郎坊主は牢から出んわい、暗い處を出ては來ん。

兒を暗い處へ遣つて、私が目を拜んで何んになる。はあ、お月様か。

うろくくと定まらぬ、瞳に仰ぐ暮の夕月、しるしの松に淡き影、烏の色の黄昏に見えずなり行く點灯頃、里遠ければ、螢かと思ふばかりの燈も見えず、低く流る、傍の小川、やがては星が映るであらう。

「あ、月か、世は暗ぢや。私が暗ぢや、暗へ行くのおぢや。慈母、主も輝け、死んだらば、私も光つて、鬼火合はせた明でな、次郎坊が暗を照らして遣るのおぢや。」

「もし。」

とばかりで、左右なくは縫りもならず、留めも得せず、おろくく、平兵衛が塚の上を兩手で撈る背後の松に、月の羽衣かけたる狀に、姿を見せたはお米であつた。

平兵衛が土を搔い攪む、力餘つてよろめくまゝに、腕の下から差覗くやうにして、

「もし、何を、何をなさいますの。」

と、いたく急いた風情がある。

それでも夢中な袖を引いて、二三度竊と引き動かすと、忽ち愕然として兼長、手を空さまに釣つて、

「はあ、これは。」と、又きよとく。

「どう遊ばしたの、どうなすつたの。」と容體を豫て知れば、病人に齊眉くやう、幼兒をすかさやう、深切に且つ物憂しく。平兵衛は以ての外見分がついたか、慇懃に、

「はいく、これは何處のお嬢様か姫様が存せぬ。あ、お美しい。何と、お嫁入前、出世前のお身體で、我等如き、我等づれ、恚やうに下り果てた人間に、勿體ない、怪我にも手を觸るぢやござらぬ。」

と、これも小兒を諭すやう、おのづから眞情の籠つた言も、思ふ男の親ならずや、お米は直ぐに胸一杯。

四十九

片手を袂に縫りながら、お米は右の襦袢の袖、見えないやうに涙を拭ひ、

「何をおつしやいます、勿體ないとおつしやつては、私に罰が當りますよ。貴父、あなたは兼さんの父上ではありませんか、ねえ父上。」

月の下なる其の姿、月の都に召さるべき、月恥かしき身を以て、前にみづから咎人の姉と名告つて憚らなかつた娘の、此のあはれなる平兵衛を、父と呼ぶに何かあらむ。一心に思ひの籠つた、含み聲の内端なものも、骨髄に入つたのと覺しく、平兵衛はじめて瞳を定め、危みながら差向けた、お米の顔を熟と見て、

「父爺とおつしやる、父様と、や、氣が違はれたか、飛んでもない、私がやうなものに、そんな、そんな娘のあるわけはござらぬがの。」

「貴下こそ。」

おん心狂へるを、とお米は思はず聲曇らし、

「氣が違ひも何んにもいたしません、父上、あなたの娘ですよ、米ですよ、嫁でござります。」

と言ひさして、顔の色は蒼うなつた。

兼長は、据ゑ眼で傍目も觸らず、

「嫁？嫁ぢや、誰方のぢや。」

「あなたの、父上、兼次さんの。」

「はい。」

「誰が媒妁人をしたのぢやらう。」

と本心らしく、不審さうな。

「津田屋の米でござんすよ。」

と、はじめて言つて面を伏せた、此時まで津田屋と言ふのを憚つた、お米は高作の妹である。

仇の末と思はれよう。振離されよう、突退けられよう、としつかと絶つて、

「お扇さんが、あの、此の土の下にいらつしやいます、扇屋の姉さんが、かきおきをなすつて、

お媒妁人をして下さいました。」

平兵衛は狂へる耳に、聞き澄まして、

「や、それでは津田屋のお嬢様か。」

「はい。」

「お。」

と言ふと手を取つて、

「お手を頂く、お手を頂く。あなたには何とも申しやうもござりませぬ。此、此の度の御心配、えらい御恩を受けました、勿體ない、お手を頂く、あ、頂きます。平兵衛頂くでござります。」

勿體ないが、嫁ぢや。」

「父上。」

と縄りつけば、搔抱き、

「慈母、此の嫁御見さつしやい、私が娶つた花嫁ぢや、お扇めが媒妁よ、兼次の嫁ぢや、見さつしやい、見たか慈母、見ゆるか、む、主は天上か。」

と言つて月を仰ぐと、お米を抱いた手を離した。

川千鳥が啼いたのである。ちり／＼と二聲三聲、枯野に冷き絹をのべた、川面かけて、松の梢に、ちら／＼、ちら／＼、虚空に白き氣勢であつた。

平兵衛は恍惚として、しばらく松影を見入つたが、慌しく其の調子が變つて、

「え、枝が折れた、一枝ない、折りをつたな、誰ぢや。」

巡査か、高作めか、あ、氣にかゝる。

石塔立てる心願も、家が左前で手が届かず、可哀や旅をかけた女房を、知らぬ土地の伊勢の土で、土饅頭にして置くわ。

幹は枯れても枝は榮えい、葉は繁れと、右へ左へ末廣がり、主が記念の扇の松ぢや。

左の枝が一枝無い、無い、無い。折れた、折られたぞ。む、次郎助は助からぬか、一生涯盗賊の名は消えぬか、埋木ぢやな、埋木ぢやな、枝はないかい、ひと枝ないわ。」

とハタと縄つた松の幹に、染み入る月の冷き影を、むすと掴むで、目を射す縁を差覗く。

「父上。」

涙ながら袂を曳いても最う分らず、こゝに白銀師の星墜ちて、松の樹の間に徘徊へり。

お米は見るに身も世もあられず、胸をせめて、繻珍の帯の、もみぢの色彩散り敷くばかり、

「お扇さん。」

と泣聲で、塚に其の身を摺りつけた。

五十

「お扇さん、貴女はお羨しい。」

あなたは疾く死んで了つて、こんな、こんな悲しい思ひは、なさらないで済みました。

直々お目にかゝつたことのない私を、優しい、深切な女だ、とおつしやつて下すつて、兼さんや、弟さん、皆様のことを頼むつて……然ういつて、お扇さん、私や、私や、身にかへて心配を

しましたけれど、不可いんですもの、出来ないんですもの。

貴女、貴女でさへ、おもふやうにおなんなさいませんものを、こんな、私にどうなります、どうなりませう。

御覽なさいな。

御覽なさいな、私が行届きませんばかりに、弟さんはお可哀相に、牢へ入れられてお了ひなすつたではありませんか。

父上さんは、御覽なさいな、姉さん。

こんなで入らつしやるんですもの、私、私。

と咽入りながら、

「私、兼さんに、いひわけがないんです。

私の、私の顔を、御覽なすつちや、嬉しさうに莞爾々々なすつた、祖母さんに、どうしてお目にかゝられませう。

先刻も私、もうあなた、殺されても歸らない氣で、東條様へ、駈込んで、お頼して、お頼して、それでも、しかたがないんですもの。い、返事を聞かうと言つて、一緒に車を飛ばして来て、近所の茶店で、氣張つて居て下すつた、扇屋のおかみさん、松吉さん、其の方だつて、おめく顔が合はされないから、わき路から、遁げるやうにして、あなたの、あなたの御墓へ慫うやつて来たんですよ。お扇さん、私どうして、どういふ氣で、此處へ来たか御存じですか。私は、あなたが羨しい。

慫うと知つたら、兄さんが、香合の、香合のことを背いて下さらなかつた時、すぐに、あなたの、あなたのさきへ、死んで了へばよかつたのに。

お扇さん、お羨しい、お扇さん。

兼さんはどんなにか、あなたのことを、泣いてばかりおいでせう。

あなた、私が、私が可愛くつて、兼さんに添はして下さいます、お心だつたら、なぜ、早く媒妁して、何事もないさきに、お世話なすつて下さいません。

母さんは、お亡くなんなさうつてか、早くから、お嫁入りの着ものだけは拵へておいて下さつた、こんな私でも、せめて、あの、振袖きて嫁きませうのに。

妹が縁づいた、お舅の、お拵へなすつたものと思つたら、いくら、あの、兄さんだつて、庄さんの言ふこと背いて、千鳥をこはして、黄金鎖をこしらへようとはしないんですよ。

私、おとしよりを何うしよう。父上を御覽なさいまし、お扇さん、御自分ばかり、い、事して、私や、ほんとに辛うございますよ。」

と、餘りのことに端なく、墳を抱いて姿を曲つた。揺ぶるやうに身悶えすれば、墓も齊しく打揺らいで、松影颯と啼き落す、月の空の、千鳥を聞け、静な月夜も動くのである。

樹憂無
思ひ直して涙を拂ひ、

「あゝ、愚癡です。餘りだから、つい、私、堪忍して下さいまし。父上にも母上にも、お許しを受けないで、兼さんの許へ嫁くんですもの、お叱りなすつて、もう見ちや下さらないかも知れませんが、冥土ぢや、あなたが便り。そして一緒においでなさいます、兼さんの母さんにも、あなたが、よくね、お執成して、ふつ、かな處は、どんなにもお叱りなすつて、可愛がつて下さいますやうに、目をかけて下さいまし。」

お扇さん、私もう死ぬより他に、届きやうはないんですから、御一緒になるんです。死效もないけれど。」

と、覺悟に澄んだ瞳にも、思はず又ほろりとして、

「死ぬのが唯一、情だわねえ。」

澄まして扱帯を解きかけた、わがねる心の松の枝。

「あ？」

と唐突に呼ぶとともに、お米は、飛びついて、

「あれ、父上。」

平兵衛が流を望むで、一文字に駆け出さうとしたのである。

五十一

縫り留めても狂へる力、浮草ならぬ根をたへて、月あかりにさそはれて、ともに引摺られさうなのを、片手に松を抱きながら、帯際をしかと壓へ、玉の腕のしびる、ばかり。

「私、どうしたら可からうね。」

「此處に。父上。」

矢庭に男の、けた、ましい聲。

涙にくらんだ瞳にも、戀は明き月の顔。

「あゝ、兼さん。」

「お米さん。」

と兼次も、目は血走つて居るのであつた。

「あゝ、あゝ、嬉しい。兼さん、好い處へ来て下さいました。押切つて駆け出さうと遊ばすから、私、留めても力がない。危なかつた、危なかつた、兼次さん、」

と取縫りたき男に忍んで、舅のうしろを庇へるなり。

「然うですか、お庇です。父上、確乎して下さいよ、氣を落着けて下さいよ、僕です、父上、兼

次です。」

と涙をかぶつて見せた顔、偏に熟と見たばかり、ものいふ唇も動かなかつたが、其ま、力が抜けたのである。

「まあ、可かつた、」

とお米はホツと呼吸をする。

「助りました、難有う。一晚中駆け廻つて、どんなに捜したか知れないのです。眞個にあなたのお庇だ。」

目前父が救はれた嬉しさに、酔へるが如き面色だつたが、氣が静まると、心付いたか、

「お嬢さん、」

と屹と見ると、怨めしさうな目をそらして、

「あなた、……だつて、そんな事を、おつしやるものぢやございません。」

「……」

「私は死ぬんぢやありませんか。」

と兩手に握つて掌を溢るゝ、背負上の紅絞りに、眉を隠して崩折るゝ。

兼次も色が變つて、

「貴女、それでは其の帯で、あゝ、弟の事に就いて、御心勞下さいました事も、よく知つて居る、弟は不可ません、父上は恚うなんです。」

「僕も父を捜しく、死ぬ氣で此處へ來たんですよ。」

「えゝ！」

「僕はよく分つて居ます。僕等の、僕等のこんな有様を、生きて見て居るに忍びない、何ともいへないお心でせう——、あなたさへ既にそれだ。……何うして僕が生きて居られるもんですか。」

「まあ、そして、貴下が然うして、祖母さんは何うなりますねえ。父上、」

とまた優しい手で、呼吸つき荒き平兵衛の背を擦つてお米が問うた。

「父上、」

兼次も、其の胸を撫でながら、

「老人は氣丈な方です、氣丈な方なればこそ、此の混雑の中にも、朝もちやんとお汗を拵へて下さるくらゐだ。死にはしません、弟、弟が牢を出るまで無事でせう。」

僕は、思ふ仔細があつて、此の時節に、依の家は一旦滅びて、次郎助と祖母さんとで、再び興る運命なんだと、悟りました。

お扇も犠牲になりました。僕もこゝで、犠牲になつて、父上、祖母さんの壽命萬々歳、弟の幸

福を祈ります。僕は實に意氣地はない、男子たる價値はない、此の悲哀を突き抜けて生きて通る路が見附りません。

が、お嬢さん、

「……………」

「お嬢さん。」

「存じません。そんな、水臭い事をおつしやるなら、お返事はしないで、さきへ死んで了ひますよ。」

「……………」

「兼次さん、私ともう死ななくても、あなたは思ひ留つちや下さいますまいねえ。」

「僕はだらしがありません、未來で禮がいひたいんです。」

白き炎、月裏法廷

五十二

「否、いひ置くことも、心残りも、貴下と一緒に死ぬんですもの、何が此の世にあるものですか。」

兼さんこそ、お老人があるけれど、私は何んにもありません。

唯ねえ、

憊うなれば、貴下の許へ嫁く時に、着て参ります、あの、お嫁入りの衣ものをね、おつかさんが拵へて置いて下すつた。惜いとは思ひませんが、一度あなたに見て頂きたう存じます。

ですけれども、かういふ事を、蟲が知らせたのでございませう。

今日、次郎さんの事をお願ひに行きますのに、そればかりが頼みですから、神様の前へでも出ます氣で、何んぞ綺麗な、手を通しませんものと思つたものですから、長襦袢だけ、其の、あの、お支度のを着て出たのでございます。

見て下さいな。……

これですよ。」

手なる扱帯の玉の緒かけて、振を返して颯となれば、牡丹を崩す緋縮緬、霜に落した影にこそ留南木の香こぼれたれ。果敢なき雪の膚を包めば、月さし染みて薄紅梅、着たる小袖も白すむで、髪の艶のみびゆるのである。

兼次のわな、く手の、竊と其の端を取るとともに、思はず姿は重つたが、よろめき分る、平兵衛の影を追うて、前後に亂れて、はつと分れた。

「は、は、は、何處の人か若い方たち、なかの好いは結構ぢやが、
洵や、何の見分けもつかず。」

「遊びほうけて、日が暮れたぞ。道が危い、歸らつしやい。あ、千鳥が鳴く、あ、鳴くわ、其の鳴いて行く方は死出の路ぢや、除けさつしやい。私が方へ來てはならんぞ、どれ、行かう、や、然らば。」

「あれ、」

「父上確りして下さい、確りなさいよ。どうしよう、お米さん。」

「兼さん。」

「父上が気がかりだね。」

「然うしてお置き申しては屹とお怪我をなさいますよ。」

「待つて下さい。」

兼次は頷いて、

「死ぬものは外にある。」

と懐から取出したのは、黄金の征矢の、お扇が咽喉を射たりし簪、黄金は月に然はなくて、鐵の矢竹のみ、血のあと蒼く、廢と燃えて、薄光りに輝いた。

「其の、背負上げをお貸しなさい。あ、成程、摩耶夫人様のお守護が入つたま、丁どい。」

父上を、お墓の松へ。」

「勿體なうございますね。」

「さあ、其方から其の端を、」

「堪忍して下さいませよ。」

お米は手繰つて目を瞑つた。

「は、は、は、」

もの寂しく打笑つて、平兵衛は松を抱いた、梢に居つらむ風情して、ちりくや、亂る、千鳥。

「は、は、は、兎にも角にも宗近が、兎にも角にも宗近が、御劍の刃の亂る、心……」

「怒りける處に……怒りける處に……」

靴の音を間近に刻むで、川添を月の人。四五人、脚の影を入交へて流る、如く衝と寄ると、眞直に此方へ折れたが、從々と此の塚の前。

二人は平兵衛を抱くが如く、背後へ廻つて、身を潛めた。白張提灯、手向の花、お米の袖も得

隠れたり。

階子の如く大きく背負つた、長方形の卓子を、墓の前へ昇き据ゑると、一團の霧は月の前に翳

へつた、白き布を、引伸ばして、左右から、其の卓子を蔽うたのである。
別に二人で一脚づつ、二脚の椅子を、一方へ並べて据ゑると、立かゝつて位置を見て、置直し
て、四五人の影は其まゝ、ちら〜と月に枯野の蝶と消えぬ。
神人來れり焉。

五十三

冠して、装束して、脊高き二人、肅として、對に並んで月下に立つて、やがて其の椅子にか、
つたのである。

佩劍の音鏘然として、一條、松の幹と入違ひに、地上に横はると見る程に、一名の警官あり。
他に尙二三の人の影、あるが中に小さきが、一足前へ出て留まつた、誰かは是を見紛ふべき、變
れ果てたる次郎助である。

啊呀と見遣る、お米の目に、其の判官の冠した、右なるは、東條六郎。

左の椅子は、法學士の檢事にして、尾形維明と云ふのである。

夜は早初夜を過ぎたであらう。冬枯の月中空に、樹の幹、小草の裏透くばかり、川の面も浮き
出でて、野よりも蒼く、倅立ち、神路山かけて伊勢の海まで、一點の隈あらず。

怒る時、美しきも醜きも、世にあるほどの形骸は皆眠り死して、清き曇りなき靈魂は、凝つて
一輪の月となつて、其の氣唳々として天に滿ち、醜く邪なる魂魄は、散つて、尾なき頭なき蛇
と化して、暗く、朦朧として地に潛む。

さて其の、月と、影とは、見よ、神路山の縁に由つて、明かに分たるゝを。其の森林の裏にこ
そ、高等法院は籠れるならずや。

されば一叢の杉の樹立も、神の都は尋常ならず、薄紫の霧に似て、こゝに搖曳して、目前審判
の廷を開きたるものの如く、人の姿は、いづれ、清冷なる五十鈴川の水を束ねたるに似ざるなく、
就中、兩個神聖なる法官は、神か鬼かを辨へず、其面貌其風采、骨髓凡て玲瓏として、姿にひだ
ある月の色は、乗り放つたる雲の名残の、なほ其の衣にかゝれるばかり。一場の光景は、月に人
影あるにあらず、月の影である、月それ自身の影なのである。

但足許に枯れ臥した、萱薄の一本、明らさまに亂れたのは、此の囚はれたる少年のため、
縦横、刃を植ゑたる如く、弓を伏せたる如く、わなを掛けたる如く、針を敷いたやうに凄じい。

こゝに、此の異様なる月の法廷は、濃き霜となつて凍らむか、はた白き風に化して飛び去るに
あらざるよりは、長に大水晶裏の一幅の墨繪となつて、世の終を待つべき寂寞、毛一筋も動かな
かつた。

時に、すつくと右の椅子より、正しく身を起したのは東條判事、森殿にして犯すべからざる音調以て、

「三重縣……町、平民、依平兵衛次男、次郎助、更めて尋問する、」

と聊か其の身を斜になり、

「其の方は何歳ぢや、」

「十四年、」

と幽に答へた。

「此處は何處ぢや、存じ居るか。」

「はい、」

「それで可し。其の方、如何にしても贓品を隠した處を申さんが、今晚は、別に其の方に尋問せん。本官から申聞かせる事がある、其の方、母親の墓の前ぢや、謹んでよく聞け、」

とて、懷中より、衝と一通の文を取出すと、心得て差寄つた、一名、蠟燭を點する人影があつた。

見向きもせず、其の蠟の火と、月の間に、さらりと線披げ、轟然として立つて、
「しるしばかりに候へども、彼の世に參る道しるべに、線香の煙も細く見え候。

最早、思ひ置くこともなく候ま、心靜に一筆かき残しな。不束にはかなき水莖のあとに候へば、御前様、優しきおん心におん判じお讀み遊ばし下されたく、申上げ候も、まことに身のほどを存せず、我は顔の女よと、おんさげすみのほどお恥かしく候へども、妾もの心覺え候てより、寐ぬる間も兼次さんの事、忘れ申し候隙とは候はず。

固よりいやしき身に候へば、行末かけて、二世かけて、と其のやうなる深き願ひはなく候ひしかど、夏の一夜のおん情にも、惜からぬ命と思ひつめ申候に、香合の千鳥の事にて、此のたびの御相談、他人とは思はず、とおん申し下され候お言葉胸に徹り、身に染みて、お嬉しく、命にかへてもと思ひさだめ候ひしが、おん察し下されたく、死ぬより辛き思ひして、其の願ひかなひ申さず、とても妾にてはと存じ候につけ、ひとへにお頼り申候はおん前様おん事に候。

世の人のうはさにこそ、おん前様み心のほども漏れ承り候ひし、お姿もさる折に、物蔭より垣間見參らせ候ばかりに候へども、一目おん顔を拜し候てより、妾、身にも命にもかへ難き、なつかしく戀しき御方は、何とやらむ、おんまへ様と過世の御縁おはしまし候やうに思ひ迷ひな。

何故とは妾も知らず、神様とてもおんわきまへ候はじ。
然は妾いやしき心に、兼次さんを戀ひおもひ候ほど、おん前さまを思ひ染めたりゆるに侍り。

わけもなく胸せまり、勿體なき事ながら、ひとり、おん前様お羨しく、果は嫉ましようも存じ
たり、麻覺の折も候ひき。物狂はしう候。然やうに、おん前さまと、なつかしき御方とは、過世の
縁おはしまし候やう思ひ込み候を、妾の口より、おん前さま、おん名、申し聞え、何心なき兼次
さんを、お逢せ申候やう申す、め候時の心の内、いくへにも御推量下されたく、いかに、その
外に千鳥を便る道なき事とは申せ、蔭ながら兼次さんを、おん前様におひきあはせ申候時より、
最早目は暗く、冥土を辿り申候。

すぐにもお暇乞と存じ候へども、おん心を騒がせ参らせ候罪おそろしく、そればかりに、浮
世をおもひ棄て、たゞ尼法師にもあひなり候。心にて、惜しからぬ露の命を、葉末の風に打ちま
かせ、弱々と煩ひをり候うち、情なや、また淺ましき姿を、道ゆく夜の人目にさらし候事出来
いたし、殿方のみ大勢とて、別に、押籠めおかれ候處にて、おもひかけず次郎ちゃんにお目
かゝり候が、其の時のありさま申上ぐるにさへ、胸いたく、腕もしびれ申候。

夢か現か、地獄の状、此の世にあらうとは思ひ候はず、人目の隙に、繩目のまゝ、涙の袖にお
抱き申し、膚にてあたゝめ候ひつつ、顔に顔さし寄せて、いたはり申候へども、妾とは御存じな
がら、人心地もなう、たゞ寒い、痛むとて、うつらゝ、膝枕のいぢらしさ。ひとへに摩耶夫人様
のお名を唱へながら、介抱いたし候うち、間もなく妾はおんしらべにとて引立てられ、あかりは

すぐに立ち候。それさへ果敢なく存じ候ばかり、迎ひ車にて歸り候をりから、お前さま、兼次様
霜夜の辻にお立ち遊ばし候をおなつかしく拜しなり。弟のおん事にて、御心配のほども察し入
り候へども、なかゝ無事にお歸りのほどは難かるべきやう、人も申し、妾も存じ候を、されば
とて此まゝに見過され申すべきか。

惜しからぬ命を棄て候は、此の時と存じ候まゝ、身にかへて次郎ちゃんの罪をあがなひ申候
其の後の新聞にて、おかゝり、おしらべの旦那様は、東條六郎様と申し候。名高きおん方にて
おはしまし候よし、見まらせ候まゝ、おん前さま、おいで遊ばし、妾が願ひおつたへ下され、
なにとぞ何卒、次郎ちゃんをお助け下され候やう、御きこえ頼上り。

心のうちの十がひとつ、筆にはつくしがたく候へども、眞實こめてかきのこし候へば、東條旦那
那様にも、此のふみおん目にかけて下されたく、何事もおもひ候はねど、たゞ、涙はふり落ちて、
筆の運びも覺束なく候あひだ、おん前様のお口添のみひとへに願ひあげたり。

おなじ命を棄つるとて、世にあるほどの人ならば、なほ効はあり候はむ、數ならぬ身の口惜や。
それも浮世に候べし。たゞ頼みなき戀のために、どうでも死ぬる命なるを、次郎ちゃんの事に
まで、兩路をかくるよ、と怨のやうに思召さば、いかせむ。そのみ心残り候。

なほおん前さまと、兼次さん御事は、其の月の夜のお姿にても、妾の迷ひの、迷ならで、實や